
わん・サイド・GAME 魔法少女を探せ！

時計塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わん・サイド・GAME 魔法少女を探せ！

【Nコード】

N9327V

【作者名】

時計塔

【あらすじ】

とある？魔法少女？と出会った少年は、それが自分の知り合いではないかと疑心を抱く。

なぜだかわからないが自分を避けるその？魔法少女？の正体を探ることで弱みを握ろうと画策する。

友達の少ない 人間関係の輪が閉じられた少年の？魔法少女？探しが始まる。

序章 犬も歩けば（前書き）

推理ジャンルですが異端です。

ただ、流れるには推理がメインかなという感じがしたので、まとも
に推理して？魔法少女？を探し出せたり真相に到達できるものでは
ないような気もするのですが、このジャンルにしています。

序章 犬も歩けば

犬も歩けばというけれど、良い意味でも悪い意味でも使われる。ボクなんかはかるたに描かれる痛そうな犬の顔を思い出してネガティブに傾いてしまうが。

でも、それが赤錆の浮いた泥塗れの鉄棒なら、うんと悪い方と言つて良いだろう。ウンコでもくつついてれば間違いない。

そして、もしそれが安全で清潔で頼もしく信じられないほどまるで魔法のようにキレイだったら、幸運と呼べるだろうか。

例えば、その棒がぶにぶにと柔らかかそうであったならば。

初夏の風に煌めく長い金毛を生やしていたならば。

凹凸の少ない純潔なボディーに、夢色を光らせる布を巻き付けた外装。若木が伸びるように細くしなやかな手足。

あどけなさの中にも強く前を向く。映じた蒼穹のままに澄み渡る瞳が印象的なまでに頼もしい。

ボクが当たったのは、そんな？少女？の形をした棒だった。

信じられない気持ちで、？少女？の横顔に見入るボクは棒立ちになる。

林に面した田舎道の景色が消え、葉擦れの音も、遠くを走る車の音も消え、温度が、匂いが、ボクと？少女？以外のすべてが消える錯覚に包まれる。濃密な空間に取り残された二人の間には視線さえも質量を持つのか、凜とした表情を崩し、見詰められていた？少女？がボクに振り向く。

そして　なんとも頼りない顔になる。いや、情けないと表現するべきか。　どのくらい情けないかと言えば、自分よりも弱そう大好き放題できると踏んで痴情の赴くままに性犯罪を犯そうとしたものの、？魔法？のように現れた？少女？に阻まれ間抜け面を晒す男の、股間からはみ出た棒切れくらいは情けない。すでにすっかり萎れているし。

現状を説明しよう。

要するにボクを襲おうとしたド変態が？魔法少女？に懲らしめられようとしているとされているのだった。

でも、もういいから帰ってくれないかな。

？魔法少女？とボクの間に来た神秘的力場に似つかわしくないと、その後を訪れたなんとも言い難い微妙な空気にもマイナスフェロモンなおっさんなんてお呼びでない。今にも喚き散らしそうな鬱陶しさが漂いだしてきたが、裏返った怒声で存在感を主張しようとしたって、その醜い身体を揺らして主役でいられたのは数秒前まで。ピギーピギー哀しく鳴く豚がせいぜいだ。？魔法少女？を呼び込むだけのために供せられた哀れな犠牲だった。

ここからは？魔法少女？の いや、ボクと？魔法少女？の舞台だ。そのためにはまず

「おい、こつち向け」

そこで見なかった振りして性犯罪者に見得切ってる？魔法少女？に小石をぶつける。

痛みなどあるはずもないのだが、ビクツと全身を震わせ、こわごわと振り向く。

数分前のことがフラッシュバックする。

人気がない道に立つ男。不自然なコート姿に嫌な予感がした。何事もなく通り過ぎようとするボクの動きに合わせてふらり、ふらりと揺れ動く。牽制しあう内に伏せられた視線に宿る粘つく獣欲やもぞもぞと動く下半身の辺りが目に飛び込んでくる。そして、逃走態勢に移れるギリギリを狙い澄まして男が欲望を解き放つ。

不快感と貞操への危機感が一気に上昇し、性犯罪を認識するその瞬間、突風のように何かが吹き込んでくる。

薄目を開ける前からわかった。小さな背中では確信した。来て欲しい時に駆け付けるこんなに頼もしくもミニマムな背中なんて？魔法少女？以外にない。

犯罪に巻き込まれたボクの緊張が解けていくのを視覚化してくれ

ているように？魔法少女？はゆっくりと動き出す。悪を打ち倒すのではなく、弱きを助けにきたのだと、安心を運んできたとそのことをしっかりと伝えようとボクの顔を見詰め

そこで今と重なった。

大きな瞳には不安だけが。

朱に染まる頬には羞恥だけが。

ふるりと震える口元には恐怖だけが。

安心を過積載してきた暴走トラックが横転、炎上、爆発、一面火の海の大惨事へと無残な姿を晒していた。見ている側に被害がないのが幸いだっただ。

？少女？が目を丸くし、滝のような汗を流してうるたえる姿は、かえってこちらの落ち着きを取り戻させてくれたほどだ。

ふと見れば、犯人はとづくに気絶させられていた。この？魔法少女？が驚いた拍子に力が入ってしまったのだろう。無残にも絡まった糸くずのようになって転がっている。本来ならば、？魔法少女？とそれなりに丁々発止のやりとりをしてから虫けらのように捻り潰されるくらいの権利は持っていたのかもしれないのに。まったく、いいざまだがな。

そして、男を意識すらせずに瞬殺してしまった？魔法少女？はいえ、ボクと目を合わせないようにしてもじもじと身体を振じらせている。おどおどとした態度が妙に犬っぽいと思ってしまう。格付けの済んだ後の、負け犬のようで。

そして、ボクもまだ冷静さを欠いていたとも言えるだろう。いくら犬をイメージしたとは言え、

「お手」

人間の姿をした相手に向かってそんなことを口走るなんて。

なんて馬鹿らしい。反射にせよ犬のマネゴトなんてするはずもない、本当の犬でもない限り。

しかし、広げた手の平にはひんやりとした感触が飛び込んできた。ばふ、と軽く握りこんだ拳をボクの手に乗せるその腕の先には、微かに涙ぐんでいる？魔法少女？があった。健気にボクの命令を聞くその姿を見て、

にやり、と顔面が歪むのが自分でもわかった。

犬を飼う時に注意すべき点はいくつもあるが、中でも特異なものに『凶に載せるな』というものがある。

犬は社会的な動物で、群れの中での格付けを非常に重視する生き物だ。そのため、『自分よりも下』と思わせると暴力的に振舞うことがある。人間も集団になれば似たような構図になるから理解はしやすい。さすがベストフレンド。

誤解しないで欲しいが、これは何も犬をいじめろというものではなく、円満な関係を築くためのヒントのようなもので、たとえば、自分の子供が飼い犬に大怪我を負わされたとして、貴方はその犬とそれまで通りの関係を続けられるだろうか？

意思疎通の難しい相手と付き合っていくのならば、必然、距離の取り方が大事になってくる。

人間も集団になれば個人の心なんてさておいて、まず目に見える形での力関係を第一に考えるものだ。善しにつけ悪しきにつけ、それが集団的生物が取るべき最良の形の一つだからだ。効率性に富み、安定性がある、多少の犠牲は全体の利潤のために切り捨てる。非情な機械のようだが、細胞というのは元々そのようなにできている。それが個体生物となった時に同様に扱われることを否定するならば全生物を否定することと同じだ。

だから、弱みを握った相手に対して、完全に下だとわからせるのは当たり前のこと。そして、その後は好きなように弄ばせてもらう。

卑怯だと言うのなら言えば良い。

清廉潔白で王道を往けるようなゴリツパな方々にこっちは用なんてない。

時には負けることも必要だとか大層な御託もたくさんだ。これ以上一度たりとも負けたくないヤツがいることすら想像できない脳みそが天国へ旅立っているようなアホの言う事を聞くななんて鼓膜の無駄遣いだ。聞きたくない。

負けたくない。完膚なき不敗であり続けたい。

この信条に不快感を覚え、そこまで負けて悔しい思いをしたくないなら、やらない方がまだマシだなどと言ってしまえるのは救いたいバカだ。

絶対負けない方策など、ただひとつしかないのだから。その単純な真理に気が付かないのであれば、既に負けた事実を目を瞑って、それからの一生すべてを負け犬に甘んじることしかできなくなるのだ。

負けたくないのならば、勝ち続けるべきだ。たとえどんな手段を使ったとしても、負ける要素など徹底的に排して万全の布陣で臨むべきなのだ。

恨めしげに見上げる敗者を踏み躪り、冷淡な風を吹きつける聴衆を撥ね退け、轟然と笑うに如くはない。

やるならば、一方的に相手を叩きのめすワンサイドゲームに限る。だから、助けてもらった？魔法少女？といえども、取るべき行動はひとつだ。

「ほらどうした？　しゃべれないんじゃないや、挨拶くらいしてみよ」

言外に「お前のご主人様と認める」と臭わせる。何がどうなっているのかまではわからなくとも、こいつがボクに逆らう気などまるでないのがわかった。仮に押し黙ったままでも、少し突付けばパーンと弾けてすべてを曝け出してしまったことだろう。後はほんの少し押し込むだけ。

だが、意外なことにアクションは向こうが先だった。

「わん」

子犬のような啼き声とも泣き声とも付かないちんまりとした一言だった。その時だけはまっすぐにこちらを見上げて、熱い息を吐きかけるような必死な表情になっていて、思わず降参して抱きしめたくなるほどの可愛らしさを感じてしまった。

予想以上の抵抗の無さに意表を衝かれたボクが何も言えずにいると、またしても先手を取られた。たった一語を発してから見る見るうちに真っ赤になった顔を覆うと、そいつはくるりと踵を返して駆け出したのだ。ひくひくと震えていた犯罪人の股座を踏みつけて。惨めつたらしく蠢いていたゴミムシもこれで完全に動きを止めた。

認めたくない敗北感が残った。先手を二度も取られたのはこちらに油断があったからだ。悔しさをやっとの思いで振り払うと、当然のような疑問が沸き上がってくる。

「しかし、あいつは一体誰だったんだ？」

ボクを見ただけで従順な犬のようになってしまった？魔法少女？その正体へ思いを馳せる。身の回りにあんな人物像は思い浮かばない。だが赤の他人とも思えない。つまり、普段は？魔法少女？であることをひた隠し、なにごともないように振舞っているであろう人物がいるということだ。

息を潜め静かに紛れているのだろうか。偶然に助けられ背景に溶け込んでいるのだろうか。ボクを嘲笑い、高をくくり、大胆にもその証を見せびらかしながら隣を歩いてでもいるのか。

そこまで一方的にコケにされていたとしたら、断じて赦すわけにはいかない。地に這い蹲らせ靴の先でも舐めさせて恥辱の限りを尽くすまで屈服させてやる。そのためにはまず誰が？魔法少女？かを突き止めることだ。それがわからなければ傲然と勝利を収められるわけがないじゃないか。

第一章 その1

「おい、犬神いぬがみかりん。お前、魔法少女だろ？」

土日を挟んであれから3日。考えあぐねた末に出した結論は、向かいの家の犬神かりんこそが、？魔法少女？だというものだった。

衝撃の事実を突きつけられた彼女はきよとんと目を丸くする。いきなりのもので何が何やらわかりませんが、でも言いたそうなるんとした腑抜け面だ。犬は3日も飼えば恩を忘れないと言いが、自分に仇為す男の顔は同じだけ会わないでいれば忘れちまうのか？ 半開きにした口をすり寄せ、いつものようにおねだりをしてくるかりんに思わず顔が綻ぶ。苛立ちと、それを解消する優越感が絡みつきながら沸き上がってくる。それは嘲りと笑みとなってボクを動かす。「小さい頃から一緒だったくせにまんまと謀ってくれたじゃねえか。大方、ボクが余所の町にでも行ってる間に魔法少女役をくわえ込んでいたんだろ？ その時もそうやってケツでも振って媚売ってたか？ えエ！？」

そう言っても、理解する脳がないのかあどけない双眸は曇らない。

昔とちつとも変りやしない。それが胸の表面を波立たせる。

小学6年から中学卒業に掛けて、ボクは生まれ住んでいたこの町を離れていた。その間のことは余り思い出したくもない。だが

あれはもう1年も前になるのか 高校入学を機に出戻ってきたボクが久しぶりに自分の部屋を開けると、すっぱりと抜け落ちていた空白が自然に埋まるような不思議な感触を味わった。戻ってくる前は他人の家のように感じるのではないかと不安だった猫魔ねいまの家も、自由気ままに走り回ることなどできないと思っていた武蔵剣むさしけんの町も、そして 変わらないわけにはいかなかったはずの犬神の家でさえも、3年間という隔たりがなかったかのようにそのままだった。

ボクは変わってしまったのに。

それも、変えたくて変えたくてどうしようもない　そんな部分だけは変わらないままに。

物憂い人の気も知らずに、色仕掛けで誤魔化そうとでも言うのか、この駄犬が。しかし、しつとりと濡れ上がった表情は並みの男、いや、たとえ熟れた女であったとしても抗えない蠱惑的なフェロモンを立ち上らせていた。

だが、ボクはきつちり5秒、その魔性の瞳と向き合って己に宿る意志の強さを示し、きっぱりと拒絶の意思を表した。お前のやったことはお見通しだと、かりんに自分が置かれている現況をわからせるため、ずいと体をせり出し圧力をかけて迫る。

「くくく……いいトシして怯えた子犬みたいな目をしやがって……どうやら魔法少女ってのは凶星のようだな」

首筋から口元へと舐めるように指を這わせてやると、久しぶりに味わう法悦にぴくりと反応を返す。自分から誘ってきたくせに。快感そのものに怯えるようなりアクションで完全にボクに火が入る。ボクの五指は硬く張り詰め、淫らな望みがパンパンに詰まった棒さながらだ。

欲望のハンドリングはすでに片手ではおっつかないほどだった。攻めているはずのボクの方がたまらなくなってきた。両手で彼女の白い身体を抱きかかえると、人目憚らずもつれ合って押し倒す形になってしまふ。かりんはと言えば、ハッハッと切れ切れになった息の狭間に獣性をちらつかせ、汚れるのも構わずに土の上へ横臥されるに任せていた。

荒々しく地面に抑え付け、なおもペッティングを続行する。ぷにぷにとした柔らかい感触を楽しんでいるとこの身体の虜になっていくのを自覚した。このままではいけない。すぐにも言葉で紛らわせなくては。自分を奮い勃たせるような淫らさで飾り付けてやる。

「どうした？　簡単にカラダを開くようになってしまったか？　オトコにこうされるのがご無沙汰か、この雌犬が。ふっ、お前がもし口が利けたなら、助けてと悲鳴でも上げるのか？　いや、ナいてよが

って快樂の悲鳴か？ どちらにせよ悲鳴なのか……くくっ」

下腹部へと指を這わせると、かりんはされるがままになって股を開く。思うがままに征服が進むにつれ、腹の奥底で嗜虐心が燃え上がっていった。このまま何もかも忘れて甘い蜜に溺れてしまいたい。自滅的な情感に支配されるがままに、覆い被さるような体位へと移行したその時

「なーにやってんのよっ！」

鼓膜をつんざく痛みこそあれ、聴覚ではなく触覚へとダイレクトにガツンと衝撃が襲ってきた。まるで声そのものが質量を伴っているかのようだ。最近の声は変わったものだ。宇宙人の仕業に違いない。

視界がブラックアウトして、惨めにもかりんの足元へとつつぷししてしまう。

「朝っぱらからの変態行為は関心せんなあ」

キュッとゴムの擦れる音と共に現われた別の声は、覚えがあるのに誰のものなのか咄嗟に判断が付かない。覚えがあることだけ覚えている。脳細胞がごそつと吹き飛ばされてしまったかのようだ。

目眩の誘う吐き気が朝食を押し上げてきたので、少し口の中に入ってしまった砂と一緒にぐくりと飲み込んだ。食材の卵に連鎖して、さきほどの声の主が朧な映像となって浮かび上がる。

からすま たまご
烏丸玉子。

細い脚の伸びる清楚な制服姿からはさらに細い腕が伸びて触れれば折れてしまいそうな指へと繋がる。華やかな顔立ちにふわふわとした栗色の髪を伸ばした洋画の子役のような女子が自転車を押して立っていた。年下に見えるほど未発達な身体をしてはいるが、ボクのクラスメイトで飛び級なしの高校二年生だ。

「まあ、夜が更けてても感心せんけどな。おはよう、まんまちゃん」
ほわっとした笑顔で軽く朝の挨拶。先ほどの声のハンマーとは似ても似つかない。玉子のは、声質だけならばもっと軽く、釘……毒針……違うな、もっと危険なもの。釘バット。それをフルスウィン

グでなくコツンと当たってしまったただけのようなずっしり、ちくり、それでいててんでたいしたことない感じだった。

未だ混乱した頭のボクのことなんておかまいなしに玉子は続ける。ただし、今度はボクに向かつてではなかった。

「あ、のはらちゃ」

んこれ、と玉子が自転車のハンドルを差し出す段になってようやくボクにも何が起こったかわかってきた。犬神家の飼犬である、雑種にしては白く美しい毛並みの大型犬『かりん』と戯れていたボクは、偶然登校しようとして表に出てきた犬神のはら16歳の、体重移動と遠心力によって大腿部をやや円弧を描くように前方へ射出し、膝を起点とした二段ロケット染みた再加速によって得られる破壊力を乗せた必殺の足刀を、視界の外から叩きつけられたのだ。

一言で整理すれば、「のはらに後ろから蹴られた」。本気ではないとはいえ、無防備な相手にしかも後頭部だなんて何を考えているのか。

「てめ、この……」

向き直って文句をつけてやろうとしたら、のはらは流れる仕草で自転車を発進させたところだった。スカート姿で豪快にフレームを跨ぐとフルアウターで踏み込む。物理法則の盲点を衝く奇跡の爆発力は一瞬でトップスピードへと鋼の塊を押し上げ、残像を残して飛び出していった。

走りながらサドルの調整までやってのけている。のはらの腰の高さに合わせたら玉子には踏み込めない。本来あるべき姿を取り戻すと、解き放たれた獣のように伸びやかに疾駆する。

ボクよりもいささか背の高いのはらは170センチの長身にスリムながら筋肉質な身体をしている。女性らしさというか体の凹凸に關しては2年生になった今でも変化していないが。代わりに運動神経は抜群の成長を遂げていた。颯爽と駆けていく後姿は見る見る小さくなっていく。

「くそ、後で仕返ししてやる」

「いやあ、まんまちゃん丈夫ねえ」

そうのんびりと言いながら、ずきずきと痛む辺りをさするうとする手から逃げる。

「なんだ、まだいたのか玉子」

「まだ……て。ま、どうでもええわ。ガッコ行こ？」

そうだ、登校するんだったな。通学路の道程でいえば1%にも達していない。ここは犬神かりん邸前、犬神家の玄関先。かりんの飼いい主であり、今ボクの後頭部を蹴りつけたと推定されるのが犬神のはら。目と鼻の先には猫魔家の表札の掛かった門構えがあり、ランドセルを背負って登校しようとしていたボクの妹がこちらを見ていた。

汚い物でも見るような目で。

年齢や性別は違っても、ボクとお前は双子のようにそっくりなんだぞ？ 小学生でありながらすれ違う男どもを振り向かせて止まない、そのキレイな顔はボクも持っているというのに。

「何を考えているか手に取るようにわかるなあ。あんたの心の中はゴミの島のように汚いだろうから」

「ふん、さつさとのはらのケツ追いかけてけよ」

「自転車もうないよ？」

玉子が乗ってきた自転車にはらが乗って行ったわけだから、算数的に当然な帰結だろとも言いたげにきよとんと首を傾げる。そして、そのまますたすたと歩き出す。

どの道、もう姿の見えなくなつたのはらを追いかけるのは無理か。仕方ないので憎まれ口でも叩いてくかと玉子の後をついていく。

「確かに、二人乗りをするような運動神経はお前にはないよな」

「そうそう、警察呼ぶ前に葬儀屋予約せんと、ってそこまで酷くない。のはらちゃんは早い時間に登校したいのに重し付けてどうすんの」

「ほほう」

ウエストの辺りをじっと見てやる。それに気付いた玉子はむっと

した顔で腹の辺りを手で覆い隠す。

「……人間ちゆうのは米1俵より重いものなんよ。勝手にバランス取ってくれるから実際よりも重く感じないだけで」

「1俵が何キロかなんて知らねえよ。それにしつかり決まった重さなんてあるのかあれ？ それよりのはらはなんか用事あったのか？」

後で調べておこう。こいつ意外とアホだから絶対勘違いしてるはずだ。1俵が60kgくらいだったら死ぬほど笑ってやる。玉子の体型は気にする必要があるどころかむしろ細かい方だと思うが、からかうってのは主観に則した方が効果がある。

「のはらちゃん、美術部に入ったから」

「美術部？ って絵を描いたりとかのあれか？」

「そ。スケッチブック担いでるのも様になってたでしょ？」

「そんな1日2日で貫禄なんて出ねえよ。それとあいつが急いでるのとなんの関係が？」

「朝練。絵描いたり、宿題にしたのを見てもらったり。顧問がおじいちゃん朝早いのが原因らしいわ。朝ゆっくりしてられるのが文科系の強みとちゃうかねえ」

「体力的には体育会系を遥かに凌いでるから良いだろ。あと暴力的なところ」

「うわ、ものすごい偏見よ、それ。全国の血気盛んな体育会系さんたちにタコ殴られるわ。今日も元気に性格悪いな、あんた」

「ほっとけ。いつものことだ」

「自覚ありか。余計性質悪いな。んで、自転車を買って登録が済むまではあたしの貸してるんよ」

うちの高校は駐輪場利用に許可がある。自転車に貼られるIDと照合するので、誰が乗っているかは関係ないそうだ。

確かに、急げば10〜20分は稼げる。それで講評くらいはしてもらえるのか。

「それもいいけど、二人乗りとかでさーションしてみろよ」

「二人乗りはいかんよ。警察捕まる。第一、コケるわ」

玉子はおつとつと冗談っぽくよるめいて見せる。

「二人乗り専用車とかあるじゃん」

あれだとアニメとかでも普通に二人乗り放送できんだよな。

「帰りの時間が合わんとなあ。一人であれ乗ってたら寂しいしなあ。ほんで、足が丸太みたいになりそう」

チラツとスカート裾を持ち上げると白い足が見える。ボクと玉子の間柄を説明すれば、単なるクラスメイトであり、気軽に生足を見せてくれる関係だ。ところで、常識的に考えれば、この烏丸玉子という女はボクと親しいということになるのだろうか。

ということとは、だ。烏丸玉子が先日の？魔法少女？である可能性が出てくるわけだ。

先ほどのはらが無造作に乗って行った自転車だが、あれは買えば70万くらいはする高級車のはずだ。自転車というのは凝り出すと金をどんどん吸い込んでいく。そして、そんな高価な自転車をあのがさつな女にぽんと貸し与えているというのからもわかるが、烏丸玉子の家はかなりの大金持ちだ。

玉子の弱みを握ったとすると、その莫大な財産をいつでも使えるそれはもう七色に光り輝くキャッシュカードを手にしたも同然といえるだろう。金の力は大きい。玉子を手駒に加えるメリットは果てしない。是非とも手に入れたいものだ。

ところで、この烏丸玉子は？魔法少女？足り得るだろうか？

烏丸玉子の身長は低い。とはいえ、平均的女子高生からしてみればというだけで、先日の？魔法少女？ボクの中では『犬娘』と呼ぼうかと思っている。のような小学生でしかありえないような幼児体型ではない。目鼻立ちといった見た目ももちろん違っている。漫画やアニメで衣装くらいしか変わっていないのに正体がバレないなんてのもあるが、あれは読者や視聴者にわかりやすくしているだけだろう。もしくはコントだ。

そもそも、？魔法少女？とはなんだろうか。『魔法を使えるから魔法少女』。その定義はシンプルでわかりやすい。だが、一点文句

をつけるとすれば『魔法なんてこの世に存在しない』ということだ。『おじいさんはおばあさんです』とかそのくらい馬鹿げた定義といえる。論理的というのは内部で完結しているだけでは足りないわけである。

だから、ボクらの現実では、『魔法のように少女へと変身できる者』ということになる。「魔法のように」というのと「魔法で」というのは天と地ほど、マジック手品とマジック魔法ほど違うのである。

では、『魔法のように』という要件はどうやって満たしたらいいのか。『高度に発達した科学は魔法と区別がつかない』という言葉があるが、なるほど、中空に巨大な像を映し出すプロジェクターを中世に持っていけばどのような神の称号も思いのままだろう。ある時点においては科学は魔法足りうると言える。ただし、魔法といえるかどうかは、発達が不十分である側の進度によるだろう。

文明の断絶がなければそのようなことなど起こり得るはずもない。オーパーツという名のただの遺物に過度な夢を描いてしまうのもその断絶がなせる業だ。

しかし、科学は啓かれ、オーパーツも品切れとなったとしたら？魔法？はどこから生まれ出れば良いのだろうか。

結論から言えば、宇宙からだった。

20世紀半ば、地球は異星人に侵略された。

詳しくは省くが、どこかの誰かが科学を頭から追い出した状態で空想したような陳腐な宇宙船に乗った侵略者たちは、人間が創造したあらゆる兵器をもってしても足元にも及ばない？魔法？使いたちだった。それでも国の威信を誇示することや、未知との遭遇が醸す恐怖にも抗しきれず、荒唐無稽な作戦を繰り返し、つまらない死を積み上げていった。

しかし、すべての人類勢力が抵抗を止め白旗を上げた時、もたらされたのは破滅でも暗澹たる奴隷世界でもなく、今までと殆ど変わ

らない生活であり全ての人が求めてきた秩序だった。伝聞でしか知る機会のないボクラにはピンとこないが、それはもう拍子抜けするほどの穏やかさだったようだ。交戦中は人間という種の絶滅も覚悟していたというのだからおっかない話である。

もつとも、異星人の支配に屈しないというスローガンを掲げたゲリラ活動は今なお続いているので、全人類の降伏と言ってしまふと問題はあるのかも知れないが、知ったことじゃない。

そのようにして地球文明をそっくり取り込んだ形になったわけだが、当初は多少の混乱もあったようだ。それは負の側面だけではなかった。新たな友人たちを歓迎する矢鱈に前向きな人たちや、異星人が駆使した未知の技術を継承できるのだと喜んだ科学者たちもいた。……いたことはいたらしいが、肝心の異星人サイドはどこ吹く風で、地球人との交流は表向き皆無と言ってよく、自分たちがどこから来たのかすら明かしていない。また、地球文明を奪い尽くさなかった代わりに、あちら側からも何一つ与えなかったので、当然のことながら科学技術は地球人類が自分たちの手で進める他なかった。

その地球とは異なる星に住んでいたのかどうかすら定かでない異星人とはいえ、支配している様子はまったくなくせに、なぜか政治を司る場所の上空に宇宙船を停泊させていたりする。ちなみに宇宙船はガラス張りでもないのに光を遮断しない技術が使われている。日照権の訴訟が起こったという話は聞かない。

調印程度なら各国のリーダーと交わしているとかも噂されているが、一度会ったら記憶は消去しているなんて噂もセツトになっていて、舌の上に僅かに残る地球上のものでない味だけが今も平和であることを保証してくれている。……というような話も出回るくらいで真実はわかっていない。

何を求めるわけでもなく、ただただ存在し続ける、そんな彼らだったが、ある時空からぽこんと降って湧いたようにまき散らし始めたのが？魔法少女？だった。

可愛らしい外見で悪を成敗するという触れ込みで、実際にその活躍を録画した映像が流されたりして当時は沸きに沸いたそうである。ここまで聞けば、異星人の超科学で犯罪者を懲らしめるなら警察は要らなくなるかと思うだろうが、これがなぜか性犯罪専門の正義の味方だったのである。強姦、痴漢はもちろん、覗きに露出に盗聴盗撮下着泥。どんな性犯罪もたちどころに解決するスペシャリストだった。

対人戦闘においては強力無比な実力を示し、独自に構築した監視システムによって、犯罪発生と同時に出勤可能とあつて、実際に対性犯罪に関しては大きな被害が出る前に100%食い止められるという？記録？も残している。

可愛らしく優秀な？魔法少女？たちだったが、「監視システムというのは、地球人類すべての行動を盗み見ているのか！」と当時はかなり問題になった。現在も相当根強く反対はされているのだが、心配されるようなプライバシーの流出は絶対に起こらないと、あちら側から異例の宣言が出され、何より成果が大きすぎたので無視されてきている。

しかし、この魔法少女システム、殺人や強盗などの凶悪犯罪に対してはまったく用いられていない。

当然これには地球人サイドからの疑問不満が噴出し、魔法少女システム発足時の騒ぎがそっくり掌を返したように「もっと監視を強めてくれ」という大規模デモが発生するようになった。しかし、当然ながらなしの礫である。

余談だが、プライバシー流出がないとの宣言内容については、殺人犯がいつまで経っても捕まらなかつたりといった事実が、皮肉なことに説得力に貢献しているようだ。どこかで流出していれば利用していないはずが無いという地球人側に都合の良い推測に基づいてはいるけれど。

性犯罪以外への非対応については、過干渉を避けていたのだから当然であり性犯罪に関しては何か特別な理由があつたのだとか、な

んでもかんでも実力行使してしまうことで事を荒立てたくはなかったんじゃないかとか、様々な憶測も飛び交ったようだが例によって例の如く、真相は知る術がない。

というのが現在の地球における？魔法少女？のあらまじだが、今ボクの横で気の抜けた顔をしている少女はどうなのだろうか。

「まんまちゃん、今日も猫まんまだった？」

「ハムエッグにトーストだ。ボクがいつも猫まんまばかり食べているかのように話すなよ。そんな事実はない」

『まんま』というのは、ボクの名前と猫まんまに引っ掛けての渾名だが、そう呼んでいるはこいつだけのようない気もしいでもない。そもそもボクに親しく話しかけてくる知人が少ないのだが。

しかし……と改めて自分の交友関係の狭さを考えると頭に隙間風が吹き込むような気持になる。寂しいとかそういうことではない。

昨日の『犬娘』のことだ。

便宜的に？彼女？としておくが、？彼女？があればボクに怯えていた理由がわからない。正体がバレたという前提ならともかく、普通にしている限り絶対に？魔法少女？の正体なんてわからない。それに、バレたとしてどうだというのだろう。？魔法少女？には守秘義務があることは知っているが、守れなかったからといってペナルティはない。

つまり、何らかの個人的事情が絡んでいるのだろうが、後ろ指指されるならともかく、化物を見たような顔をされるのは心外としか言いようがない。

玉子にしても、今のところあいつがボクに正体を知られて困ってしまうなにかには思い至らない。

などと考えていると、武蔵大橋に差し掛かる。4車線に歩道付きの武蔵大橋を渡ると学校のある周良町側しゅうりょうに完全に入ってしまう。武良河けの広さ深さと相俟って一種国境的にも感じてしまう。越境する寸前、携帯電話にメール着信の信号がきた。

第一章 その2

【件名】 おはよう

青い空！白い雲！

今日も爽やかな一日が始まるね

こんな日には、僕が君に贈った

ストライプブルーのパンツが

よく似合うんじゃないかな？

おっと、お揃いにしたいからって

ブラを買うのは待ってくれよ

キミにはまだ早いつていうのもあるけど

最高に似合う初ブラをプレゼントするという

今の僕の最高の楽しみを奪わないでくれ

じゃあね、マタギちゃん

ああ、そういえば今日はシマシマのトランクスだったな。白と水色の。送られてきたメールを見て、げんなりと思いつく。念のため確認しておくとするれば、ボクは男だし、大胸筋サポートでもない女性用下着　ブラジャーを着用するような特殊な趣味はない。

このいかれたメールの送信者は牛頭しゆハンスという男だ。

言及すること自体馬鹿らしいのだが、ボクにソツチの気はない。

至ってノーマルな性癖だ。

そして、ボクの名前はマネキだ。猫魔ねま福来まねき。福が来ると書いてマネキ。今は亡き父親はマネキ猫で福を呼びたかつたらしい。

誠に遺憾ではあるが、男にラブコールを送られることは否定できない。小柄で女顔をしているので、女に間違われたり、間違われなくても美少年好きから一方的に言い寄られて迷惑するなんてしょっちゅうだ。まあ、それはボクの責任じゃないし。しかし、牛頭に関

しても、ボクの性別を知らなかったりホモセクシユアルというわけではない。

では、このメールはなんなのかというのと、実は妹の再来^{またぎ}宛てだ。再び来ると書いてマタギ。今は亡き我が父よ、あんたはちよつとおかしい。

マネキとマタギ、一字と半分の間違いだ。メールアドレスというのはいままで単純に間違えられはしない。ちなみに、アドレスはそれぞれ、ボクがhappy-neco285@XXXXXで妹はcatt-returns285@XXXXXだ。末尾の285はニヤーゴという我ながらベタな猫の鳴き声中でしていたのだが、偶然妹も同じことをしていたと知った時は首でも吊りたくなつた。とくかくマネキとマタギを間違えるような真性のド阿呆でもこんなもの間違えようがない。

ボクの可愛い可愛い妹のマタギ。ただし顔だけ。ボクによく似て美の女神の祝福を余すところ無く戴いた完璧な小学生。まあ、いくら似ているとは言っても、さすがに片割れであるボクも高校生だ。見間違えられることは無くなってきたけれど、父親には1回だけ間違われたことあつた。本当に親失格だ。

中身に関してはあいつと似ているつもりはこれっぽっちもない。「顔がいくら良くて性格が最悪じゃあな」とは、お互い様に思っていることだろうが。

そう、ボクは可愛い。鏡を見るたびにそこに立ち現れるのは、澄まして、おどけた表情を作っても、天使のように男女問わず魅了する美顔だ。たまに自分でも見蕩れてしまう。

これだけ可愛ければ性犯罪被害発生率が常人の数百倍であつたとしても不思議でもなんでもない。物心ついた時から、つい先日に至るまで変態どもの目から逃れられた日はない。しかし、いくら容姿が完璧だと言っても、これはもう呪詛や体質の問題としか思えなくなってくる。非科学的なことこの上なく、不愉快だ。

マタギはこの被変態体質までは受け継いでいなく、兄から見ても

実ののびのびと育っている。

ところで、野菜というのは消費者に届くようなものは形が整うように強制されているものが多い。自然に育つに任せると外的刺激を受けやすく、ちよつとした原因で歪に成長してしまうからだ。

野菜程度でそれなのだから、数倍の時間を複雑な環境で生きる人間というものは、たとえ性的トラウマを持たなくても歪曲してしまうのは仕方ない。

もっとも、あいつはどちらかという性的に虐める側に立つ人間だ。小学6年にもなってブラも着けていないのは、世界の意志が「まだ間に合うからもうちよつと……その、がんばれ」と告げているに違いない。実の兄から言わせてもらえばとつくに手遅れだが。DNA的にそこまで大きくはならないと思うが、いずれは道を歩けば男どもが傳くようになるだろう。

毛も生えない内から将来の夢に『悪女』と書き、その意味もきつちりわかっていた筋金入りの妹。この先あいつと出会う男性たちには同情を禁じえない。食い物にされるのはそいつらの責任だが。

まあ、悪女になりたいなんてことを思い描いているのも、暴風雨のような性の陵辱を受けていないからともいえる。ある意味、無垢な妹なのだ。

そんな汚れなき妹の汚点となる危険性を孕んでいるのがこいつ、牛頭ハンスだ。

小学生に本気で恋する17歳を一言で表すなら、救いがたいロリコンだ。いや、牛頭とマガギが初めて会ったのはボクが中学に上がってすぐのことで、しかも一目惚れだというのだから弥勒菩薩でも救えないペドフィリアなのだろう。

ストライプブルーパンツは、届いたその日、灰になった。

【件名】 Re:おはよう

なあーに言ってるんですか。だめですよ。朝からエッチな話題はせつかくいただいたのですけど、やっぱり穿けません。

特別じゃない日に穿くのってもつたいなさすぎます。

妹の口調を真似て返信する。

青い空に白い飛行機雲が掛かったあの日、火にくべられた布切れが黒と灰色の欠片となって宙に舞い、そしてボクは牛頭とマタギとしてメールをするようになった。

牛頭はすっかり騙されていて嬉々として延々と無為なメールを送りつけてくる。精神衛生上省略しているが、胸焼けするような甘ったるい顔文字・絵文字満載のメールに心底うんざりする。妹との契約でなければ即刻打ち切ってしまいたい苦行の日々だ。ひよつとして今までマネキとして牛頭とした会話の分量以上にメールしているんじゃないだろうか。

「待てよ……」

そうだ、牛頭とはマネキとして面識もある。マタギとして毎日メールしているほどではないにしても、知人と言ってもいいレベルではあるだろう。遠くから見ただけだった牛頭と妹を接近させてしまったのもボクという仲介があったからだ。

あいつのメール件数は異常だ。今後いちいち受信送信は書かないが、日に3桁に上ることも少なくない。友情など感じていないので友人と呼ぶのに抵抗感はあるが、あいつからしてみればボクに対して友誼を抱いている可能性もある。

『義兄さん』とか思っていたらたまったものではないが。

何を言っているのかというと、牛頭ハンスに？魔法少女？の推定が働くかどうかということだ。

もちろん牛頭は男だ。

同年入学のボクと同年。進級できていれば2年生ということになる。牛頭は現在不登校中だ。ひきこもりではない。むしろ家に帰っていないらしい。

猫魔再来専属ストーカーの事情はともかく、「男であるならば？魔法少女？っておかしいだろうか？」という疑問が湧くのは当然だ。

？魔法少女？について無知であるならばそう思っても致し方ない。だが、注意して欲しいのは、ここでの？魔法少女？の定義とは『魔法を使ったかのように少女の姿へ変身する』ことなのである。リボンが付いたただの外れただの、髪の色が変わるだの、衣装が奇天烈になるだのといった事柄は瑣末に過ぎない。？魔法少女？の変身は変装なんてものとはそもそもモノが違う。

宇宙人は？魔法少女？のアニメだのを見て思ったのだろう。

『姿を変えるのは身元を特定できないようにするためのものだ』

だから、？魔法少女？の変身というのは、見た目を原型が分からないほどに変えてしまうものになった。それが女から女だろうと、男から女だろうと関係がない。

最初に？魔法少女？が登場した時は皆が皆勘違いしていた。あまりにも自然に動き回る愛らしい姿に？魔法少女？への先入観が植えつけられてしまっていた。だから、衝撃の事実として明かされた時も中々受け入れてくれなかったらしい。

しかし、？魔法少女？の手記を読めば、かなりの割合で男の？魔法少女？が誕生していることがわかる。

秘密主義を取っている？魔法少女？は公に開示される生の情報があまりにも少ない。しかし、？魔法少女？が運用され始めてしばらく経った頃、ぼつぼつと？魔法少女？自身が記したとされる手記が発表されるようになった。？魔法少女？としての活動を含めたその人の日常を淡々と時に生々しく綴られた手記は？魔法少女？の調査・研究に役立てられている。

もちろん、すべての？魔法少女？が自分の正体を明かすようなことを選択するわけではない。それでも、視聴率調査と同じくらいの信憑性を持つに至る程度のサンプル数がある。

一例を引用してみる。

今日から魔法少女になった。この日記を誰かが見たら書いた奴は頭がおかしいと思われるんじゃないだろうか。世間を賑わせている

あの『魔法少女』が俺だなんて。

いや、それは少し正確でないか。俺の魔法少女デビューはまだだ。昨日までの俺を含めほとんどの人間が思い違いをしているが、魔法少女は一人じゃない。

ちよつと考えればわかることだが、地球上には数億の人間が暮らしているわけで、同時に事件が発生することもある。それでも魔法少女はすぐさま現場に駆けつけなければならぬ。性犯罪根絶を謳った魔法少女が一人じゃ、賄い切れるもんじゃないだろう。

でも、俺の魔法少女… ややこしいな。『俺』が世に出たらきつと皆間違いに気が付くだろう。

しかし、魔法少女が一人だけと考えられていたのも無理もないとも思う。それくらい同じ姿かたちを取っていた魔法少女でありふれていたからだ。もしかしたらメディア側がそのような印象を持つように情報を取捨選択しているだけで、実際には違う姿の魔法少女もいたのかもしれない。

俺もその一人だからだ。俺はあることか、かなりアダルトな魔法少女へと変身することになった。おっぱいぼーんのウエストキユツのヒップずきゅーんという感じだ。

いや、俺も世間一般の魔法少女を見たことがあるし、そういうイメージもわからないでもない… ないけど、俺にとつての魔法少女ってのはあんなロリロリで萌え萌えな小学生みたいなんじゃないやなかったんだよ！ あれはどつちかというに変身前だろ？ 魔法少女が変身して、こどものままだったらおかしいじゃん？ きゅーつと背とか髪とか伸びて、少女が憧れるような大人の女性になっていくのがイイわけだろ？ 宇宙人含めて頭おかしいんだあいつら。

常々そういう不満を抱えていた俺は、初めて鏡に映った脂の乗り切ったアイドルみたいな肢体を眺めて満足だったさ。受け入れられんのかなあつて、ちよつと後悔はしたけど。でも、一度変身後の肉体を決定するともうチェンジできないって言うし！

… まあ、近々お披露目はあるだろう。その時に俺を見てもがつか

りしたり嫌いにならないで欲しい。

この日記は俺が死んだ後に公開可能らしいけどな。

引用終わり。

これは数十年の魔法少女史でも比較的黎明期に記されたものとして有名な文書だ。文中で『メディア』と言っているのは、『魔法少女ニユース』のこと。？魔法少女？による犯罪防止を宣伝するためにわざわざ通常のニユースとは別枠でその日の？魔法少女？の活躍をテレビ等で流しているのだ。特に異星人からの要求があったとは聞いていないが、どの国でも同じようなことをしているらしい。

慣れてしまつた今では時報代わり程度の認識しか持たれていないようだが。ボクもここ最近見た記憶がない。

「まんまちゃんさつきからメール忙しいねえ」

とまあ、牛頭からのメールをあれからも数件処理していたりあれこれ考えながらも、玉子との会話自体は続けていたのだが、身が入らなくなっていたのも事実で、玉子がやや不満げにこちらの手元を覗き込んでくる。同時に文面を考えて手を動かしてでは気もそぞろになってしまうのは仕方ない。

ボクも平均身長にどう足掻いても届かないくらいには低身長なのだが、玉子はさらに2ランクくらいは下なのでちょっと手を持ち上げれば盗み見から守れる。それでも諦めきれずに爪先立ちでちょこちょこ歩くので危なっかしい。

「バイトみたいなもんだよ」

時給が発生するとしたら5万くらいふんだくりたいところだ。通学の空き時間を利用しているのでもなければ投げ出してしまいたい。一応、学校では電源を切っていることになっているのでその間は解放される。ボクらの高校とマタギの小学校の通学時間は同じくらいの小一時間。田舎つてのは結構大変だ。「早く時間よ過ぎろ！」と祈ってみたりすることも一度や二度ではない。

祈りが通じなくても時間はおかまいなしに過ぎ行くもので、校門

が見えてきた。

第一章 その3

「いい加減にしやがれ！」

爽やかな朝の空気を濁った怒りがかき混ぜる。

人もまばらな通学路では、玉子の囀りが鬱陶しいだけだったが、学校の敷地内にもなると人口密度も上がり、それなりに騒々しくなってくる。靴底が砂利を蹴散らす雑音と、友人同士の交わす挨拶やおしゃべりが学校特有の賑わいを見せる。

その甘く、爽やかで、平和的な騒音を、敵意剥き出しで叩きつけられた暴力的音声が突き破る。

過ぎゆく生徒も振り返り、笑いの形に開かれた口は緊張に引き締められる。ピリピリとした緊張感が高まっていった。

「ぼ、僕たちは校則違反を見逃すわけには、い、行かない……！」
不穏な空気の発生源となっっているのは、痩せぎすで腕章を付けている男子生徒と、気の荒そうな目つきをした野獣の対峙だった。服を着て直立歩行していようが、馬と鹿なら野生の獣だろう。

生物同士の対立は周囲に近寄りがないフィールドを作り出すものだ。それがハイエナとかハゲタカとかオサムシレベルの死肉争いであっても。

腕章の方は普段から目にする顔だが、話したことは疎か、名前すら知らない。他方、食って掛かっているバカを人間様のように名前と呼ぶのも愚かしいが、あれは隣のCクラスにこびり付く校内きつてのゴミ、寅田維賀だ。

金蠅のたかるうんこ色に染められた短めの髪はツンツンに立っていて、染めわけた黒い筋が走って模様を作っている。まあ、言い方を変えればトラガリだ。意味なんか知ったことか。頭部にはそこかしこにピアスが目立つ。耳たぶにゾロツと並ぶ金具は重くて千切れそうなくらいの大きさのものもあるし、耳以外でも鼻にキラリと光っていたりする。緩めすぎて首輪にしか見えないネクタイ。ボ口切

れを纏っているんじゃないかというほどに外されすぎたボタンは毛深い胸元を隠さない。短足そのものであるかのようにずり下げられたズボンの上にははみ出されたシャツが掛かっている。

まあ、見た目通りの不良だ。人間としての欠陥品だ。

しかし、その身に纏う凶気は、イキガって格好を付けているだけの虚仮威しではない。そのことはボクが良く知っている。その寅田が吼える。

「てめえらに文句つけられるいわれはねえよ！　せつかく人が気持ちよくガッコきてやってんのにうぜえんだよ！」

とはいえ、目に余るほどの素行不良っぷりを見せていたのは一年の時の話だ。あの頃であれば叩けば埃、というかタバコの煙や危険な金属が奏でる音やらが出る身で、警察官に職質でも掛けられたらマズイ状態だったはずだ。

そんな札付きも、最近丸くなったので風紀委員なんかにも付け入られている。疚しいところがなくなっただけからツツかれ始めるとは因果な話だ。

正直、ざまあ見るとしか言いようがない。しかし、寅田が暴れていた頃、我が身かわいさで見えぬふりをしていたやつらは今ものうのうとしている。そいつらまとめて地獄に落ちれば良かったのに、本当に残念なことだ。

とはいえ、近頃の寅田が大人しいのは事実で、今日はたまたま虫の居所が悪くて爆発したというところだろうか。

確かに、身なりについてはギリギリ校則内で収まっているようだ。今の寅田を見てセーフと思えない人も多いただろう。しかし、？学び舎の仲間？に意見を言われることがあっても、職権を持つ大人たちに取りざたされることはない。

我が校の校則はよく読むと結構緩いことで知られている。緩すぎて、いやあれは常識的にはアウトだと恩恵を受けるはずの生徒からも思われてるのだが。

例えば、身だしなみについては、

『学生らしい服装・髪型をしましょう』。

これだけなのだ。

具体的にどういうことが禁止なのかは決められていない。

生徒会の方で「ピアスとか髪を染めるのは止めましょうね」みたいな指針は定めているが、生徒たちの自発的な『目標』を違えたからといって、即座に校則に抵触するものではないということは校長が明言してしまっている。

曰く、

『見た目で文武は成り立たない』

だそうで、若い頃は戦地で授業を受けたり、犯罪多発地区で教師をしていたとかで、まあそりゃ色んなことがあつたんだらうなと想像できる。

お堅い生徒からの反発もあつて、じゃあ全裸で学校きたらそれでも校長は咎めないつもりですかと問いたでしたら、

『全裸で授業受けられるならやってみる』

とのことである。まあ、質問した奴もイイ神経してる。

そうだったら、？魔法少女？が確実にボコリにくるのだけれど。

では無法地帯になったかというところでもなかった。

一端としては生徒会が『注意』をすることも止めなかったからだ。みんなも締め付けられるよりはマシかなと思いつつも、自治的な服装チェックで問い詰められるのも馬鹿らしいと考えるのか、さほど奇抜な外見を選択する者はいない。極一部の生徒を除いて。

不公平感を募らせてしまうのではないかとというと、アホのお陰で自分たちから目が逸れてくれているのだからとも思っているのか、一般生徒からの反感は小さい。それもまた極々一部を除いての話だが。

要するに、寅田はその極一部のそのまた極々一部、進んで奇抜な身なりをし、それだけでなく周囲に実害を与えていた鼻抓み者だということだ。

実際にいじめられていたボクが言うのだから説得力があるうとい

うものだ。

しかし、あいつなんでこんな朝早くから来ているんだ。不良なら不良らしく遅刻するか休むか退学するかドラッグで死ねば良いだろうに。目障りなことこの上ない。

ボクとしても係わり合いになるのはごめんなので、2人を横目にさっさと校舎に入っただが、寅田との過去を振り返れば、人間関係としては濃くもないが薄くもないことに気づく。業腹なことにヤツが？魔法少女？だったらそりゃボクには知られたくはないだろうな。何が嫌なのかまでは知ったこっちゃないが。それでも、普段とのギャップがギャップだ。少しは恥ずかしいだろう。それも自分がいじめてた奴に見られたのであれば。

何にせよ、寅田がそれを隠そうとしているのなら、それは弱みであり、付け込む余地はある。ボクをイじめて楽しんでた小物が正義ぶって可愛らしい？魔法少女？か。皮肉とはこのことか。

検討するに値するかもしれない。正体をつかめるかどうかではなく、奴の弱みを握ってどうするかをだ。正体なんてそう簡単にわからないだろう。

もしそうだったらと妄想してみる。這い蹲らせて許しを請わせるというのも面白いかもしれない。腹いせに無理難題吹っかけてやるのも楽しいかもしれない。が、やりすぎても逆ギレされるだけかもしれないな。正体を知られたくないというのがどのような理に拠って立っているのが重要だろう。そこまでやってしまったとしたら、正体をバラされることとのバランスが取れないので、逆上した奴の反撃を受けることも予想される。まあ、ちくちくいびるくらいなら平気だろう。

しかし、寅田が？魔法少女？というのは問題がないものか。

寅田維賀という男、重大事件こそ引き起こすとは思えないチンピラ風情ながら、小規模な犯罪は常習者だったらしい。主にケンカやカツアゲ、賭博、飲酒喫煙、深夜の無免許運転に万引きと言ったところか。万引きは補導されたことが1回あったという程度だが、そ

の1回についても本人が否定し証拠もなかったことから、真偽の程は定かでないのだが。やっててもおかしくない。

一方、？魔法少女？は性犯罪に限定されるとはいえ、いわゆる正義の味方だ。犯罪者や生来的悪人がなれるものなのだろうか？

結論から言えば、凶悪犯罪者の？魔法少女？は実在した。

ボクだって品行方正の度合いでは人のことは言えないが、その？魔法少女？は格が数十段違っていた。

殺人、放火、誘拐に強盗と性犯罪こそ含まれていないが重大犯罪目白押し、酒に酔えばすぐケンカ、人は殴る、物は壊すの大乱闘。投獄回数は実に3桁の大台に乗り、顔を見れば猫も恐れて逃げ回る有様だったという。

ちなみに、性犯罪を犯していないのは本人が美しい女性であったからという面も大きいのではないかと考えられている。たとえば男女を問わずいきなり局部を触る程度はよくあつたらしいが、特に不快感を抱かせなかつたのだろう。美人は得だ。

彼女の手記が発見された時は、世間への影響度を考えて極秘裏に処分することも検討されたようだが、結局、死後の情報公開は？魔法少女？の権利のひとつということで押し通され、国籍を伏せるという条件でしぶしぶ公開された。？魔法少女？の手記はそのまま公開するわけにもいかないので編集された上に検閲が入るのが普通で有名なものだといくつもの版がある。ボクが読んだのはドイツ語版の邦訳だった。

発表されるや否や興味本位から全世界でベストセラーとなったが、二律背反の苦悩と哲学的思索さえ読み取れる内容は宣伝文句とは別の意味で全世界に衝撃を与えた。？魔法少女？と倫理観を語る上で度々引用されることがある。次のようなものだ。

私が性犯罪者ども（訳者註：原文では口汚い罵倒。文脈から推定）を打ちのめす時、その顔はしばしば私自身を映しているかのように感じられた。生きるために犯罪を犯し続けてきた私にとって憎み続

けてきた性的な暴力。生命にとって必要不可欠とまでは言えない状況下で行われる自己中心的な快楽は、私がりたかつた自分から引き剥がそうとする悪魔の手に他ならない。卑しい汚らしい性犯罪者どもに成り果てる。それもまた私が成るべき姿であったのか。その姿を持ち得たならばそれまで私が振るってきた暴力はすべて私自身へと振り下ろされることになるのだ。

時折、犯罪現場（訳者註：盟約により地名をそのまま記すことはできない。世界的に有名な犯罪ストリート）においてこのまま何もせずにいようかと迷うことがある。悲劇が起こるに任せてしまいたい。憎しみに燃える被害者が立ち上がり、その人自身の怒りで犯人を殺害してしまえば良い。それがもつとも自然なことなのではないかと思えるからだ。

誰かのために何かを為すのでは誰も救えない。消極的に犯罪に加担した私を追い掛けて殺して欲しい。その時、私は被害者のそして自分自身の真の救いを見出すことができるのかもしれない。

だが、空虚な心が冷やす血液が機械のような心臓に押し出されいくら全身を廻ろうとも、握った拳を濡らす罪人の血はいつもそれ以上に冷たいのだった。

引用終わり。

まあ、悪文だということを除いても、ボクにはこいつの気持ちはわからない。ボクだけじゃない。全世界の？魔法少女？たちもその大半はわからないと言っだろう。何しろ？魔法少女？たちは与えられた強大な力を誇示し、憎い犯罪者を踏み躪ることに命を懸けているのだから。他人に命運を預けることの無意味さを一番よくわかっているのが？魔法少女？なのではないかと思う。でなければ、義務でもなければ見返りもない？魔法少女？になど誰がなるだろうか。

自分がやらなくても、誰かがやってくれる。

一瞬でもそう思ってしまったら足が止まってしまっ、そんな世界

の話なのではないかと思うのだ。

寅田維賀が果たしてそのような葛藤を抱え込むような男かどうかはともかく、前例から言ったら？魔法少女？ではないとまでは言えないといったところだろうか。

さすがに四六時中殺りまくりの犯りまくりなんて奴なら除外だろうが、そんなの滅多にいないだろうからな。

第一章 その4

「ですから、？ワタシ？が？貴女？^{アナタ}に対して抱く気持ちは一般的な異性に対してのそれと変わらないのです。肉体的には同じであるはずのカワイイ女性を見て自分とは違うなあ、女の子って良いなあって性衝動を強く意識し、こころ胸がドキドキ高鳴ってですね、やがてはすべてをじぶんのものにしたい、あるいはめっちゃめっちゃにされたいと想うような恋へと変わるのもおかしいことではまったくぜんぜんないのでしょ」

そういえば昔、高校教師が元教え子に「彼はゲイだ」と逆告白される外国映画を見たことがある。内容は忘れてしまったが、途中で居眠りをこいて亀に負けるウサギのような失速感がすごかったのだけは印象深い。

「だからですね、これは変態なのではなく正常な心の動きなのです。もしも、うさ先生がキミのおっぱいを揉みたいんだと言っても、なるべくならイヤな顔をせずにいって欲しいのです」

男女の別関係なく、いきなりそんなこと言うのは？魔法少女？の仕事をしたずらに増やすだけだから止めて欲しい。実際問題として、友達感覚で触りつくくらいならセーフだろう。

さて、ボクの真正面やや遠間に立つ女性は盛大なレズ・カミングアウトをしているわけではない。

女性とは言ったが、より具体的に形容すれば『女兒』になっしまふ。しかしそれは正確ではない。

小学生にしか聞こえない声で、小学生にしか見えない体躯で、小学生が無理矢理教壇に立たせられているかのような絵面ではあるが、歴とした我が担任にして保健体育教師、宇佐美羽衣^{うさみ はねい}である。

「同性愛と一口に言っても、様々な事情があるのですから、まずは相手のことを知る、理解するべきなのです！」

宇佐美が熱い教鞭を振るう。お題は「性同一性障害について」。

つまり、熱くなりすぎてなんだかよくわからない戯言になってしまったとしても授業をしているということになる。

寝言を繰り返して金が貰えるなんて大層なご身分だ。ボクが貴重な睡眠時間を潰してまで？魔法少女？探しに躍起なっているにも拘らず、だ。腹立たしいことこの上ない。

「まねきくん、起きていますか……？」

毎日生卵とハチミツでうがいでもしているかのようなとろとろに粘度の高い黄金色の声がおそろおそろ注がれてくる。量を間違えたらせつかくの料理が台無しになってしまうかのように。

居眠りしてる生徒に注意するのは教師としての当然の権利なのだからもつと堂々としていればいいものを。

右手を挙げて眠りの国へ旅立っていないことをアピールしておく。今、宇佐美はボクを下の名前で呼んだが、これは妹とも面識があるためだ。

1年の時に色々あって、自宅に宇佐美が来たことがある。

宇佐美が眼鏡を外しているところへ、ボクと入れ替わりでマタギが入ってきた。極度の近視だった宇佐美はマタギをボクだと見間違え、そのまま2時間くらい勘違いしたまま話し込んでいたらしい。ボクはほつとけば宇佐美が呆れて帰るだろうと、外で適当に暇をつぶしていたが、後で聞いて呆れ返ったのはボクの方だった。

ついでに母は妹として紹介され？担任と兄妹の三者面談？状態だったらしい。声や背格好で気付よと思うのだが。というか、しれつと小学生として振る舞った母はさすがにどうかと思う。母の頭は話を聞いた瞬間に引っぱたいておいた。

そんなこんなで妹や母とも親しくなった宇佐美は猫魔という呼び方を避け下の名前で呼ぶようになった。まあ、別にボクだけ『猫魔くん』で呼べば済む話なのだが。

というわけで宇佐美に他意はないとしても、女教師に親しげに接せられているかのように見えるものだから、最初の内はからかいまじりの視線が痛かった。だが何しろ小学生先生のやることだ、すぐ

に皆慣れてしまった。

宇佐美が名前で呼ぶようなのは、このクラスではボクと玉子とあと数人程度なのだけど。

ガキっぽい外見なので、ボクもからかうつもりで個別質問をしに行ったことがあるが、真剣かつわかりやすく教えてくれた。ああ見えてなかなかできる女だ。すぐにテンションが上がってしまわなければ。

まあ、数少ないボクが言葉を交わす人間のひとりでもある。

ということは、ボクに何か隠し事をする必然性があってもおかしくない。あの？魔法少女？の正体候補になり得る。

宇佐美の事情までは知ったことではない。

あれほど嫌がっていたのだから相当のことがあるのかもしれないし、他者にはうかがい知れない内面の問題　言い換えればくだらないことなのかもしれない。そんなものがあつたとしても、化けの皮をひん剥いた後でどうしても聞いて欲しけりや聞いてやる。

ところで、宇佐美を思うが俣にしたところでメリットなどあるのだろうか？　現実問題、利点の乏しいことに力を注ぐのは骨が折れる。

教師という立場から思いつくのはテスト関係だが、あいにくボクはさほど学力に関して困っていない。推薦を取るなど利用価値はそれなりにあるのかもしれないが、どうも後ろめたい気持ちが勝ちそうだ。まあ、学校という閉鎖空間で生活する上で教師の協力があるというのは損になることはないだろう。

問題としては、宇佐美はあれでももう三十路だということだ。

嫌な言い方だが、トウが立ちすぎてやしないだろうか。

魔法少女たちは見た目に関しては蒼い蕾のローティーンが多い。中には庇護欲を誘うアンダーティーンやおっぱいをぶるんぶるん揺すりながら戦うアダルトな？少女？たちもいることはいるが。

性別すら無関係なのだから外見年齢が実年齢であるはずもないが、イメージはしにくいところだろう。特に、行動についてはかなり見

た目年齢と一致するらしいのでわざわざ？魔法少女？になるうと考
えるのも近い年齢なのではないかと考えられていた。

宇佐美ならば変身などしなくても小学生で通じそうではあるとい
うのはさておき、これも？魔法少女？たちの手記でわかったことだ
が、最高齢で？魔法少女？になったのは92歳だったそうだ。彼女
の筆を引用する。

魔法少女というのは私にとって翼のようなものだ。重力に負け折
れていく腰も、起き上がることさえ困難な底なし沼よりもなお怖ろ
しい湿気た布団も、悪を討つためにまっすぐに翔けて行くあの瞬間
には全て忘れられた。ただの人間である私には鳥のように飛べた日
などあるわけもない。しかし、あの（削除）の及びもつかない高揚
感に包まれていると、これが本来の自分なのだという思いに取り付
かれていった。

鳥に翼があり空があるのが当然のように、いつしか私は近くで性
犯罪が起こる事を常日頃から望むようにさえなっていた。魔法少女
が現われる時、それは誰かが涙を流す時と同義であり、正義が行わ
れようともし不義は溜まっていった。魔法少女への変身が解除され、
老いと病がこの身に舞い戻り、地へと縛り付ける重力の他にもう一
つ、胃の腑を直接抑え込むような重荷が増えていくのを感じずには
おれなかった。

それでも、吐き気を催す嫌悪感をすら抑え込んで余りある夢心地
が待っていたのだ。

引用終わり。

まるで罪の告白であり、実際多くの？魔法少女？にあらざる人た
ちにとってはそう受け止められた。俗に付いたサブタイトルは「魔
法少女という名の罪悪」。利己的であり性犯罪の発生を望んでいる
かのように受け止められる文章が混じっているので、しばしば魔法
少女反対派が引き合いに出す有名な手記でもある。

当の本人はといえば、引退は最期までしなかったということだ。彼女は最後の仕事を終えた後、歓喜に包まれて昇天してしまったらしい。興奮状態が元の老体へまで引き継がれた結果、心臓が過剰な働きに耐えられなかったのではないかと推測されている。腹上死のようなものだろう。

遺体は老衰と判断され火葬されたが、遺品整理中に10冊以上に及ぶ手記が発見された。現職の？魔法少女？は神聖不可侵とされているが死後はただの人だ。？魔法少女？に振りかかった不慮の死との因果関係を明らかにできるとの黒い期待が持たれた。

しかし、この発覚は遅すぎた。その時には既に荼毘に付され解剖調査はできなかった。一説には、誰かが時期を窺い手記を隠していたのではないかと囁かれたが真相は藪の中だ。

「あの……うさ先生の授業……だめだめでしたか？」

メガネの向こうにジューシーな瞳が美味しそうに並んでいる。

「そんなことより、授業を進めてください。授業中でしょ？」

「あう……やっぱり聞いてませんでしたね……。もうとつくに終わっています……」

涙声になってますます近づいてくる。そのままだと泣き出しそうだ。

チラと周りを見ると、確かにもう席を立てている生徒も多い。失言は認めよう。

「いや、今日はたまたま考え事　心配事があったんです。すみません」

先生の授業がつまらないとか退屈とかそういうことはありませんからと続けようとした。

その場限りの誤魔化しなどではなく、本当にそう思っている。宇佐美は幼い外見とは裏腹にかなり授業が上手い凄腕の教師だった。

宇佐美が受け持ったクラスは平均点が二割は違うと言われている。ただたどしいということもなく、教科書をただ読み下しているわけでもない。メリハリを付け、生徒の理解度にも目を光らせてインタラクティブな授業をし、声の抑揚にまで気を配っている。予備校などに通っている連中にしてもこれほど教えるということに才を発揮している人物は他にはいないと専らの評判だった。

惜しむらくは暴走しがちということと、保健体育専門だということだ。それ以外の教科については頑として断っていると聞く。

別に保健体育イコール性教育というわけでもないのだが、宇宙人に侵略されて以来、性教育は大幅に増強された。どうも宇佐美はそこに拘っているらしい。それでも受験には関係ないし、学校経営者としては他の教科も教えさせてみたいという気持ち強いのはわかる。しかし、教壇に立ってから数年来保健体育一本で通しているのはどういうことだろうか。校長の弱みでも握っているのか。いや、宇佐美に限ってそれはないだろう。脅しのネタを握っても、それをあの校長相手に行使するだけの気の強さもない。

単に向き不向きをわかっているというだけだろう。ボクも理系科目は比較的苦手だったりする。

ともあれ、宇佐美羽衣は極端に気が弱く自分に自信が持てない性格だ。いじって遊ぶ分には面白いが、意図しないことで落ち込まれてはつまらない。癪だが、一方的にボクが悪かったと認めてしまった方が気分的に楽だ。

などと宇佐美本来の実力とは無関係なのだと安心させようと長考に入りかけていたのだが、ちびっこ先生はそうとは取らなかつたよ。うだった。

「ええっ！ ままねきくん、大丈夫ですか？ うさ先生そんなこととは知らずに失礼しました、ってどうしたらいいのかな？ 児童相談所？ 消防署？ 110？ お葬儀屋さん？ ままねきくん、気をしっかり持って！ ままねきくん、ままねきくん、ままねきくん！ こんな時に学校の先生は何をやっているのぉ〜！」

ぶるんぶるんと頭を振り回すと長い髪が絡まってもつれて倒れそうになる。ボクの名前を連呼するも、「ま」が多い。興奮するといつもこうだ。

学校の先生はあんだだ、しかも担任、と言いたい気持ちもあつたが警察まで呼ばれてもたまつたものでもない。事態の沈静化を最優先する。パニックになつた先生をとりあえず座らせてメシでも食わせることにした。

「先生、落ち着いて！ あ、そうだもうお昼ですよ。一緒に食べましょう」

「へう？ でも、先生お弁当持つてきてないですよ？」

「じゃあ、買ってきますよ。お金ください」

金銭の受け皿として掌を差し出す。それを悲しそうに見つめる宇佐美。

「ないです…… お金も持つてきてません」

しょぼんと頭を下げると、髪がべろんと垂れて顔の前を覆う。どうやってメシを食うつもりだったんだ。

「うっかり財布でも落としたんですか？ しょうがないですね」

「すぐく高いお買い物してしまいました……」

残金と相談して買えよ。ローンにするとか。

「ああ、もういいです。おごりますよ」

「ありがとう！ まねきくん！」

ちよつとは遠慮しろよ。今は面倒臭くなくていいけど。

「なんでも良いですよね？」

「美味しい物ならなんでもいいですよ。えへへ、まねきくんは優しいからおごってくれらと思っていました。職員室帰らなくて正解です」

計画的犯行だった。

なるべく安く上げるランチプランを練りながら買出しに出かけることにした。

第一章 その5（前）

『美味しいたこ焼きどうですか？ 瀬土公園内で販売中で〜す』
そんな呼び込みが聞こえたわけでもないが、ボクの足は自然に公園の方へと向かっていた。

どうしてこうなったのかを考えると、ボクが宇佐美を嫌いじゃないからだ。

自分の教室を出て、さてどうしようと頭をひねる。考えを行動の後に持ってくる、得てして当初の目標からはズレまくっていくものだ。

面倒なナキウサギから離れると、途端に自腹切って何か買ってくるのが億劫になってきた。

まあ、宇佐美にああ言ってしまった手前、痛む心もあるが学食辺りで手堅く済ませるのもアリだとは思った。ボクひとりです。

しかし、あの先生はボクが食ってる間も、お茶飲んでくつろいでる間も、排泄行為に及んでいる間ですら、ずっと指でもしゃぶって待っていきそう。いいトシした餓死者をボクのネグレクトで出してしまうのも寝覚めが悪い。5限には最強の催眠術師と名高い古文の教師が控えていることだし。良い夢が見られなさそうなのは勘弁願いたい。

購買にパンでもあれば良かったのだが、お菓子みたいなものしか売っていない。宇佐美のあの小さくてぷっくりした口に黒々としたぶつといちチョコバーでもぶち込んでやっても良いが、ボクは宇佐美のことはそんなには嫌いじゃない。仕方なくコンビニまで遠征することにした。

メロンパン1個ずつでも十分だな。ボクは小食だし、宇佐美は放課後まで持てば十分だろう。腹減ったなら早退しろ。

倒れられるよりは遙かによい。

嗚呼、まったくボクは宇佐美のことが嫌いじゃないな。

授業時間外の昼食時などに学外へ出るのは自由だ。弁当を持参していなかったり弁当が昼まで残っていなかったりした同じ学校の連中が近くの店に殺到する。非常に鬱陶しい。少し離れている所へ足を延ばすなら、公園を突っ切るのが近道になっている。

多分、そんな風に考えてこの場所まで来てしまったのだろう。

公園なんて変質者の巣だろうに。

緑の影に彩られたベンチに、着物姿の老婆が腰掛けている。

昼間の公園に老婆。

特に問題ないシチュエーションだ。にも関わらず妙に気になる。

なんとなく目を離せないでいると、変な動きをしていることに気付いた。着物の前をはだけ、皺が寄り、くすんだ色の地肌を露出させている。一方の手を懐へと滑り込ませると、円を描いて動き出す。腰もいつの間にか全体的に前へスライドされていて、やたらとごつい杖と股間がねっちょりと密接している。胸を揉む手が激しさを増すと、杖を支える方の腕に力が入り先端は大地へと突き立てられる。老婆の腰は完全に宙に浮き、上下へとリズムカルに浮沈を繰り返していた。

昼間から人目も憚らず恥部をさらけ出して自慰に耽る痴女だった。醜悪なふてぶてしさは昨日今日頭がイカれたとかそんな感じじゃない。相当年季が入っているだろう。

他人を無断にオカズにするくらいじゃ？魔法少女？の出番はない。公序良俗的には問題があるが。

ボクにしても嫌悪感はあるけど特段被害が出ているわけでもないのだから、文句こそあれど被害者意識があるわけでもない。係わり合いにならずにおこうと決め、足を速めようるために老婆から目を離し、前方へと向き直る。そのスライドする視界にびったりと老婆が張り付いていた。

「え？」

首を振るのと同じ速度で高速移動した老婆という現実離れた現象に言葉を奪われた。

が弾ける。

性犯罪者の前に完全と立ちはだかる無敵の？少女？がそこに立っていた。

？魔法少女？が助けに来てくれるとわかっているからこそ可能なことだ。

この公園も周良町いっしにあるので、やはりというか、現れたのはあの犬を彷彿とさせる？魔法少女？だった。被害者を確認しようと振り返って、早速固まっている。颯爽と登場したのに、なんだその黒い油虫に遭遇したようなツラは。さすがのボクでも少し傷つくんだけどな。

気を取り直して老婆に目を戻すと、突然現れた？魔法少女？に驚きを隠せないようだった。しかし、身動きもせず犬娘の出方を窺っているようにも思える。無駄に年輪を重ねた醜怪な変態面も緊張に引き絞られ正気を取り戻していた。？魔法少女？がとてつもなく強い『人間兵器』とでも呼ぶべき存在なのは広く知れ渡っている。それでも、無力な少女の姿から危険性を察知できる罪人アホは少ない。数知れない変態どもを相手取ってきたボクが断言する。

先ほどの身のこなしは、スーツの性能ばかりでもないのかもしれない。なかつた。若い頃、何がしかの武道をやっていた可能性がある。F1マシンには優秀なドライバーが必要なのも同じだ。

まあ、基本性能が象と蟻なので、そんなことはまるつきり関係ないのだけれど。

それより、いくら殺したところで文句の言われない性犯罪者とはいえ、この気弱な犬娘は老婆相手に殴る蹴るできるのだろうか？魔法少女？の兵装は基本的に素手のみだ。中には手製の『魔法の杖』を携えている者もいるようだけれど、いざ戦闘となればどつき合いの肉弾戦になるのは変わらない。

結果、ものすごく生々しい戦いになることもあって、凄惨な光景にどん引きしてしまう一般大衆も少なくない。やりすぎだとも言

いたげに眉を顰めるのも何度も見た。

そいつらも一遍襲われてみれば良いと思う。

ボクなどむしろ残酷に殺してしまえば良いのと思うことすらあるのに。

さて、幻の武術の達人（仮）の死にかけ老婆を相手にどう料理するのか固唾を呑んだが、喉を落ちきる前に勝負は一瞬で決まった。流れるように体を差し込むと、絡みつく動作からアームロックで肩を外していきやがった。反撃どころか反応の機会すら与えない。老痴女は余りの痛みに気絶してしまっている。

戦闘不能状態に追い込んだのでそのまま立ち去っていくのかと思えば、白眼を剥いて倒れてる相手を見下ろしてちよつと小首を傾げてから御丁寧にもアキレス固めで脚も破壊してみせた。もう誰かに危害を加える心配はないことを確認すると公園の出口へと足を向けた。

「待て！」

その場から去ぬ流れに入っていた犬娘に慌てて声を掛ける。

犬娘はびたり、と足を止め、恐る恐る振り返る。気持ちが嫌がってもカラダは言うことを聞かないと見える。

警戒されていても話が進まない。ポケットを探ると飴玉があった。「いつかの分も併せてお礼だよ。持ってけよ」

ひと粒ずつ包装されたそれを掲げて無害そのものの笑顔を見せてやる。もちろん、釣りエサに引つ掛かるまでの騙しだ。

ぱちくりと目を瞬かせると、顔を真っ赤に染め上げつつも近寄ってきた。やはり、シツケにはご褒美か。

犬娘の小さな手が差し出されると、飴玉を引っ込めた。

何も掴めなかった手をぽかんと見る。ボクの顔を見る。また手を見る。

目標の誤差を修正し、ボクの手めがけてひよいと手を伸ばすので、こちらもまたひよいとかわして頭上へ持つて行く。

何をされたかわからない顔で、届かない高さに持ち上げた飴玉に

爪先立ちで必死に手を伸ばす。

「礼儀がなつてないな」

いきなり冷水のような声を浴びせる。思いがけぬ態度に何か悪いことをしたのではないかと心配になっているのが手に取るようになる。その焦りを心地よく感じながら続けて言う。

「ください だろ？」

言ってみろ、と目顔で促す。はっと見開られた目には混乱が渦巻いている。嗜虐心を刺激するじゃないか。

犬娘はしばらく考えていたようだが、意を決したのか桜色の唇を開かせて、

「く、くりゃさい」

ガラスを軽く打ち合わせたような澄んだ声が響いた。言った本人は、ちゃんと言えなかつたことで湯気が出てくるほどに恥ずかしがる。その様をじっくり眺めているのも良かったが、このまま放つて置けば逃げ出してしまうしうだったので、鞭はこれくらいにして文字通りアメをくれてやることにした。

「ふっ、いいよ、やるよ」

顔の高さにまで手を下げてやるといそいそと手に取るうとする。

そこでまた「待て」をしてやった。

「？」

ぴたと動きを止める犬娘。すでに命令を聞く態になっていることにも気付いていないだろう。ボクは包みを解いてやると、オレンジ色の飴玉を指で摘んで差し出した。「待て」はまだ解かない。

「特別だ。手ずからご褒美をくれてやるよ。口で取りな」

指で摘めるほどの大きさの飴玉を咥えるということは、必然的にボクの指ごと口に入れることになる。それがわかつたのか、滝のような汗まで流れるパニツクになった。？魔法少女？ってこんなに汗が掻けたんだな、と変なことに感心してしまった。

手の届く距離にご褒美があるということが、犬娘の逃亡を妨げている。後は時間の問題。頭の中でカウントダウンすると、案の定犬

娘は食いついてきた。

口で取ることに最後まで抵抗して伸ばした舌がかえって艶かしく光る。しっとりとした口中が遅れて指先を包んだ。鼻息がこそばゆく掛かってくる。軽く当たる歯が爪の生え際をマッサージする。もったいなさを感じたボクは摘む指に力を込めてやる。

中々飴玉が取れない犬娘はより深く指を咥え込むと口をすぼめて搾り出そうとする。困ったように上目遣いで見詰められ、そこでようやく力を緩める。余りやりすぎて飲み込まれても厄介だった。ところが、長く素手で持っていたせいで飴の表面がべとついて指に引っ付いてしまっていた。僅かに角度を変えてひっpegすが、指先にはべとつきが残っている。そこで、離れようとする犬娘の口腔へ、ずいっと指を押し込んだ。

予想外のことに驚いた様子だったが、ボクの意を汲み取ったのか残り滓となった飴を舐め取るうと舌を伸ばし 思わず引っ込めてしまった。ボクの方が、自分の手を。

犬娘への責めを徹底させられなかったことに恥辱を感じたが、どうしてなのかはよくわからなかった。ただ、ざらりとした舌の感触が背徳感を逆なでするような危うさはあったと認めざるを得ない。

いや、飴玉しゃぶりなんてついでのことだ。時間がもつたいなかったただけだ。そう納得させると咳払いで調子を整え、本題に入った。「さて、こっからが本番だ。飴、美味しいだろ？」

「……………」
こくこくと頷く。まあ、そこらで売ってる10円の飴なのだから格別美味しいということもないわけだが。

「だったら、その見返りに少々質問に答えてくれないか？」

「……………」
とんでもないとぶんぶん首を振る。

「なに、こつちだつて？魔法少女？には他言無用が多いのはわかってる。それほど大きな期待をしているわけじゃない。ハイカイイエの二択で良い。これならやれるよな？」

「……」

要求のレベルを下げ、微妙に義務のような置き換えをしたことで心理的箍が緩んだようだ。口元を手で覆いつつもこっくりと頷く。

「お前は、ボクを知っているか？」

「……」

答えない。いきなり核心に触れすぎたか。ついっつかり答えてしまつこともあるかと賭けに出たのだが。

「この近所に住んでいる。そうだな？」

「……」

答えない。少しでも魔法少女？のことが知ってればわかるはずのことなのに。警戒させてしまったか。

「この公園にはよくくるか？」

「……」

その後もいくつか質問を重ねたが、怒られたこどものようにしゅんと俯いて、何を聞いてもふるふる首を振るだけになった。そんなに正体がバレるのが嫌なのだろうか。もし、かりんが犬娘だとしたら少々ショックだ。だからというわけでもないが、こんな質問をしてしまった。

「ボクのこと好きか？」

なんで「嫌いか？」と聞かなかつたのかはわからないが、質問を受け取つた犬娘の反応は劇的だった。

ブツッと何かが弾ける音と、コーンとボクの額に何かがぶつかる音とはほとんど同時だった。察するに、犬娘のやつ、飴玉を？魔法少女？の化物染みた力で噴出しやがつたのだ。

そのまま真後ろへと倒れこむボク。意識が飛ぶまではいつていな
いが、うるたえつつ薄情にも逃げていく犬娘に対しては目で追うく
らしいかできなかつた。

第一章 その5（後）

「何やってんだ？ フクライ」

野太い声がボクを呼ぶ。「福来^{まねき}」を「フクライ」と呼ぶのはこの
境界ではひとりだけだ。

「……巽^{たつみ}さん、ですか。痛たた……」

心配そう……かどろかは、その竜神のような厳^{いかめ}しい顔からは窺い
知れなかったが、とりあえず安心させるために天使のような笑みを
作り、額を押さえて立ち上がる。

「どうした？」

「いえ、アメ鉄砲喰らいまして」

なんのことだかわからないという顔 をしているのかよくわか
らないが、言ってるボクもよくわからない。凶器の飴は粉々に砕け
ただろう。蟻が運んでいって証拠隠滅だ。

ボクが身を起こすと、傍らで屈んでいた巽^{たつみ}さんも立ち上がる。ぐ
おおっと効果音を付けたくなるような大男だ。見上げると首が痛
くなる。

この人は巽^{たつみ}龍^{りゅう}さんと言って、今年の春までうちの高校に在籍して
いた。軽く2メートルを越す長身と、巖のような筋骨逞しい体格で、
「巖つい」という形容詞が非常に似合う。腕っ節の方も相当強く、
その筋では「ダブルドラゴン」として恐れられていた危険人物でも
ある。

ダブルというのは巽^{たつみ}さんだけではなくて

「リュウー！ 何やってんだよー！ お？ ネコマンじゃん。久し
ぶり」

「あ、久しくさせてもらっています、巴津^{みつ}さん」

ローラースケートを履いた長髪の女性が、高速に這い回るヘビの
ように近寄ってきた。顔見知りだったので挨拶をする。

巽^{たつみ}さんの隣に立つと目立たないが、これも女性としては規格外に

長身である。巽さんのごつごつでかいという豪快な印象とは打って変わって、ひよろりと伸びた柳腰だけれど。

これだけ体格差があるとペアルックであることも気づけない。巽さんが目の覚めるようなブルー、巳津さんは甘い夢に誘うルビーローズだ。まあ、ペアルックというか単なるユニフォームなだけけど。胸の所に鯛をデザインした刺繍が縫い取られている。

ぬらりとした紅色がよく似合い、軽く化粧しただけで大人の色気が溢れ出している彼女は、巳津竜巳^{みつたつみ}。巽さんとは同い年でこちらもボクの先輩に当たる。

ダブルドラゴンというのは、この巳津竜巳とワンセットの呼び名だ。自称していたわけではなく当人はむしろ迷惑がっていたような気もするけど。本人たちに面と向かって口にしてぶん殴られた奴らを何人も見てきた。まあ、フタツナなんてよほど恥ずかしいのだろう。マンガじゃあるまいし。

「リュウ、焼き手が帰ってこないと商売になんねえだろ。油売っていないで、油ひいてくれよ」

「ああ、すまん」

そう言つと、二人は公園の入り口側へと向かう。置いてけ堀を食わされた形だが、ひとつ思いつくことがあつて後についていくことにする。

「んじゃ、アタシは客でも呼び込んでくるわ。え、美味しいたこ焼きどうですか？」 瀬土公園^{せと}内で販売中です」

巽さんはこの近くでたこ焼きの屋台を出している。ちよろつと口先で褒めればおまけしてくれるかもしれない。

「うわあ、美味しそうですねえ」

お世辞抜き of 真正銘の賛辞が口を衝いて出てしまっていた。

タコ焼き専用の串が音を立てるほどに熱せられた鉄板の上を舞う。

巽さんの大きな手に握られると爪楊枝のようだ。しかし、縦横無尽に振られるそれはまるで指揮棒のように見る者の目を引きつける。そして、整然と、だが揚々と食材を導いていく。

均等な焼き色が付くように薄く引かれた生地に次々に切れ目が入っていく。そして、焼き加減の微妙な違いを捉えるセンサーがついているかのように次から次へとひと穴ごとに生地を折り畳み、寸分のくるいなく反転されていく。

時間差で焼き上がった面には新たに生地が流し込まれ、無造作に掴んだだけに見える片手が閃くと、ぶつ切りでありながら均一のサイズに整えられ具材がちりばめられる。節くれ立つた無骨なリクガメのような手からそのような手業が冴えるとは誰が想像できるだろう。

これこそが魔法であると高らかに声を上げたい。

本当に声を出したわけではないが、ボクがあんまりにも見惚れていたのだろう。後ろから巳津さんの声が飛んでくる。

「当たり前じゃねえか。リュウはゆくゆくは『タツコちゃん』を継ぐんだからよ」

我が事のように胸を張る巳津さんも、裏方に入り、慣れた手つきで包丁を躍らせている。完璧な具材の下ごしらえは彼女の仕事によるものだ。

「タツコちゃん」というのは、もう少し街の中心地にある老舗のたこ焼き屋で、巽さんはその長男だ。高校卒業後、すぐに実家で働くのではなく、ワゴンカーの屋台で修行中ということらしい。材料などの仕入れは実家から格安で提供されているものの、その他はすべて自らの差配によっているのだとか。

破産したら遠い店舗へ再修業に出されるとか、別な仕事を見つけさせられるのだとか噂されている。

でもまあ、味は確かだし、人望もある人たちなので下校時刻にはかなりの賑わいを見せている。破産の心配はなさそうだった。

「2パックください」

見ている内に我慢ができなくなってきた。2人前ということでも少出費が響くが仕方ない。

しかし、宇佐美の分も買いに来ているということを知らない巽さんたちには、ボクが余程腹を空かせていると見えたのだろう。心配そう（と言っても睨まれているようにしか見えないが）に上から下までジロジロと見られた。

「フクライ、ちゃんと食ってるのか？」

「あ、ええ。ボクは食っても太らない体質ですから」

一瞬、店の奥から氷点下の殺気が流れ出てきたような気がしたが気のせいだろう。いくぶん顔が蒼褪めてしまったかもしれない。それで気を使って無理していると思わせてしまったのだろう。巽さんがあるだけのタコ焼きを引つつかんだ。

「金はいいいから、食っとけ」

ドン、とパツクが山盛りで目の前に積まれる。食えば元気になるという考えの人なんだよな。でもまあ、ありがたく頂戴しておくでしょう。出そうと思ってた2人分はそつと置いといたけど目もくれない。どうせ後で巳津さんが回収するだろう。

「ああ、これも持ってけ」

そう言っつて、茶色い塊を差し出す。

「なんですか？ これ」

本気で判らなかつたので聞いてみたのだが、巽さんは珍しくニヤリと一世一代の大勝負をする任侠の笑みで返す。

「新作だ」

ああ、思い出した。これは『大判焼き』か。薄いプラスチック容器の全面に犇めいているのはただ一個の塊となった巽さん特製超特大判焼き。大判焼きと言ってももはやこの店のスラングと呼ぶべき代物だ。

この店ではたこ焼きだけでなく、巽さんの趣味で大判焼きも作っている。大判焼きのはずなのだが……とにかくやたらと具を入れたがる人で、変り種なんてレベルでなく、大判焼きという概念そのも

のを打ち砕くようなある意味豪快な創作料理と成り果てている。牛井入りとか、五目炒飯入りとか、ヤキソバ入りなんてものもあった。しかも、量をまったく考えない。丼一杯そのままとか、半ライスでいいですよというような量とか、パーティーサイズというか業務用というか。製作工程からして、型を使わずにおやきのようにして平鉄板を使ってひとつずつ手作りの味わいになっている。

しかし、でかい。それになんか小麦粉よりも強い草の香りがする。野菜入れすぎ？ ニラレバかな……。大判焼きが、どうやってたらここまで巨大な物体へと進化できるのか知りたいくらいだった。もしこの店が潰れるとしたら、まず間違いないがこれが原因だろう。巳津さんが大蔵省となって頑張ってくれるのを期待するしかない。

「わらじ焼きって感じですよね」

巳津さんはプツッと噴出したが、巽さんは聞こえなかった振りをしてわらじを焼く作業に入っている。相変わらず手元は見えないが、出来上がったサイズは小さめになったように思う。

巽さんは見た目はいかついが、……まあ、中身も相応でオトコと書くなら「鬪」の文字は必ず入ってしまうような人だ。むしろ、鬪いと呼ばずして何を呼ぼうかと言わざるを得ないほどの圧倒的雄度を誇っている。

だいたい、このわらじ焼きを売れる以前に食おうとする人間がどれだけいるのか考えない時点で、自分の中に世界を持ってしまった？ 男鬪濃おとしこ？だ。

さて、そんな巽さんが？魔法少女？になどなるものだろうか。たとえなつたとしてもボクの探すあの犬娘の可憐な容姿と、この粉も職人とでイメージが結びつかない。別の姿になっているのではないだろうか。

？魔法少女？というと、大抵の人は一定の姿を思い浮かべるのではないかと思う。たいていはその地区で放送されている魔法少女二コースでの映像が原型だろう。他の地域に行けば当然別の？魔法少女？の姿が映っていることもあるのだが、？魔法少女？への馴染み

を深めようというイメージ戦略なのか、実際の？魔法少女？の数に比べると圧倒的に少ないパターンでしか報道されていないようだ。

実際にはひとつの街にひとりの？魔法少女？くらいの配分なのが、北海道・東北・北関東・南関東・信越・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄の地域別にしか？魔法少女？はいないというくらいにまでの感覚になっている。まるで全国区の天気予報だ。

あたかも数人の？魔法少女？だけで広範囲に渡る性の平和を維持しているかのように印象付けられているのではないだろうか。別にそんな所に文句をつけるわけではないのだが、大多数の一般大衆は認識のズレを持っているということを知っておいてもらいたい。

なぜ少人数ばかりがクローズアップされるのかは謎だが、思いつくところは、スター性というところだろうか。希少性がないと有り難みが出ない。少し論点は違うものの、報道されるものは実態に比べると地味な解決ばかりなので、この考察は当たらずとも遠からずという気もする。どちらにせよTV局レベルの話ではなく、かなり上の方で決定されているわけで知る由はない。

何が言いたいかと言うと、？魔法少女？の姿は千差万別なのだ。本当に少女としか呼べないものから、ロリ巨乳、アダルトチェンジ後と思しきかなりセクシーな自称少女、少年としか思えない風貌まで幅があり、それらは？魔法少女？たち自身が思い描く魔法少女像を反映し決定されている。そして1回決定すると変更は原則としてできない。ちなみに、衣装と髪型くらいは毎回自由にいじることも可能だ。

そういう事情があるのだから、いくら別人になるのが前提だとは言っても、そこは本人の嗜好が反映されるものなのだ。

犬娘は可愛い。

これはもう圧倒的な事実だ。華奢でいながら均整のとれた身体。気弱さに隠れてしまっていたが太陽のように暖かく明るい笑顔の似

合いそんな大きな目とふつくらとした口元。清らかな小川を連想させる透き通った声。すべてが輝きを秘めた原石のような理想的な少女の姿だった。

はつきり言つて、巽さんがああいう格好を想像できるとすら思えない。

あの人なら、純日本人的に逞しい体型、営業スマイルの似合いそうな大きな口、生活感溢れる上水道を連想させる庶民的声といった、某大阪弁飲み屋系勤労少女程度が関の山なのではないだろうか。いや、あれもかわいいことはかわいいが。

ただし、このような事案に対しても対照する手記は存在する。あのプロレスラーによるものだが引用してみる。

俺は、一体今まで何をしてきたというのか。白熱灯が照りつけるリングの上で雄々しく猛り、豪快に敵をなぎ倒す。俺自身がそんな強者を演じてきて、試合を見に来る観客たちにそんなファンタジーを与えてきた。

それなのに、魔法少女に返信（原文ママ）した時の俺は真逆の行動を取っている。折れそうな細い肉体に吹けば飛ぶような可憐なキヤラ。そんな誰が見ても弱そうな姿でありながら、どんな屈強な男でも卑小に見えるように軽々と叩き伏せている。

ある種のファンタジーを魅せているのは同じでも、これは枝葉の問題じゃなくて根っこの違う完璧に別物じゃないか。

俺が理想としていたのはプロレスラーとしての俺じゃなかったのか？

でなければ、俺の歩んできた道のりはなんだったんだ……。

引用終わり。

まあ、くだらないとしか言いようがないのだが、1例として挙げさせてもらった。

ただし、例外としてたまたま同じ姿になってしまふ別？魔法少女

?も存在する。

強烈に脳裏にこびり付いている映像を共有してしまったような場合だとか言われているが、同時多発的に同じ姿の?魔法少女?の出現が確認されているというだけで確証は得られていない。なお、この件に関しては未だ手記は発見されていないとされる。

巳津さんはどうだろうか。この人の弱みを握ったとしても巽さんと同様の旨みはあるだろう。

なにしろ、他校の男子生徒に呼び出しを喰らって、そこにいた全員を病院送りにしたらしい。まあ、話半分で全員がシップ薬のお世話になったという程度なのかもしれないが、壮絶な逸話となっている。

その文脈はこうだ。「タツミという奴を出せ」と喚んでいるのがいるので巳津さんが出張っていく。「自分はタツミだがなんか用か」と問えば、強いと強いと言われる生意気な一年生をシメにきたと言ふようなことが辛うじて聞き取れた。(じゃあ、あたしのことだ)とのこのこ付いていくと男子高生らしき30人ばかりがずらっと集まっている。しかも凶器を持っているまでいる。で、問答無用で全員をKOする。何パターンかの噂で悉くメインとなる決闘は「で、で済ませられてしまふ。よっぽど印象に残らないくらい物足りなかつたのだらう。よくよく話を聞いてみればタツミはタツミでも、巽龍の方を呼ぶ手はずだったという。全滅するまで誰も気付かなかつたのはおかしいと思うだらうが、「やたらでかい男」という特徴しか伝わってなく、当時185センチの巳津さんは初見のそのバカどもに本気で男と見られてしまい、一切疑われなかつたそう。なんとなく、悪鬼羅刹と化した大女が、本気で全員病院送りにしてしまったとしてもおかしくない気がしてくるのがこの話のミソになる。真偽のほどはともかく、その日から巳津さんは髪を伸ばしだしたそう。

そんな因縁を持っているだけに、初顔合わせの時は剣呑な雰囲気

であったそうだが、激しくぶつかり合った後は逆に一気に親密になったと聞く。

それで卒業してからも巽さんといつも一緒にいる彼女が、？魔法少女？として別の顔を持つことなど可能なのだろうか。まあ、そこまでぴったり離れもせずにいるわけではないのであるが。副店長然とはしているものの屋台の方はあくまで善意から手伝っている形で、それとは別に巳津さん自身も何か職を持っているらしい。

もちろん昼間っからラブラブするためにブラブラしにきているよな人だから勤め人ではないし、日雇いか工芸的な作業でもしているのではないかと思われる。並の男と並ばせると、男の方が気の毒になるくらい身長が高く、この時期から脇を見せびらかすようなタングトップを着て、そこから伸びる腕もアスリートのように逞しいが、意外にも手先は異常に器用だ。焼くのはさすがに巽さんが仕切っているが、材料を切るなどの下処理はほとんど彼女がこなし、手際も驚くほどスムーズである。

あれで少しは巽メニューに口を出してくれれば助かるのだが、惚れた弱みかここにこと見守るだけで口出しは一切しない。たまに握りつぶされた電卓がそこら辺に転がっていたりするが。実は料理センスがないのかなのだろうか。

しかし、この二人の内どちらかが犬娘でなくても構わないと思う。寅田のいじめに遭っていたボクを見兼ねてなんとかしてくれたいのはこの2人だ。具体的にどういうことをしたのかは知らないが去年の暮れから正月明けくらいまで寅田の奴は学校を休んでいた。わざわざ冬季休暇に重なるように日程を選んだのは2人の優しさか。

だから、恩義は感じているし、損得抜きで何かをしてくれる相手にこれ以上何をさせれば良いのかも、正直わからない。

第一章 その6

「あらん、マネちゃんてば学校おサボりい？」

両手を重くしての帰り道。気持ちまで重くなる呼び掛けにうんざりする。

変態ババアのせいで余計な時間食っただけで、何も口に入れていない。

断食というのは空腹で辛いものだが、いざ食べても良いとなってもいきなりがつついてはいけない。空腹時の胃は荒れているのでまずは刺激の少ない粥だのを少量ゆっくり食べるのだ。そんな腹ペコのボクへ、香辛料を利かせすぎたような作り声がぶつかってきた。ボクは辛いものとか苦手なんだ。相手にする必要もない。

「なにヨ、ツレないわねん」

速足で遠ざかるボクへ、しかしその声は周波数を上げて近づいてくる。音よりも速く逃げる心に現実は何かの歩みで追い続ける。

たこ焼きだつて暖かい方が美味しいだろう。なるべく早くケリをつけたい。意を決して音源を睨み付ける。

そこには、巽さんほどではないにしても、190はありそうな長身が威圧感たつぷりに見下ろしていた。不自然にカールした長髪に人工的な美を描き出そうとしている前衛的化粧。チャラチャラとしたアクセサリーを全身にちりばめ、チャイナドレスでまとめている。チャイナから飛び出た逞しい足には密林の若草のようにしつかりとした体毛が植わっていた。

平たく言えば、歩幅のでかいオカマに付き纏われている状況だ。

「メシ買いに出ただけですよ。サラさんもこんな時間から店開いたって誰もこないでしょ」

そして、認めたくはないが面識のあるオカマだった

「結構入るわよお。仕事サボったリーマンとか、大学サボった学生とか、人生サボってるニートとかね」

サラさんはバチコンと重たげなつけまつげを打ち鳴らすかのよう
に気持ち悪いウインクをしてそう言う。まあ、お天道様が高い内か
らオカマバーにしけこむ連中もいるということか。

ボクが神妙な顔をしてみせると、

「マジメに受け取らないでよ。ランチもやってるのよ」

ああ、飲み屋で昼も開いてたりするアレか。

「その格好で接客しているわけですか……」

「そおよう。女はいつでも綺麗に見られたいものなのよ」

間近に顔寄せられれば間違える奴はいないのだが、改めての確認
するとサラは生物学的にはオスに分類される。サラは源氏名で、本
名は騎馬きは駆かけるという。上背はあるものの、やや馬面の顔から始まって
全体的にはほっそりとした身体をしている。それでいて威圧感があ
るといふのは、引き絞られた筋肉の隆起が薄い皮膜越しに見て取れ
るからだろう。スーパーヘビー級以外のボクサーのように闘う力だ
けを残して無駄な肉を削ぎ落としている。まるで刀剣だ。

そんな身体をチャイナドレスで露出させては女らしさを出すには
逆効果だとは思っただが、この人はチャイナを愛用している。需要
はあるということなのだろうか。オカマの世界はよくわからない。

「昼休みもつたないんでもうカンベンしてください」

聞く耳を持たない気持ちを言葉に込める。邪険にしっしつと手で
掃くのも忘れない。

しかし……このオカマもボクに関わりがあるといえはるのだろ
うか。オカマを手駒に加えてもなあ……。二度と顔を見せるなつて
命令すれば聞いてくれるのだろうか。なんだかんだで理由付けても
つと親密になろうとしてきそつな最悪の予感もしないでもないのだ
が。

ところで、ボクにセクハラしまくっているこのオカマ、こんな
が？魔法少女？になって大丈夫なのかと心配する声が聞こえてきて
もおかしくないだろう。隙あらば人のケツを追いかけるのだから、
ケツに隙間があればどうなることか。

罪人が？魔法少女？になつた例はあるならば、？魔法少女？が罪人になつてもおかしくはない。確かに、？魔法少女？が性犯罪を犯してしまえば悪徳警官みたいなもので取り締まる者がいなくなつてしまい腐敗が始まるだろう。

だから、それを防止するようなルールが？魔法少女？には存在する。それは、『他所の担当区域へ出場することは自由』というものだ。？魔法少女？は厳密な担当区域が割り当てられ、それはしばしば市区町村等の境界と一致する。それを超えて活動することは許されない、というわけではない。？魔法少女？同士の間で不正防止監視のために活動自体は制限してないのである。隣接した区域とまでは指定されていないが、多くのケースでは近場の？魔法少女？が出てくることになっている。

とはいえ、？魔法少女？を？魔法少女？が裁き鉄拳制裁を加えたことに関しては記録が残っていない。だからこのルールの用途は推測にしかない。同じ人間のやることだし、間違いが起こらないとは言えないが、とにかくこういったルールは存在している。

なんらかの理由で担当区域を離れる場合などでも適用されるので、まったくの無駄だとまでは思わないけれど。

ところで、このルールだとあることが想定できてしまう。それは、？魔法少女？同士が一堂に会するというシチュエーションだ。土地に縛られることなく動けるので、変身さえできてしまえばどこにでも行けるわけである。変身だけは担当地域内で行わなければならぬが。

？魔法少女？同士が素性を明らかにして密会することは禁止にこそされていないが、推奨はされていないようだ。この点に関しては警句となる手記があるので引用しておく。

*月*日

今日、初めて自分以外の魔法少女に出会った。どうもコミュニケーションによっては定期的にお茶会なんてものも催していたりしたら

しい。ストイックにミッションをこなしていた自分にとってはカルチャーショックだった。それにしても、流石に魔法少女だけあって皆一様にかわいい。自分だってオッサンだからあの人たちの中身だって知れたものだとはわかってる。わかっちゃいるが、かわいいものはかわいい。

不満だとかをぶちまけるのも楽しかった。普段中々そういう機会はないし。

それと、今まで思い至らなかったのだが、名前を決める必要があることに気付かされた。「魔法少女さん」では混乱するだけだ。あそこにいるのは協力者を除けば魔法少女だけなのだから。

(中略)

*月*日

ちゃんと最近よく話をしている。ちゃんは本当に魔法少女そのもので、他の連中がすぐに本性を透かしてしまうのとは違ってどんな時でもキャラを崩さない。いや、あれは自然に構えているだけで、内面もあのように美しいのだろう。

*月*日

***ちゃんと会う約束をしてしまった。いけないことだとはわかっていたが、人格として好きになってしまったのもつと腹を割った話をしてみたい。そのためには魔法少女のままでは無理だから、この気持ちがわかるのならば……と口説き落とすのだが、こんなムチャな話も真面目に取り合ってくれる彼女が素晴らしい人でないわけがない。

*月*日

会わなければ良かった……。

引用終わり。

彼がどんな人物と遭ってしまったのかは謎のままだがどれほど残念な結果が彼を襲ったのか想像することはいくらでもできる。

文通だのネットだのと同じで、仮面を被ることが当たり前になっているからと言って、今自分がどんな仮面を被っているのか、そしてその下でどんな表情を浮かべているのかを忘れてはいけない。それは相手にも言えることなのだから。

騎馬に対してボクが被っている仮面はどういうものなのだろう。セクハラが嫌ならば？魔法少女？を呼んでしまえばいいだけなのが今のところ？魔法少女？が現れたことはない。ボクの方としてもわざわざ呼ぶほどのことかなという思いもあるので、性犯罪認定に引っかかるだけの事実とそれに伴う感情の形成がいまひとつなのだと思う。

などと考えていると肩に触れるものがあつた。

空気のような軽やかさがねっとりとしたものに変わり、肩から二の腕、肘へと降りてくる。明らかに意思を持った人間の手の動きに全身の毛穴が縮まる。直感するのは、欲求の捌け口にされるあの感覚。咄嗟に騎馬の顔が浮かんだ。

「しつこいなあ、もう！」

騎馬オカマが遂に直接的な行動に出たものだと思つたボクは、軽く手を振り払おうとして予想外の抵抗力を感じる。焦つてもがくと、今度はがっしりと掴まれた。

「き、き、き、綺麗な肌してるね」

接触しているのは腕だけなのに、じつとりと湿つた感触が全身に伝わってくる。怖気が錆のように全心に広がる。恐る恐る振り返ると、騎馬の姿はすでになく、代わりにマスクで顔を隠した禿頭の男がゆだるような熱の籠もつた目つきで立っていた。

遠慮のない不躰な眼差しはボクの心をぬらりと撫で、絡みつくでも通り過ぎるでもなく、おぞましい鱗を擦り付けながら蠢いていた。「は、離せ！」

言ったところで離さないのはわかっている。だが、叫びは止められなかった。禿男に掴まれた腕がぴくりとも動かなかったからだ。痴漢が強化服を着ていることは昨今珍しくない。だけど、当たり前だったなら何も感じないのかと言えばそんなことはないのだと思い知る。湧き上がる恐怖がせめて視界だけでも閉ざしてしまえと瞼を下ろす。

風が吹いた。変態を吹き飛ばす突風でもなく、頬を撫でる程度のそよ風だった。しかし、それは予兆を孕んだ希望の風だった。

「……………」
「……………」

希望の姿を見るために瞼を上げるとそこには、ボクの腕を掴む禿男と、その腕を掴む犬娘とがにらみ合う光景が展開されていた。禿男はなんとか腕を振りほどこうともがいていたが、ボクの場合と同じくなんの効果も得られなかった。その内、禿男に変な具合の力が入ったのか、掴まれたままのボクの腕に激しい痛みが伝わってきた。「痛っ……………」

堪えきれない呻きが漏れる。

その瞬間、犬娘が爆発した。爆心地は掴んだ手の内側。禿男の腕を握り潰さんとでもする力の入りようで、スーツを隠す服の上からでも、あり得ないほどの細さに絞られているのがわかった。腱も血管も筋肉も骨も、まとめてぐちゃぐちゃに圧縮される嫌な音がした。もはや禿男に握力は甦らず、犬娘の怒りを見詰めたまま指一本動かさないボクの腕からずりりと滑り落ちた。

そこで我に返った犬娘は、悲鳴を上げる犯人に対して冷静に当身を食らわせて去っていった。本日2度目のおでましただったが、今度は呼び止める暇もなかった。

第一章 その7

「もう終わりだ……」

まだ何も始まつちやいねえよ！

なんとなく自転車の2人乗りでもしながらそう叫びたくなった。そう、まだ犬娘の正体探しも、授業の5限目も始まつていなければ、ごちそうさまも、いただきますも言つていない。

ちよつと買い物に出るだけで2度も犬娘のお世話になつてしまつたが、ようやく校門まで辿り着いた。昼休みはまだ半分くらいは残つている。胃袋は空つぽだ。まつたく、酷い目に遭つた。

そこへもつてきて気が滅入るような呟きだ。無粋な声のした方へなんとなく目を向けると、クラスメイトの日辻潤ひつじみずがうずくまつていた。校門から続く塀沿いにある花壇に埋もれるようにして地味なジャージ姿が背を向けて縮こまつているが見間違えようがない。脱色した髪を細かく結わえた数十のリボンという特徴で断定できる。

玉子に負けないくらいの矮小な体を折り畳み、家庭菜園部が丹誠込めて育成中の青々としたトマトをツンツンとつついている。陰気臭いな。

「はあ……」

今度は盛大な溜息ときた。ボクの腹の虫も負けずにうるさくなつてきたがこのままじゃメシが不味くなりそうだ。

「どうしよう、お腹空かせてるんだろうなあ。はあああ……」

ぶちぶちと頭のリボンをむしり取りだした。これは本格的に危ないのかもしれない。近寄つてみると、解いたりボンを開いて目を走らせている。中にはびっしりと文字が書き込まれていた。「これはやった」「これもできてた」と呟いているが、メモ帳代わりにしていたようだ。へんてこな頭しているなあと思つていたがこれで謎が解けた。

「どうしたんだ、日辻」

「いや、私が悪いんだ……お弁当を持ってくるのを忘れなければ」
一見会話が成立しているっぽいけど、日辻は自分の世界に入っているようでこちらを見向きもしない。小柄な体をさらに縮めて面を伏せる。

日辻潤という女を理解していたわけではないが、こいつはこんなキャラだっただろうか。自己主張こそ控え目ながらクールに淡々と雑務をこなしているような印象があったのだが。

もっとも、教科を間違えるなんてのは日常茶飯事で、教室移動などであると必ず最後に駆け込んでくる。そんな時でも息一つ切らさないでいるポーカークフェイスが印象的。

調理実習の時間など『日辻注意報』が出るくらいだ。火気厳禁。だけどそれじゃ授業にならない。ゆえに、『日辻注意報』。普通に作業をこなしているようであり、あいつの腕の届く範囲には地雷が埋まっている。

どんなドジをしたところで、何事もなかったかのように振舞う、ある意味大物っぷりを発揮しているのが日辻潤だと思っていたのだが。それがここまで取り乱すとは何があったのか気になるというものだ。

「だから、何があったんだよ日辻」

「うるさいな！ ちょっと黙っててくれないか!？」

逆ギレされてしまった。しかし、振り返った日辻の目はボクの手元に釘付けになる。

「おおおお……」

餓鬼のように気味の悪い唸り声を出してまで凝視しているのは、ひよっとしてこれのことだろうか。ぷんと匂ってくる焼き色の付いた小麦粉と甘辛いソース、それらを渾然一体とまとめるカツオブシの香り。

「タコ焼きと大判焼き。ボクの昼飯だけど？」

怪訝に問うとがっしりと肩を掴まれる。意外と握力が強い。

「ね、猫魔……いや、猫魔クン？ ちょっと、それは君みたいなチ

スリムな人間の食事としてはいささかばかり多いんじゃないかな？ 過剰なカロリーは脂肪にしかならないぞ？」

今、チビって言おうとしたら。人のことは言えないくせに。

「いや、宇佐美の分も併せてだし。それにボクは太らない体質だ」

本当はそれでも多いと感じていたが黙っておく。相手がカードを伏せているなら、そこに黙って乗るのは気に食わない。

「う、う、宇佐美先生は最近ダイエットしていると聞くぞ？」

「してねえよ。する必要ないだろあの貧弱な体型で」

「い、いいい、いや、女の人というのはだな、見えない所で気を使うものなのだ。あれでいてちよつとお腹を開いてみればぞろりと黄色い脂肪が飛び出てくるほどにメタボっているのかもしれないぞ」

手に力が込められる。痛いほどだ。ボクを見る目も某妖怪絡繰り月光漫画家のように瞳孔が縦にひしゃげるような異様な力が渦巻いている。

「び、微妙にグロい想像をさせるな。内臓脂肪ならお前の方が怪しいんじゃないか？ 血色良いほつぺたしやがって」

うう、と両手で顔を抑える日辻。テキストこいただけが、心当たりはあつたらしい。なるほど、女は外見だけじゃ測れない。

「で、何があつたんだよ？ 事と次第によつちや協力してもいいが」
ボクが甘い水を差し向けると、顔面百年戦争と呼べるほどの葛藤の後、日辻は膝を折った。というのは比喻表現だが日辻は本当に戦いに敗れた騎士のように膝をついてうなだれていた。ここまで大袈裟なヤツだとは思ってもみなかった。

「わ、私は今日、弁当を持ってくるのを忘れてしまったな、その、財布も忘れてしまったがゆえに買い物もできず……」

「はあ、ひもじくて困っている」と

まだなんか隠しているなとも思ったが、聞いてみればたいした事はなかったし放っておくことにする。宇佐美と2人では食いきれないほどおまけを持たされたことだし、ここは是非とも巽さんの創作料理の方を処分、もとい、分配してやることにした。

「ほれ、こつちはやるよ」

ところが、2個重ねて下駄のような無骨さとなった大判焼きを持たされた日辻は、まだモノ欲しそうにこちらをチラチラと見ている。「……それで十分だろ？」

一人前以上と思える分量を手にはしているはずだ。

「いや、私は胃袋が人より大きくてな……ははは……」

羊の腸は体長の20倍、伸ばせば11メートルにも達するというが、まあそれは関係のないことだ。

問題なのは、すでに日辻がうんざりとした顔をしているということだ。野良猫だってこんな顔してたら煮干しも跨いで通るだろう。

本当に食べきれないのだろうかという疑問も浮かんだが、どうせボクらも食べきれないなと思っていたので、異さんにサービスで持たされたたこ焼きも分けてやった。これで貸しが増えたと思えば良い。後で過払い寸前まで請求してやろう。

ところで、日辻とは口を利かない仲でもない。常日頃からボクを敬遠している他のクラスメイトに比べればという程度ではあるけれど。日辻にとってボクは避けるのすらどうでもいい存在なのかもしれないが。

あいつのキャラからして？魔法少女？候補から自然と外していたのだが、ああいううろたえる姿を見てしまうとそれとなく犬娘と重ねてもしっくりくるような気もする。何より、困らせてみるのも楽しそうだと思った。実用的な利点はほぼ皆無でも、人生には無駄も必要だ。

しかし、対犯罪という失敗することの許されない任に就いている？魔法少女？にあのようなドジ娘が選ばれるものだろうか。

そういう疑問を持つ人も多いかもしれないが、？魔法少女？に選ばれるかどうかは天賦の才能や優れた資質だとかそういうものとは無関係である。

そのことについて考えさせられる手記があるので引用しておく。

私の配偶者は緊急に骨髄の移植をしなくては助からない病気にあ
る。そのことは何度も確かめたことだ。たとえ、あの人が死んでし
まった後も、そのことを忘れることはないと言っても良い。

それには理由がある。

私自身が死ぬまで公になることはないが、私は？魔法少女？だ。
私の実際の姿を目にしている知人に話したところで一笑に付されて
しまうだけだろう。誰もがなれる？魔法少女？。だがそのイメージ
は少なからず清らかで美しいものであるはずだ。自分でもそのこと
は務めて心がけてきたつもりだ。

その幻想を守るために戦ってきてなんだが、今にして思えば自分
でも笑ってしまうほど、実に薄っぺらでちっぽけで頼りない陽炎だ。
空想でしかあり得ない少女にも普通の人間と同じ実生活があるとい
うことに目を瞑り、犯罪者と雖も血の通った人間を問答無用で叩き
のめす凄惨さに耳を塞ぎ、どこまで行っても血腥い結末に口を噤む。
この幻想を壊そうとしない理由など一つしかない。持たざる者の
憧憬だ。せつかく手に入れたのだからナントカして欲しいという無
言の欲求がその裏には潜んでいる。

もちろん、私個人もせつかく与えられたのだからと日々努力して
いる。やることに努力は必要ないとしてもだ。たとえ、私以外の誰
かがなれる可能性があったとしても、私が怠ける理由にはならない
と思う。

だから、？魔法少女？はなってしまった側からは運命的でありな
がら単なる偶然でもあり、何処かの誰かと自分を置き換えてしまう
苦悩を伴うものなのだ。

私の配偶者のドナーが、あの人の妹しかいないのと同じようなも
のだ。私は家族というものは崇高であり神秘的ですらあるという考
えを蹴るつもりはない。しかし、適合者はたった一人しか見つから
ないというものではないし、妹であるということに必然性はない。
単に、一人しか見つからなかった適合者がたまたま妹だったという

だけのことなのだ。

私がどれだけ努力しようとも、あの人がどれだけ素晴らしい人で友人知人が多くあろうとも、誰も救いの手を差し伸べる資格を有しなかったのだ。？魔法少女？になれるということはそれだけのことでしかない。それが齎す物の大きさはともかく、ただそれだけのことでしかないのだ……。

？魔法少女？とドナーという持つものと持たざるものという二つの立場を一遍に経験してしまったがゆえに、私が何を持たされ、何を持ってなかったのか、ということについて考え続けなければならぬ。だから、私自身に死が訪れ神に全てを返す瞬間まで忘れることはないと思うのだ。

引用終わり。

ちなみに、この男性（繰り返し返すが？魔法少女？は性別とは無関係だ）は結婚してからずっと妻とその妹を間違えていたというっかかり屋さんである。そして、その妹（記述的には妻本人とも読み取れるが、注釈では『事実検証の結果、ドナーは真実、妹だった』となっていた）がドナーであったことを考えると非常に恐ろしいものを感じずにはおれない。「いや、これはわざと間違えたフリをしているのではないか」という憶測も飛び交ってはいたらしい。が、真相は藪の中である。

「あれ？先生もう食べてるんですか？」

教室に戻ると、宇佐美はおにぎりを両手で抱えるようにして小さな口でぱくついていた。

一瞬でも、泣きべそ腹ペコ兔を想像していたボクは本当にバカだったんだな、と思った。

「うんっ！オオガミさんに貰った！」

無邪気な笑顔には、ダイエットなどという浮世の憂い事など微塵も浮かんでいない。ちなみに、？オオガミ？というのは犬神のはらのことだ。出席簿で「犬」の点を見落としてしまったのが原因と伝え聞く。一回間違えるとこの先生はなかなか修正できないらしい。気を抜くとすぐに間違える。

優秀な先生だと評価したこともあるが、気のせいな気もしてきた。のはらは所謂痩せの大食いなので弁当はいつも余分に作ってきている。おすそ分けでもしてもらったのかと思ったが、見れば、同席している玉子も同じおにぎりを口にしていた。

玉子の前には大きな重箱が3段ほど重なっている。その内の1段がのはらの前にあるということは、自分の分はとうに食べ尽くしてしまって、それでも足りなくて玉子から貰ったということだろうか。すでに2段ほど空けている。まったく、意地汚い。

と、心中で推理を働かせつつのはらの目の前のおにぎりに手を伸ばしたら、ひょいと重箱ごと退けられてしまった。

「……！」

口いっぱい米粒を頬張ってもごもごさせながら睨まれた。言葉にしなくても、薄汚い野良犬を蔑むような目をしていたのがバレたらしい。

「はん、ちょっと美味そうかななんて思っただけだよ。取りやしねえよ。どうせ見た目だけで不味いんだろ　うあっ!?!」

のはらの隣に腰掛けようとしたボクの脛に激痛が走った。

痛みにかがんだボクの顔面を白い物体が襲う。くにやりとした感触が弾けた。

多分、おにぎりだ。塩味がいい具合に利いてて目が痛てえよ。

いくらのはらでも、おにぎりで殴ろうなんて発想が出てくるはずもない。ボクに差し出そうとした途中で激昂して脛にトウ・キックを叩き込んできたので、前のめりになったボクの顔面が白米塗れになったというだけだ。

なんで怒るんだよ。玉子のもらい物じゃないか。あいつなんてど

うせメイドかなんかを口の昇る前に叩き起こして無理言って作らせ
てるんだぞ。それにしては、たまご焼きとおにぎりだらけの安い内
容だったが。そこまで玉子に友情を感じてるのか？

「くそ……もつたないだろ」

憎まれ口を聞きつけると、のらはバッグからタツパウエアを取
り出す。マジックで大きく『かりん専用』とある。ああ、無駄には
しないと聞いたいわけね。

まあ、そんなことは放って置くとして……せつせとボクの頭部周
辺に散らばったおにぎりを掻き集めているのはらも放って置くとし
て、どうもエサは行き渡っているようだし手に持っている袋の重み
も増してきた。

「しょうがないな……これどうしようか」

素っ気無い無地の袋を掲げると、宇佐美の目が煌いた。ちまちま
と食べていたのにほっぺにまでご飯粒をくつつけている。もう満腹
なんじゃないのかという言葉を遮ってシュビッと手を挙げる。

「あ、うさ先生まだまだ食べられますよ」

一瞬で巽さんのところのたこ焼きと判別できたらしい。宇佐美は
あの店の常連だしな。だから買ってきてやっても良いかと思っただ
が。

「たこ焼きは別腹ですから」

よほど燃費が悪いのだろうかこの小動物は。本当に女はわからな
い。嬉しそうに包みを開けるとまだ湯気の立つひと粒を頬張った。

「うん、おいしいですう」

口の周りをソースとかつぶしと青海苔としょうがでべとべとし
ながら宇佐美は微笑む。

「へえ、どれどれ。あたしもひとつもらおかな」

ひよい、と玉子が横合いから失敬する。玉子の口の大きさからす
るとギリギリ通過できるかどうかなのに、口元にはソースも青海苔
も付いていない。そういう宇宙の神秘に思いを馳せていると丸い物
体が目の前に突き出された。

「あーんしてください」

「は？」

「おいしいですから、まねきくんもおひとつ、あーん」

要するに、たこ焼きを食べさせてあげるからお口を開けなさい、ということだろうか。

「いや……やめてくださいよ。いいですよ、ボクの分もたくさんありますから」

方便でなく、本当に食い切れなくらいあるのだが、宇佐美は手を引っ込めない。

仕方なく目を閉じると、またもや脛に痛みが走った。同時に口の中へ転がり込むたこ焼き。

思いの外熱々だった小麦粉と魚介類の包み焼きはボクの悲鳴を焼き尽くしてしまふ。上と下から迫る苦しみを無言でのた打ち回って耐える難しさを知った。

やっとのことであたこ焼きは処理できたので、そっぽ向いてもくもくと食べ続けるのはらに憎まれ口を叩き込んでやることにした。

「なんだよ……意地汚い奴だな。そんなに欲しけりゃボクの少しやるよ。それとも、あーんしてみるか？」

ほれほれ、と楊枝に刺したたこ焼きを眼前に揺らしてやる。

と、脛に3度目となる烈痛が、いや4度5度、6、7、8……と立て続けに上履きとは思えないほどの、皮膚を突き破り骨を砕き神経へと直接痛覚を与えているような打撃が叩き込まれた。

ポロリと手からこぼれ落ちたたこ焼きは、のはらが神速の箸捌きで救出している。お見事とでも厭味を言っただけだったが、今度は本当に声も出ない。

なんだか歩き回って痴女に遭遇して犬娘調教してオカマをあしらって変態に遭遇して日辻をからかってそれから蹴られたり蹴られたり蹴られたりばかりでボクもガス欠になってきた。腰を落ち着け巽さんの腕の上達振りでも照覧するとしようとした時、ガラッ！と威勢良く扉が開いた。

扉を開けたのは日辻だった。

「おじよ……」

とまで口にした日辻が何か怖ろしいものでも見たように硬直していた。あいつに関しても、女だからわからないということにしておこう。

日辻は、昼休みぎりぎりまでかかって、大判焼きを食べ続けていた。涙まで浮かべてよっぽど嬉しかったのだろうか。

「せんせー、日辻さんは体調悪くなったので保健室で休んでいます」
こんなオチが付くのだけれど。

第一章 その8

「おい、その迷えるニヤンコよ」

「迷ってません」

さて、帰るか。

放課後の教室、特にボクの周りに人はいない。声はすれども姿は見えない。だとしたらそれは気のせいというものだろう。

「迷ってる者は大抵そう言うものだ。迷いすぎて一周して徒労感を味わう前に我に尋ねてみるが良いぞ」

「血を迷わす趣味はないですから」

教室のドアからおいでおいでと手招きだけが顔を出す。幽霊だと仮定する。気持ち悪いので見なかったことにしよう。

「気の迷いをする予定はないか？」

「気の迷いをわざわざ引き起こすような本気の迷いは今後一切ありません」

柱から半身を出してこちらを見る女と一瞬目が合った。

宇喜多示申 うきだ ししん 瀬土高校3年女子。父親と2人暮らしながら特に貧困にあえぐこともなくたまにバイトをしたりもする。成績は中の上部活動なし。身長160センチ体重45キロ。バスト82、ウエスト57、ヒップ81。プロフィールだけなら普通の奴だが、我が校始まって以来の極めつけの変人を通っている。

つやつやしたストレートロングの黒髪を垂らしたルックスは涼やかな目元と相俟って和風美人として外見だけなら人気もある。ただし、浮いた話を聞かないのは外見だけに引かれた愚者を跳ね除けるだけの奇癖があるからだ。

「我は汝を教え導く神だぞ。悪いことは言わんちよろつと寄っつけて」

自称？神？。これで説明は十分だろう。

なんだったら、『オミワタリ事件』だとか『続・ファイナルデッ

ドコークスクリー事件』だとかを瀬土高生に聞いてみると良い。

今述べた特徴そのままの女が、親指をくいつと引っかけてボクを呼ぶ。呼び込みご苦労様です。棒立ちで無表情の彼女は？神？様だけど。

「センパイには悪いこと言っている自覚がないだけですから結構です」

いつの間にか顔がくつつくくらいの距離に来ているのも無自覚なんだろう。

独特な香油を使っている頭部から目を逸らす。キラキラとした光の輪を見ていると変なテンプテーションに掛かってしまいそうだ。外見だけなら神と言わずとも天使級だろう。外面と内面の不一致という点では親近感を持たないでもない。

ぶいつと顔を背けたボクが乗り気でないを見て取ると、宇喜多は手を替えてきた。

「菓子が食べたくはないか？」

ほれほれ、と内ポケットから何かをチラチラと見せびらかす。前例から言うと、あられたとかすあまの類だろうか。普通の高校生が好んで食すようなもんじゃない。物で釣ろうというのならそれなりの物を用意して欲しいのだが。

「仕方ないですね……ちょっとだけですよ？」

勘違いしないでもらいたいが、物に釣られたわけではなく、必死なセンパイを助けてあげたいだけだ。案の定、宇喜多の顔がぱあつと明るくなる。

「そうか、ではこれは成功報酬ということで汝の道が輝いたらば取りに来るが良いぞ」

ホントにニヤンコは食い意地が汚いのう困ったちゃんなどと口になっているが、ボクは1度だって安上がり喜んで覚えはねえよ。だって今までもらったことねえし。

いそいそとお菓子の袋をポケットの奥の方へと押し込む。後でくれる気などあるはずもない。かといって寂しくて今にも泣きそうな

子からお菓子をとり上げるほどボクは非情じゃないつもりだ。

ちなみに、ここまでのやりとりを傍で見ていたとしたら、宇喜多の表情は変化がない：ように見えたはずだ。宇喜多の鉄仮面は有名で表情筋が全く仕事をしていない。黒目がちの瞳は半分まぶたが降りている状態だし、抜けるように白い肌はそのままどこか白一色の異次元にでも抜け出てしまっているんじゃないかというほど変化を見せないし、冷や汗はおるか夏場でも汗を掻かない特異体質だしで彼女の内面を推し量るサインは見当たらない。

しかし、常人の標準に合わせずによく観察すると意外と多感であることをボクは知っている。まばたきの回数が1/60秒ずれるとか、奥歯の噛み締めが0.01ミリ変化するとか、鼻息で揺れる産毛の数が変わるとか。この違い、わかるのはボクくらいなものだろう。

この程度の観察もできないのは、彼女をじっと見詰めるということと自体が大きな壁となっていてからでもある。ただ黙っているだけでも圧力を感じさせる彼女を前に常人なら3秒耐えられれば上出来だ。にらめっこで負けたことがないんじゃないだろうか。

「また占いですか？」

「我は占いはせんよ」

だが、連れ込まれようとしている部屋に掛かっている表札には「占い研究会」とある。がらりとドアを開けると中には誰もいない。宇喜多はそこへ我が物顔でずかずかと踏み込む。宇喜多がこの研究会に所属していたり、ひとりで部の存続のために奮起していたりするわけではなく、毎日入り浸るものだから正規メンバーが寄りつかなくなっているだけだ。宇喜多の占いを信じているような連中でも専らそれだけをしたいというわけでもない。占いの館に通いつめる女性のすべてが占い師になるわけでもないのと同じだ。

「ただの茶飲み話を楽しめばよかる」

そう囁く宇喜多の言葉の通り、茶器やコンロは揃っているし、活動費で食料品も賄っている。こんな研究会に金など出すものかと思

うのだが、生徒会にシンパがいるらしい。占い研究会に黒い金が流入し、それを我が物顔で使い倒しているわけだ。人脈というのも結構侮れない。占い研究会会員はおこぼれに預かっているから疎ましく思いながらもおおっぴらに文句が言えないのだろう。

「我の言葉は世の真理を見通した神の言葉なわけよ」

神は日本語が達者なようだ。ただし、愚昧なボクには心理であるはずのお言葉がさっぱりわからない。宇喜多語を翻訳する通訳とどこかにいないものか。

「でも、占ってますよね」

「占いというのはな、受け手が良いように解釈するものよ。であれば、我が真理を開陳して行けば辿り着く場所は同じとなるは必然である?」

「そういうもんですかね。で、真理ってなんですか?」

真面目に聞くつもりもないのだが、ボクの言葉を受けた宇喜多は唇に人差し指を這わせると半眼になって薄く笑う。それはぴくりとも顔面の皮膚を動かすこともないままに。その仕草には男も女も惑わせてしまう魔力染みたものを感じないでもない。?魔法少女?でさえ到達し得ない魔女の領域へとこの怪人は踏み込んでいるのだろうかという錯覚さえ覚える。

ボクが宇喜多を疎ましく思っただけでも、毎回言いなりになっただけのも、人外の力が働いてでもいるのだろうか。

そんなボクの心を見透かして甚振っていたのでもないだろうが、掌に汗が滲むほどの時間が過ぎて　宇喜多は口を開く。

「8月生まれは右から物事を始めてはならんな」

「ボクは1月生まれだ。っていうか右からってどういうことだよ」
「右足から歩き出すと碌なことが起こらんとかの」

そこでビターンと大きな音が聞こえた。

日辻潤がうつ伏せに倒れていた。後ろ頭でもわかる。いつの間にかこんな近くにいたんだろうか。存在感のない奴だ。そして、パンツ丸出しで転がっている姿を見て思う。ジャージの下だけ脱いだらし

い。あざとい。そこまでやってなぜ存在感がないのか不思議だ。

「何をやっているんだ、お前」

「べ、別に良いだろう……そんなこと」

好意の欠片すら見せない強気な態度が、ついに火をつける。

「ああ、お前がしましまパンツ見せる趣味があるうがなかるうが知ったこつちやないな。その代わりに知っていることを教えてやるうか？ お前、8月生まれだろ」

「……！」

びくんと背筋を突っ張らせる日辻。判り易い反応だ。カマ掛けるつもりで当てずっぽうを言ったわけでもない。倒れた時の日辻は足をクロスさせていて左足が後ろだった。その事実には宇喜多の話に耳にしていたのかもしれないという推測を絡めれば導き出される結論だ。日辻はこの辺りで立ち止まっていた。そして再び歩き出した。右足から。しかし、右足からはよくないと聞いて、慌てて左足を前に出そうとしたが、もつれて倒れてしまったということだ。

何でその程度で転倒するかねこいつは。尋常ではない。

むしろわからないのは宇喜多が突然8月生まれの話話を振ってきたことだ。こつちやない結果まで見越した予知なのか。ただ、そこは考えてもわからなさそうなのでスルーする。

「あ、こいつ、同じクラスの日辻潤って言います。こいつのこと占ってみてください」

どうせ碌なことを言われないうに決まっている。ボクに逆らった愚かな娘には良い薬だ。そんなボクの黒い期待に応えてくれたわけでもないが宇喜多はより深く瞼を閉じると不吉を運んできた。

「今月一杯くらいは避けられない不幸が多い。気をつけるが良いぞ。特に女難にな」

日辻は女だぞ。大丈夫かこいつの占い。

「今月いっぱいおっぱいに気をつけるわけですね……！」

「YES」

いや、こいつら頭大丈夫か。

それでも日辻は礼を言つて駆けていった。ずいぶん急いでいるようだった。探し物でもしているのかも知れない。

それからしばらく世間話みたいなことを話してボクも宇喜多と別れた。最近になってあちらの方から接触が増えたのだが、どうも意図が汲み取れ切れていない。いくら宇喜多が超有名人であり、ボクが超可愛くても、学年も違うしそうそう接点なんてあるはずないのだが。

ただまあ、こんな奇人変人でもボクと関わりがあるという点においては否定できない。宇喜多が？魔法少女？だった場合の試算を試みることにする。

なぜか宇喜多には信者らしきものは付いている。占いの的中率が異常に高いことが知れ渡っているからだ。どれだけ眉唾物だと思つてみても、信じてしまう人にとっては替え難い現実なのだろう。宗教がなくならないわけだ。

宇喜多を手駒に加えてもメリツトはなさそうだ。人望というかわな力リスマ性はあるみたいだが、占いについては出し惜しみするわけでもないし、宇喜多を直接動かせば逆に付いてこない者も多そうな気がする。

……ただ、あの澄ました面をひっぺがしたらどうなるのかというのは興味がある。

しかし、宇喜多のようなちよつと宗教入ってるようなのが？魔法少女？をやれるのだろうか？ 中世のことを持ち出しては仕方ないけれど、魔女裁判の歴史があるように信仰というのは厄介なものだ。宗教ちゃんぼん大国日本といってもそれは一般人レベルの話であつて本気で神だ仏だとかやってる人には自分の抱く神以外を受け入れない、というようなこともあるだろう。

？魔法少女？が信仰の対象になるのかと言われれば、別にそうは思わない人も多いのだろうが、この新たな秩序を世界にもたらした偶像に対しては、批判的な活動を行っている人たちが少なからずいると言うのも、また事実なのだ。

神が凶悪な性犯罪者から哀れな子羊を救わなくとも、？魔法少女？は違う。危機的状況下における超常体験によってそこに神秘を見いだす人もいるだろう。

だが、己が殉じる信仰と？魔法少女？を両立した例もちゃんと存在している。ちよつと名前を出すのが憚られるような過激な教団の教祖がそうだったのだ。

手記は特殊な書かれ方をしていた。元々、毎日日記を付ける人物だったようだが、日記といっても天気その他には今日は何を食べただのメモ程度の記述なのだが、それらに混じって到底食べられそうもない珍妙なものを食べたと記されている。

三月十五日 晴れ（ 太陽の絵）

じゃがいも、木苺のジャム、豆のスープを食べた。

三月十六日 曇り（ 困っている顔）

じゃがいも、キノコ、豆のスープとスパナを食べた。

三月十七日 曇り（ 目を閉じた顔）

野草、チーズのサラダ、豆のスープとスパナを食べた。

引用終わり。

当然こんなものをそのまま見せられても意味がわからないので研究者による解説本が出回っている。解説によればこの教祖は過度な粗食が祟って余り長くは生きられなかったとある。豆のスープとあるがインゲン豆を一粒入れただけという煮汁以下の代物だったらしい。

スパナというのは？魔法少女？への変身を暗示していると注釈が付けられていた。

公表された当時は宣伝効果となったのか入信者が急増した。本人には特に布教に利用しようという意図はなかったらしいのが皮肉な

ところだ。ところが、真に皮肉なことは既存の信徒もごつそりと抜けてしまったことだった。理由は「教祖に騙された」。言ってみれば敵対関係にあるような教団だったのだ。結局、このことによる信者の増減はトントンだったらしい。

今はそのにわか信者も自然減少してしまい、細々と彼らの神を崇めているということだ。

まあ、教義というのが「自己の性欲の絶対視」というもので、有体に言えば相手の都合などおかまいなくやりまくれという具合だった。性欲が昂ぶるのは神の思し召しとかそんな理屈だったと思う。実践レベルには達していなかったのが救いというか、法に触れるような信徒は魔法教祖自らが刈り取っていたという現実もある。彼女が何を思ってそうしていたのかは諸説分かれるところである。

教祖が？魔法少女？であったというだけで信仰が穢されたと感じる教義であったにも拘わらず、彼女は？魔法少女？をやり続けたわけだ。

ただし、信仰に殉じて？魔法少女？になることを選択しなかったというケースがあったとしても表沙汰になることはないわけであるし、魔法教祖個人が折り合いをつけられたというだけの話でもある。宇喜多についてもその頭の中にどんな妄想を飼っているのかは知らない。だが、？魔法少女？という異界を受け入れられるかどうかもわからないのだから、？魔法少女？ではありえないという結論にも至らないというのが現時点で取るべきスタンスだろう。

第一章 その9

「おや、まんまちゃん。奇遇ねえ」

自転車置き場の側を通りがかると烏丸玉子に出くわした。両手で茜色に染まった自転車を押している。玉子の脚では届きそうもない高いサドルが目立っていた。のはらに貸すのは朝だけで、夕方には返してもらっているとか言っていたはずだ。こいつこのまま押していくつもりだろうか。

「ああ、玉子か。まだいたのかよ」

「まんまちゃんこそ友達もおらんに遅すぎ」

宇喜多に付き合っていたら思いの外時間が過ぎてしまっていた。人が少なくなつてから帰るのが好きなのだが、今日はちょっと長居しすぎたか。

「友達いないやつが遅くなったって良いだろ」

チャリチャリと自転車を鳴らして校門へ向かおうとする玉子のふわふわの髪が羽ばたく背中へ文句を投げつけつつも、足は自然と止まり、目は落ち着きなくさまよう。玉子はボクが動かないので不思議そうに振り返った。

「まんまちゃん、帰らんの？」

くりつと首を曲げ大きく柔らかな瞳を向ける玉子は、ガキみたいなちんちくりんでも、光源を背にして薄暗さの中に沈んでも、清楚で可憐なお嬢様らしい風格が漂う。どちらかと言わなくても人生において主演女優となるべき人間だ。ただし、メインヒロインであるならばサブヒロインがいてこそ存在感が際だつ。いなくてはならぬのはむしろ助演女優賞に値するサブヒロインと言ってもおかしいことはこれっぽっちもありはしない。

だから、こういうことを訊いてもおかしくはないだろう。仲の良い2人が一緒に帰らないのを疑問に思うのは当然であり自然なことだしな。よし訊こう。

「……のはらは？」

「なんて？」

聞こえない振りをされたんじゃないかと勘ぐりたくなる。逆光の中で玉子がどんな顔をしているかわからない。夕日が頬の辺りを灼くのを意識してもう一度はつきりと声を出す。

「のはらは？」

「部活よ？」

素っ気なく返される。そういえばそうだった。美術部が毎日活動しているかどうかは知らないが、まだ帰るには早いだろっな。

「んじゃ一緒に帰るか？ 玉子もこれから帰るんだろ？」

「部活と言えば、まんまちゃんはコレ、いいの？」

パチーンと口で言っつて、指を2本前に振り出す。

「え？ ああ、将棋部ね。いいさ。別に相手にもならないし」

そういえば、将棋部の面々を忘れていた。もちろん？魔法少女？の候補としてだ。

確かあの日は合宿に行っていたんじゃないかな。詳しくは調べなければわからないが、レンタルワゴンで1泊2日。調度あの時間は車中のはずだ。少なくともこの町にいたはずはない。

では、距離が離れていればアリバイが成立するのかもしれない。そもそも限らないのが複雑なところだった。魔法も使えず徒手空拳で悪を叩きのめすフィジカルで真剣狩るな？魔法少女？だが、変身以外の唯一ともいえる特殊技能に、犯行現場に移動する時に限り、亜光速で移動することができるというものがある。

異星人は地球文明を超越した技術を地球人と接触させないことを原則としている。その中の例外として？魔法少女？があるわけだが、さらに例外中の例外として提供されているのがその移動手段だった。これは一刻を争う犯罪行為へ対応するために仕方がないからということらしい。魔法少女装甲も超技術であるので、システムを支えることについては別枠の技術供与に当たらないという判断なのだろう。この高速移動に関しては本人たちの体験談がないとぴんとこないだ

ろう。手記を引用してみる。

と思ったが、存在と時間について余りにも深く思索したよくわからないものしかなかったので割愛する。

無論、皆無とかいうわけではない。適当なものがないだけだ。

大抵の手記にはこの地球人類が体験したことがない移動について書かれてはいるのだが、平易なものを探すと今度は「気分が悪くなった」「今後はなるべく使わないようにしたい」といったネガティブで表層的すぎる感想がほとんどになってしまう。要するに、魔法少女？たちもほとんど認識できていないようだった。気づいたら犯行現場付近に移動しているのでは感想もへったくれもない。

それでも場合によっては数キロメートル離れていても一瞬で移動したという記述が発見されたりもしているので、移動方法については推察が繰り返されてきた。

例によって異星人は口出ししてこないなので資料を読み漁り現地へ飛んで実測するといった泥臭い作業がこなされたい。それらの活動によって、なんとか光速に近い速度で移動しているのではないかという推測に至つたらしい。なんの役に立つのか知らないが。

実はこの移動方法が判明した際は少なからず問題提起がなされた。付近住民の生活と安全に関わる重大な問題であると位置付け議論が紛糾した。

つまり、「それって危なくないのか？」ということだ。

街中をジェット戦闘機どころではない高速で飛来する物体があるというのだ。そりゃ、知らない人が聞いたら仰天するだろう。実際に被害が出たことはないのにも拘わらず頭の中で捏ねくり回した理屈が横行しても無理もない。

『衝撃波が発生する』

『わき見して衝突したら人体は消し飛ぶ』

『いや、すでにそうなっているから陰謀によって問題にすらなっていないだけだ』

音速を超えた際に生じる衝撃波とか経験したこともなかったり、実際に？魔法少女？がどういう軌道で移動しているのかを知らない連中に限ってそういう要らない心配をする。

貞操を至上の価値としている魔法少女システムだが、尻を触った程度と肉片が細切れになって吹っ飛ばような死の危険では分が悪い。反発だけが増えてしまう。流石にボクだって無辜の人命と指も入らないようなのだったらちよつとは言葉に詰まる。なむあみだぶつ。

犯罪者相手の行き過ぎも一部からは批判もあるが、自業自得の言葉もある通り、自分に被害の及ばないのであれば大多数は見えて見ぬ振りで済ましてしまおうだろう。

まあ、全部杞憂に過ぎないのだけれど。

未だによくわからない噂が独り歩きする割には、数十キロ離れた場所へ行くにもその倍以上の距離を必要としていることはあまり知られていない。要するに？魔法少女？は一端上空まで飛び上がったから誰も居ない空間を越えて目的地近くになると急降下しているわけだ。それにそのままの質量で移動しているわけでもない。変身によつてすべての細胞を作り変える？魔法少女？にとつて、変身中にもどのような物質に構成されようともさほど意味がない。たとえ密閉された空間にいようと、原子レベルで見ればスカスカなもんだ。まあ、障害物は無い方が良さしいので上空を利用してもらつているとか謎技術の都合とかなんとかよくわからない。

ともあれ、被害など出るはずもないし、これで死亡した？魔法少女？もない。

せいぜい電離層の外で全身にそれこそ細胞の一片にまで宇宙線に冒される程度で済むんじゃないだろうか。

普通に考えたら死亡も同然だが、その程度なら外宇宙のメデイカルシステムで簡単に治せるらしい。まあ、この辺りは情報ソースが怪しくなってくるので真面目に考えても仕方ないとも言える。死傷事故が1件もないというのは事実らしいし。

地球の裏で起こった事件であつても時すでに遅しとなる前に参上

できるよすにするための能力らしい。ただし、それでも前述したように「冗長なことをやっているの、危機一髪で駆けつけるといのは確率がぐんと下がってしまうのは十分考えられる。殺人などの手遅れになりやすい事件に介入させないのもこの辺りの事情が関係しているのではないかと思うのだが、真実はわからない。

そんなわけで、集団でバスに乗っていたとしても誰にも気付かれずに？魔法少女？としての任務を遂行できる可能性はある。

しかし、考えてもみてもらいたいが、そんな密室状況で知った顔が突然消えてしまったとしたら大騒ぎにならないと考えるのはいかにも不自然ではないだろうか。駆けつけるのは数瞬でも、現場には数分単位で留まっている必要がある。少なくともあの時は刹那に犯人をぶちのめして去っていったわけではなかった。のだから、誤魔化しきれるものではなかったと考えるのが道理というものだ。

もつとも、休憩中であれば多少姿を隠すのも可能かもしれない。だが、性犯罪はいつ何時発生するかわからないのだ。休憩時間を当て込んで旅行になど行っていられないはずだ。

もう一つ、？魔法少女？のある制約により旅行は事実上の任務放棄に繋がるのだが、以上の理由だけで奴らを容疑から外すには十分だろう。

それに、あんなカス連中の弱みを握ったところで、利便などあるわけもない。部活の勝負でわざと負けさせる？ ふん。わざと勝たせてやる方が難しいへボ揃いじゃないか。

「忘れられたん？」

眉根を寄せてかわいそうな子を見るように言わないでもらいたい。「知ってたよ。前日の出発直前にばったり会ったからな」

「はあ……」

溜息を聞こえるようにするやつは大嫌いだ。お前が言いたいことなんて、本人が一番良くわかってるものなんだぞ。

「まんまちゃんさ……なんかすぐくハブ……仲悪いように聞こえるんだけど」

「まあ、実際良好ではないからね」

「なんでそんな溝が生まれてるの？」

困った子を諭すような声のトーンにむかつくが、別にそれ自体は話すことに抵抗はない。

「将棋つてさ、ハンデ付けるのに駒を落とすんだよ。『手合割』って言うんだけど」

「てあいわり？」

「ああ……角落ちとか飛車落ちとかの」

専門用語で言われてもわからないなと思ったので補足する。

「あ、わかるわかる。それで？」

「あいつら弱いから何枚か落としてくれって言うんだけど、ボクは絶対それやりたくないわけ」

「なんで？ それでも勝てるん違うの？」

「勝つのは当たり前。でも、面白くないんだよ、それじゃ」

玉子はわからないというような顔をする。

「勝負は拮抗してた方が面白くない？」

「それは別。あと、言い添えておけば『圧勝』結構だね。すごぶるつきで気分が良くなるよ。でも、1手目でさえものすごく時間を掛ける棋士がいるんだぜ？ 勝負つてのは頭の前からしつぽまで詰まった鯛焼きさ。実力がさほど離れていないのなら駒を落として対局するなんてことはない。手合割を何回やってもその時のためにはならないと思うんだよ。囲碁だって最後に帳尻合わせればいいのになんで最初から石置かせてやるのさ。自転車の補助輪は本当に乗りこなすためには不要なものなんだぜ」

ずっと自転車を押している玉子をチラリと見て言ってる。動揺は見られない。実は玉子が自転車に乗っている姿は一度も見たことがないのでもしかしたら乗れないのではと思ったのだが。

「でも、正式にハンデとして採用されてるってことは、将棋の歴史的にそういう風にやるのがベストだってことなんじゃないの？」

「だからっ！ ボクはあいつらと意見が合わないの。多面指しや持

ち時間制限ならやってやるつつつてるのにさ」

「ふうん、それはハンデになるの？」

「いや、ならないね。ボク同時に物考えるの得意だし、こっちの回転も早いから」

頭を指さす。

「まんまちゃんって、ホント性格悪いなあ」

笑ってそんなこと言われてもな。

「やるんなら、あいつらが飛車角落とせばいいんだよ」

「まんまちゃんって、ホント性格最悪だねえ……」

そう、そのくらい蔑んだ色を含ませた方が良い。

「そんなだと、まんまちゃんの後ろには怖くて乗れないねえ」

チャリ、チャリ、と自転車の音は続いていく。

第一章 その10

「やっぱりお前だったんだな かりん」

そう言つて、金色に輝く毛を撫でてやる。首根っこをふんづかまえられた気分はどうだ。

きよとん、とボクが掴む手ごと首を傾げる食肉目イヌ科シープドッグ系の雑種犬。夕日の残滓が白く美しい体毛を黄金に煌めかせるヒトに比べれば小柄な身体。抱き締めるともつと小さく感じる。そして、ほつとするほどに暖かい。

長い毛脚に顔を埋めるようにして、しばしかりんの肉体を堪能している。と浮かんでくるのは犬娘の顔だった。

今日は図らずもボクとの閉じられた関係クローストサークルの連中を洗い出すことができた。しかし、これといった決め手はなかった。

であれば、もうかりん〃犬娘であると断定しても問題ないだろう。正直、めんどろになつてきたし、ここらで手を打つてもいいかなという気持ちも否めないのである。

しかし、動物が？魔法少女？となるなど果たして可能なのだろうか？

人間と言葉も通じなければ社会的にも同族であるとは言い難い、言つてみれば下等生物の畜生が。

実は前例はある。

オスのチンパンジーがある時期に？魔法少女？として活躍していたことがあるということを経済する記録が残っているのだ。

手記については、流石に本人といつか本猿直筆のものがあるわけではないが、飼い主が代わりに手記を残し、これが公開されている。魔法少女？の正体は他言無用の絶対秘密……ではあるけれど、例外として協力者の存在が認められている。組織立って？魔法少女？をプロデュースするというようなことは無理なようだが、友人知人の数人程度に事情を話してサポートチームを組むくらいならば許容

されるのが通例のようだ。

動物に限ったことではなく、他の？魔法少女？たちの手記でもしばしば『協力者』の存在が匂わされている。？魔法少女？と違って実名を公表できないので手記を読んでも虫食いのようになっていたのだが。

一応、飼い主の手記を引用してみる。

ワタシのスミレちゃんがあ魔法少女に選ばれるなんて！

なんて光栄なことなんでしょう！

スミレちゃんはそこらのエテ公とはモノが違うということがこれではつきりしたんだわ。

この記念すべき善き日に乾杯したくてうずうずが止まらないわ。選ばれるべくして選ばれたスミレちゃん。

ワタシだけは貴方の才能を見抜いていたのよ。

ペットシヨップで初めて目が合ったあの日のことを生涯忘れないでしょう。

一目見て神々しいオーラを感じたの。

天からワタシに使わされた天使がここにいるってわかったのよ。

この喜びを誰にも伝えてはいけないなんて、どうということなの！

胸糞が悪くなるのでこの辺で引用はやめにしておこう。

これまでも言っていることだが、？魔法少女？とは、異星人が所定の目的を達するために代理として立てた単なる執行人に過ぎない。確かに全人類が？魔法少女？になっていない以上、ある種の選別は行われていると言っても良い。ただし、選ばれたといっても、宝くじ（地方自治体のしよぼい方）だとか、カンビユセスの籤だとかに当たった、そういうレベルの話でしかない。それをまるで選民主義的に特別視してあたかも自分たちが至上の存在であるかのように考えるなど馬鹿げているにも程がある。

ちなみに、猿であっても？魔法少女？の死後にしか手記の公表は

許されていない。そして、このチンパンジーはかなり若くして死亡している。これが何を意味しているかは想像に任せる。

というわけで、人間以外が少女の外見を持って活動するというの
はあり得ない話ではない。もつとも、かなりの人が『サルだな……』
『サルね……』 『サルしかありえねえっしょ』とその？魔法少女？
が人間以外であることに確信を抱いていたという。外見だけ真似て
もどこかでわかってしまうことだろうか。他の？魔法少女？
たちと比べても偽装が上手くいっていなかったのは、種族間の壁は
厚いということの現れなのかもしれない。

さて。

とはいえ、正体が犬というのは流石に聞いたこともない。チンパ
ンジーであれば5歳児くらいの知能はあると言われている。ただし、
ここで求められるのはあくまで人間に近い形での知能なのではない
だろうか。

イヌとヒトとで同じような精神構造を持っているのかどうかにつ
いては疑問符を振り払えない。

真面目に考えればかりんもまた犬娘候補に過ぎない。

胸に吹く風を押さえつけるようになりんを強く引き寄せる。

「わん！」

雑種犬はただ嬉しそうに一声吠えた。

第一章 その11

「アニキい、これ、のはらちゃんとか持って行ってよ」

晩ご飯までの間、居間でテレビを見ながらごろごろしていると、ボクによく似た顔が台所からひよいと顔を出す。

首から下を出せばそこに鏡がないことはわかる。白地に黒と茶色の斑が入ったワンピースなど、男のボクは絶対着ない。

妹の再来マタキはにんまりと笑うと、後ろ手にしたまま音を立てずになやかな足取りで近づいてくる。ソファでリクライニングしていたボクの真後ろまで来ると、予告なしにゴンとタッパーウェアを額に載せた。

「なんだよこれ？」

折り畳んだ新聞紙ほどもある容器は額よりもかなり大きい。狭い所で落とさないようにバランスを取っていると、ぷうんと良い香りが漂ってきた。中身が食い物なのは間違いないだろうが。

「カレーか？」

「……肉団子と唐揚げとアジの南蛮漬けよ。どういう鼻してんの」

「いや、この南蛮漬けカレー粉使ってるんだよ。また料理手伝わなかっただろ」

キユンと口の端を引き絞るも、ボクの引っかけをホホホと軽くいなして流し目をくれてくる。深い瞳は失態でもなんでも覆い隠してくれるのだろう。

「最近の小学生って結構忙しいのよ。放課後はデートしたり会えない男にメール出したり」

「キャバ嬢みたいな小学生はどうかと思うが。ていうか、普通は宿題とか友達と遊んで忙しいんだ」

「そういうフツーにできてることはわざわざ言いませーん」

「ホントかよ？ お前ちゃんと母さんにテストの成績とか見せてるか？」

「真小音ちゃんにはいつも、『良くできてるわね。アタシに似て』
って言われてるもーん」

真小音というのは母の名前だ。親子3人揃って似たような顔をしている。ボクが冬、マタギが夏だとすれば、春のような人だ。いつもぽかぽか 頭の中が幸せそうで。

「最近、ボクの小学校の頃の答案がなくなってるのに気づいたんだが」

母さんはまったく同じモノを2回見ても気づきもしないだろう。ひよっとしたら名前を書き換えなくても。

「あらそう？ うつつかり食べちゃったんじゃない？」

「泥棒猫が。お前ホントは友達いないんじゃないか？」

年齢がやつと二桁になったような悪女志願少女の悪びれもしない態度に、思わず悪態が口を衝く。

顔の良さだけで満足せずに男を虜にする術を身につけていこうという姿勢は立派なものだが、どうも人間としての成長が偏向している気がしてならない。などと言ったところで、本人は力エルの面にシヨンベンなのはわかりきってる。と、肩越しに見せつける小生意気だが可愛い笑顔が物語る。

それにしても

金髪でも碧眼でもないが、マタギは顔形が犬娘によく似ている。

きつともうすぐ背も伸びて、体つきも女らしさを帯び、あの清純無垢な肉体とはほど遠くなってしまうのだろうけど。

「しかし、ずいぶんとたんぱく質豊富だな。で、どうするって？」

「おすそわけ。のはらちゃんとか、町会の集まりで誰もいないんだってママが言ってた」

「メシ時にそんなもんやる方が悪いだろ……」

「ああ、集会だけならもう終わる頃なんだけど、そのまま飲み会に行くからあとよろしく、だつてさ」

「頭腐ってるんじゃないのか犬神のオバさん」

他人の親に向かって失礼なことだ。案の定、マタギに窘められる。

「なあーに言ってるの。ウチとの付き合いあるから安心して任せてもらってるのっ」

ツッコミの平手を軽く首を振ってかわす。食料がまだ載ってたっているのに信じられない奴だ。

「そんなもんかね。でも、のはらまだ帰ってないんじゃないか？」

まだ学校　いいとこ帰りの途上なのではないかと思ったボクはそう言ったが、マタギは意外そうに　ボクにとっても意外なことを口にした。

「え？　さつき帰ってくるの見たよ？　うちの窓から」

マタギが指すのは2階にある自分の部屋だ。ボクはその向かい。

居間もそちらに面した窓はない。視界に入らないという意味ではない思議ではない

どうも話が食い違っている。ボクが玉子とばったり会ってから、かりんと遊んで着替えをしたりなんやかやしてここにいたるまで小一時間程度だ。自転車は玉子が持って帰ったはずだし、のはらの奴それほど早く帰れたものなのだろうか。玉子を先に帰したくらいだから部活でそれなりに居残るつもりだったように思うのだが。

でもまあすげえ足速いからなあいつ。

足を出すのも早いけど。

口よりも先にという意味で。せめて手にしろと言いたい。

「まあいいや。わかったよ」

のはらが家にいるのなら問題はない。容器を手で抱えると玄関に向かった。

「のはらちゃんと一緒に食べてきてもいいよ。こっちはあたしが片付けるから」

「何言ってるんだ。残しとけよ」

しかし、のはらが大食いなのを差し引いても大量だ。明日の朝の分とオバさんの分も合わせてということなのだろうか。まあ、あいつが食いきれないって泣きついてきたら片付けるの手伝ってやるか。それにしても、女だから料理くらい作れとも言わないが、たかが

一食の用意すらできないというのは人としてどうなのかと思わないでもない。乳幼児や傷病人ではないのだから。死ぬほど腹減ってるならご飯だけでも盛り付けて塩を振り掛けるなり、パンでも焼いて食っていれば良いのだ。

そしたら、あんまり哀れだからメシくらい作りに行つてやるのに。

徒歩10秒の犬神邸。

形ばかり呼び鈴を押して、勝手にノブに手を掛ける。

この辺りでは犯罪率の低さもあって、常時鍵を掛けているような家は少ない。？魔法少女？のための監視システムのお陰でもあると
は言い難い。都市部だと性犯罪以外の発生率はそれなりで、萎縮効果があるのではなんて声も古い新聞の中だけだ。というか、肝心の性犯罪自体も発生率が低くなったとはいえ、根絶とかそういう話にはなっていない。

本当に抑止効果がないのか 人間の業というべきか。

「のはらー、いるだろー？ メシ持つてきてやつたぞー」

一応そう呼びかけてからドアを開けると妙に薄暗い。

「電気くらい点けるよ……」

誰かがいる家に明かりがない。夕暮れ時ではタイミング次第ではしばしばあるシチュエーションだ。それでも、されるがままに闇の侵食を許している雰囲気はインモラルな気分を呼び込み、陰鬱な記憶が浮上してきそうだった。

パチンパチンとスイッチを点けて上がり込む。スリッパを取り出して引つ掛ける。いつもは素足で平気なだけけど、L字に伸びた廊下は依然として暗く、今は何か正常で清浄な儀式が必要だと思つた。

のはらの部屋まで上がつてしまおうかと迷っていると、暗いリビングにぼんやりと明かりが見えた。天井の照明でも、テーブルラン

プでもない、丸く縮こまった幽かな灯りだった。まさか人魂とは思わなかったが、おそろおそろ近づく、のはらが携帯電話を操作して、ディスプレイが光っているだけだった。

「おい、電気くらい点けるよ。幽霊かと思ったぞ」

ホツと胸をなで下ろしたボクが声をかけると、こちらこそがオバケでも言うほどびっくりしたようだ。携帯電話が手からこぼれ出て、カランと音を立ててガラスのテーブルに落ちた。

ちらりと携帯電話に目をやると着信メールの送信者欄に浮かぶ『

猪塚風太』という文字が飛び込んできた。目が良いのも考え物だな。

猪塚……誰だろう。ボクの知らない名前。知らない男の名前だ。

薄暗い中で光を発しているのはその液晶くらいなものだ。暗くなるまで気づかず、のはらはずっとそれを見ていたのだろうか。いつから。どうして。相手は。

そう思っただけだと、視線の意味に気付いたのか、のはらがさっと開き放しの携帯電話を隠す。他人のプライバシーに立ち入ったのはボクの方で、のはらが隠して悪い理由はない。

だけど、のはらの少し照れて俯いた顔を見て、突然湧き上がったこの居た堪れなさはどうしたことなのだろうか。

一刻も早く立ち去るためにはどうしたらいいのだろうかと鈍った頭で考える。実際は回れ右して来た道を引き返せば良いだけなのだがそれすらも凍りついた足には命令が行き届かないらしい。理由が

どんなにバカらしくてもだまくらかしてここから離れる理由が要る。

だけど、そんなものはどこにも見つからず、愚直にインプット済みの命令をこなすことをボクの身体は選んだ。

「これ、マタ……じゃなくて母さんが持って行って」

自分で驚くほど掠れた声がそう告げた。まだ暖かいはずの容器からはまったく熱というものが伝わってこない。いや、これはボクの手が冷たくなっているのだろうか。何か大事なモノが抜け出ていくように手や足が痺れるような寒気を訴える。

「……置いてく。容れ物は明日にでも返してくれば良いから」
「あ、アニキ、早いじゃん。どうだった？ おにぎりにぎにぎして食べてきた？ 別なのも包み込んだりして ってちよつとどこ行くの？」

妹の声も遠く、そのまま自室へと入るとベッドに潜り込んだ。

空腹は感じなかった。眠気も。三大欲求の二つが封じられると余計なことばかり頭をもやもやと埋め尽くす。

別なことを考えたかった。真っ先に浮かんだのは？魔法少女？のことだ。

猪塚風太……ボクはそいつを知らないが、相手はどうだろうか？
のはらと接点があるのならば 今更？ない？と考えるのは無理があるが、のはらと一緒にいることも多いボクのことを相手が一方的に知っているということは十分ある話だろう。

そんなのはクラスの連中にも言える。

そのように対象範囲を広げても泥沼になるだけだから、普通ならば切り捨てても良い類の推論であり、正体が分かったところで価値のない人間たちだ。

でも、その時のボクは普通じゃなかったんだろう。なんとしても、魔法少女？の正体を暴き、いや、？魔法少女？である猪塚を生きていることを後悔するほどの目に会わせてやろうと そのことばかりを昏い布団の中で考え続けていた。

第一章 その11（後書き）

これで第一章は終わりです。

大量の魔法少女容疑者が出てきましたが、主要人物も出揃っていますのでこの中に魔法少女の中の人はいます。

……まあ、出題には値しませんが。

引き続き第二章をお楽しみください。

第二章 その1

体格。

性別。

善悪。

年齢。

性格。

性癖。

資質。

信条。

種族。

何を以てしても？魔法少女？を推理する材料とはならない。

それでも、？魔法少女？を探し当ててやる。

頭の中を色々な顔がぐるぐると飛び回り明滅を繰り返す。その動きは速くて目で追えない。チビもノツポも男も女も良い奴も悪い奴もガキも年増も温和も苛烈も如何にもであったりそうでもなかったり神を信じてようが自分が神だと信じてようが人間だろうが 犬だろうが、ボクに関わりのある奴らだ。

目に見えるすべては真実とは限らない。目に見えない心であつても。

だが、何をしようと何が起きようと変わらないものがあるのであれば それは魂とでも呼ぶべきものだ。

猿のスマレは最期まで人間と話すことはなかったそうだ。チンパンジーだから人語を解さなかったのかもしれない。？魔法少女？の機能として言語能力付与までは持っていなかったのかもしれない。

だが、そんなもの関係のないことだったと思う。

ゴリラは手話で人間と会話をすることができる。チンパンジーは簡単な計算ができる。猿が人間としての知能を有しているとまでは言えない。しかし、カタコトで話す程度の脳味噌がスマレにあった

としても、やはりしゃべることはなかったのだとボクは思うのだ。

それは『スミレ』には『人間と話す』という様式がないからだ。

『スミレ』にとって『人間』は一方的に話しかけられたり、自分の行動を勝手に理解されるだけの存在だ。それが『スミレ』の魂の形だった、のだと思う。

霊的とかオカルトとかスピリチュアルなんていうとあやふやで目に見えないものという感じも受けるが、そうではなくその人物を形作る根元にあるすべての行動にの原型となるようなものこそが魂なのだ。少なくともボクはそう考える。

スミレが？魔法少女？の職務を遂行できていたのも、ボクらが考えているような理由からではなかったのだろう。

だからもつと目を凝らし耳を澄ましてつぶさに観察すればきっと犬娘の魂にも辿り着く。

周りを飛ぶ顔をもう1度見る。

くつきりとよく見えた。

当たり前だ。それはボクの頭の中のこと、見えなかったんじゃない。見たくなかったんだ。

その中で、ただひとり顔の見えない男がいる。ボクの記憶にない顔だからだ。そいつが？魔法少女？であると証明するにはどうすれば良い？

第二章 その2

いつの間にか寝てしまっていたらしい。

のどの渇きに目を覚ますとタオルケットを透かして蛍光灯の光が薄目を刺す。電気も消さなかったのかとぼんやりと考える。

時計を見ると0時を回っている。そういえば夕飯もまだだったな
と思い出したが、不思議に空腹は感じない。布団を1枚剥ぐほどに
は暑かったのだろう。からからになった口を癒したかった。

キッチンへ下りると、おすそわけするくらいには大量に作ったオ
カズが山盛りでラップされていた。母さんには悪いが、今は食べる
気はしない。腹が減ったらコンビニにも行こう。そいつはマタギ
と朝にでも食べてください。

冷蔵庫にコーラの缶があったので開けて飲む。プルタブを引くと
プシッと小気味良い音が鳴る。ボクは開ける前に軽く振るのが好き
だ。勢いよく飛び出た泡を口で受け止め、冷たい液体で流し込む。

犬娘の正体を暴くアイデアもこんなふう簡単に吹き出してくれ
れば良いのだが。

だが、弾ける炭酸で多少はリフレッシュできた。はっきり言って
今、犬娘が誰なのかとか言い当てることができたらそいつは名探偵
でもなんでもなく、ただの当て勘の山師かそうでなければ詐欺師だ。
現時点では調理法があっても食材が足りない。

考え方を変えるべきだ。誰が犬娘なのかではなく、犬娘ではあり
えないのは誰なのかと。

？魔法少女？の変身は完璧だ。

ある人物が犬娘であることを証明するのは困難を極める。

だが、その逆、絶対にその人物が犬娘ではない、と断じるのはさ
ほど難しくはない。？魔法少女？へ変身するということは、どこか

からポンと呼び出すとかそういうわけじゃない。Xという人物がいくら巧妙に変身してもそれはあくまでX本人だということだ。？魔法少女？となったXと変身していないYが同時に存在した場合に、YはXではあり得ない。

両者を並び立てることで、？魔法少女？という殻の中に不在証明を作る。そうすることでその人物を除外することができるわけだ。

つまり、アタリを付けた人間がいるその場に犬娘が現れたらその人間は容疑から外してしまつて構わないということだ。

鼻を押したら、押した人そっくりの姿形と記憶まで受け継いでくれる身代わりロボットが？魔法少女？に供給されているなんて話はないぞ聞いたことがない。まあ、その時は鼻の色でもよく観察するでしょう。

ボク自身を生贄にして変態どもをおびき寄せ、容疑者がいる場に犬娘を召還する。この作戦ならば上手く行くはずだ。

などと結局腹が減つて食べ物調達に出たついでに考えてみた。消去法作戦自体は問題ないだろうが、予測不能にして作戦の根本に関わることは、そう都合よく変質者が現れるのかということなのだ……いた。

街頭も少なく高い塀が住人の目を遮断する人通りの少ない道の方。薄暗さのさらに暗がりへと身を寄せるように、電柱の陰。サングラスにマスク、トレンチコートの襟を立てつつも裾からは毛深い臍を覗かせた、いかにも露出狂ですという男が、こちらに背を向けて様子を窺っていた。

ちよつとコンビニに買い物へ行こうとしただけでこの遭遇率。流石ボクだ。独りでいる所でエンカウトしてもしょうがないんだけどな。不運の無駄遣いだ。

だが、被害に遭うとは限らない。変態にも趣味嗜好がありそれは多岐に渡る。ロリコン……ババ専とかがボクみたいな美少年を襲つても仕方ないからだ。まだこちらに気が付いていないし、少し様子を見ることにした。

目の前をちよつとブサイクなOL風の女性が通っていった。
しかし、無反応。

次に、ちよつと顔の造作の悪い女子高生が通っていった。
しかし、無反応。

その次は、将来ルックスで苦労しそうな女子小学生の一団が現れた。

親はどうしたと思わないでもないが やっぱり、無反応。

そして……と次の通行人が現れる前に、あちらもボクに気付いたようだった。塀伝いに近づいてくる。明らかに目の輝きが違っている。男女の区別を付けているかまではわからないが、これは当たってしまったようだった。いや、ハズレなのか。

コートの前を合わせる手には興奮と緊張が読みとれる。すでにその下には男自身の汚い砲身が準備完了とされていることだろう。露出するだけならそんな力たくなくなくても良いのに。いくら見慣れたモノでも無理矢理見せられるのは嫌だなあ。

ともあれ、嫌悪の感情も形成され、これならば痴漢被害と認定されそうだった。このまま待つれば犬娘が来るかもしれない。ダメ元で牛頭にメールでも打ってみようか。返ってくれば牛頭が犬娘である確率は下がる。無駄だろういややっぱり試そうかと考えている内にそいつはやってきた。小さな身体をフラッシュライト（懐中電灯）に照らし、露出狂に立ちほだかる。

期待していたのとは違った甘ったるい声が 耳に届いた。

「魔法少女、フラッシュバニー、煌びやかに推参！」

目を疑った。

3メートルはある塀の上に腕組みをして立つ1人の女がいた。いや、正確にはそいつの右足と左足の下にはそれぞれ別の男が肩を踏み台にさせている。合計すると5メートル近い高見から見下ろす格好だった。心理的に高いところにいる相手は大きく感じるものだが、

ボクがそれを見た感想は「やっぱりちっちゃいなあ」というものだった。

割と体格の良い男との対比になってしまっているので、離れていても小ささが際だつ。

ウサギ耳のヘアバンドにもこもことした毛足の長い飾りを首と手足に巻き、白いワンピーススタイルの水着を着た女がハイヒールで立っていたのも相当にアレのだが、変態を見慣れたボクを唾然とさせたのは逆に言えばそういう奇抜さを取り払っただけでとある人物にしか見えなかったからだ。

声にしても同様だった。

話は変わるが、防犯グッズで蚊の鳴くような乙女の声がドスの利いたオツサン声に変換するボイスチェンジャーというのも最近出ているらしい。口調まで変わってしまう優れものだった。たとえば弱い女性が怯えながらボソボソとしゃべっていても気つ風のいい江戸っ子やら、大統領でも殴ってみせる特攻野郎にでも早変わり。関西弁への変換なんてどうやっているのか不思議なほどだ。外宇宙技術に頼らずとも地球人の科学技術の進歩も侮れない。

さて、話を戻すが、偽名を名乗り正体を隠すのならばそういう変声機を使ってもおかしくはない。そして事実首に装着されているのは雑誌か何かに掲載されていた最新機種だった。

こうなってくると、耳を疑ってもしようがなくなってくるというものだ。

確かに声色は変わっている。変わっているのだが、どう聞いても同一人物だ。一応使ってあの程度だったら機械に勝ったことになるのだろうか。そんな知恵と努力と汗とロイヤリティーの結晶である文明の利器を凌駕するとは逆の意味でたいしたものだ。

ともかく、フラッシュバニーを名乗る女は、微妙に統一感のとれたコスチュームを着た2人の男の肩に立ち、魔法少女の名乗りを上げたのだった。

ただ、名乗ったは良いが、そこから動かない。

露出狂の男も一緒になつて固唾をのんで見守つた。1秒、10秒、1分と経つと「見守る」が「観察する」に変わってしまった。ウサギのように膝が震えていやがるのも見て取れるのだ。まあ、ちよつとした2階建ての屋上ほどの所に立っているわけで、親譲りの無鉄砲さでもなければ飛び降りる前から腰を抜かしてしまふ高さだ。そのまま永遠と時が過ぎゆくのも覚悟したが「えい」

可愛らしい掛け声と共にフラッシュユバニーは宙に躍る。

そして、墜ちる。頭から真つ逆様に。下は硬いアスファルトだ。そのままなら大怪我どころで済まない。

しかし、地面への激突音がすることもなく、ウサ耳魔法少女はそこに立っていた。普段の彼女を知るものであればきつと魔法でも使つたに違いないと思うことだろう。だが、奇術の種は簡単だ。水着に見えるがあれば身体能力を強化する特殊な衣服だ。目にも留まらぬスピードで繰り出された両腕が落下の衝撃を完璧に吸収し、体勢を立て直したのだ。た。

まあ、多分そんなところだろう。目にも留まらないんだから見てわかるはずもない。

それにしても、最近の強化服は超極薄型も出ているのだな。サポートするのも単なる筋力補佐に留まらず、プリンスツールや独自にプログラムを組んだ動作を装着した人体に影響を及ぼすことなく再現するらしい。今の受け身もそのひとつだろう。動体視力に頼ることなく野獣の動きを再現するともつぱらの評判だ。

それだけにお値段もかなり張るのだが……そう言えば宇佐美のやつ最近高い買い物をしたらしいな。

ボクがぼかーんとしていると、オトナなのにちっちゃいその人は露出狂の元へすたすたと歩いていった。妙に音がしないなあと思つたら、ハイヒールは手に持っていた。登場では頑張つて履いてたけど、履き慣れてないものだから歩くのはつらかつたんだろうなあとしみじみ思う。どうせロリ系なんだからヒールじゃなくて良いのに。

露出狂の正面までくると、ビツと指を突きつける。ちょっと離れているので声は聞こえないが、男の方もトレンチコートの前が肌蹴ないようにしながら姿勢を正して頭など掻いているところを見ると、説教でもしているのだろうか。やがて、しきりにお辞儀をしながらトレンチコートはどこかへ消えていった。

それを眺めながらふんふんと頷いていた兎女がこちらへやってくる。ボクの真ん前までくるとVの字を指で作って高らかに宣言した。「悪は滅びたわ！」

「……いや、先生危ないから止めた方がよいよ。たまたま軟弱な露出狂だったけど、強化服同士なら先生弱そうだし」

360度どこから見ても宇佐美だった。

「え、え、なんでわかっ……じゃなくて、アタシはフラッシュ・バニー！ 宇佐美先生なんて知りません」

もはや何も言うべき言葉が見つからない。むしろ堂々としすぎて何かの罨だと思ったくらいだ。へっばこさでなりすまし裏の裏を掻こうということもなくなはなしかもしれないかもしれない。その沈黙を納得したと取ったのか、晴やかな笑顔を浮かべると捨てゼリフを残してどこかへ去っていった。

「じゃっ！ 気をつけるんだよっ、ままねきくん！」

やっぱり先生本人だろ。

だけど、断言するほどでもないのかなと呆れ半分で去っていった方向をずっと眺めていると、先生を担いでいた男2人もいつの間にかいなくなっていた。兎女の退場で混乱した意識がまとまりを持つとあの人影の片方についてひとりの人物像が浮かび上がった。

薄暗くてもなんとなくわかる。薄暗がり支配する時間に会うことが多かった相手だから。明とも暗とも付かない放課後の時間に、こどもともおとなともつかない境界線上の学校で、ボクに理不尽な暴力を振るっていた相手 寅田維賀だった。

第二章 その3

宇佐美を候補から外すべきか否か迷いながらの翌朝。

いや、まあ、そりゃ、『兔女』は宇佐美だろうけどさ。

流石にアホみたいなコスプレして間の抜けた活躍していった『アレ』を担任であると認めたくはない。認めたくはないが、現実には時に非情なものだ。

しかし、兔女イコール宇佐美が成立しても、兔女ノットイコール犬娘が成立しない限りは、中身が一緒である可能性は捨てきれない。切り裂きジャックの正体を知っていても、津山30人殺しの犯人が切り裂きジャックでないと断言できないのと同じだ。いや、それはないけど。津山の犯人は都井睦雄で、ジャック・ザ・リッパーがロンドンを恐怖のどん底にたたき込んでいた頃は生まれてすらない。夜食と朝食が胃に重たい。それ以上に気も重い。

寅田も犬娘候補から外せないということも気持ちに重しを付けている。それにもうひとり。あの時は考えが及ばなかったが、あの場にいた男は2人。あれは牛頭に背格好が似ていた。マスクをしていたので、はつきりそうだとも言えないが。

どんよりと空模様まで重くのしかかる。足取りは泥の中を引きずるようでも、学校へは通わなくてはならない。

すべてが重く沈む。こんな時は、ふわふわとして色合いも明るく軽い玉子の髪でも眺めていられたら。せめてあのアホみたいな声でも聞けたらなと思ったが、のはらの登校時間からズラして家を出たので、玉子とは通学路で会えていない。

ひとりきりで教室に入るといつもと空気が違っていた。

その正体はすぐにわかった。のはらの席に珍しく人集りができている。大勢でがやがやというよりは、のはらに対して一方的に話しかけているのが多いようだった。騒々しいが、ボクの席に着けばさほど気にはならないだろう。

まあ、その前に聞き耳立ててみてもいいか。調度、またひとり登校してきて、この状況に興味を持ったのか手近な級友に尋ねていた。

『あれ？ どうしたの？』

『のはらね、カレシできたんだって』

いや、それは幻聴だ。のはらに恋人できたぐらいであんな騒ぎになるわけがない。男も群がってるのにそういう話題で盛り上がりたてはないだろう。

「おはよお、まんまちゃん」

「……おはよう。なんだ、のはらと一緒にじゃなかったのか」

のんびりとした挨拶をしてきたのは玉子だった。鞆を提げている所を見ると今来たばかりのようだった。

「うん？ タベの内にはらちゃんが今日は先に行く。アタシが起きられないくらい早い時間だからって氣い使って。のはらちゃん優しいわあ」

頬に手を当てて目を細める。なるほど、のはらが今日は先に行くということ、自転車リレーもお休みとなり、登校時間も元からズレていたというわけだ。ということは普通に登校してものはらとは顔を合わせずにすんでいたのか。

「玉子はいいいのか？」

授業の準備をしながらのはらの方を顎で示す。少し会話をしている間にもどんどん人が集まってきていてもうのはらは頭も見えない。この分じゃ本鈴ギリギリまで人波は引かなさそうだ。

「ん？ うわっ！ 何、あれ!？」

眠そうだった目をカツと開いて驚いている。どうやら玉子も知らなかったようだ。

「知らねえから訊いてんだろ。ちょっと探ってきてくれよ」

めんどくさいなあ、と不満そうにしながらも、のはらを囲む輪にちっこい体軀を食い込ませなんとか外側付近にいる女子に聞いてくれる。

「のはらちゃん魔法少女に助けられたみたいよ」

ほれ、とケータイにTV画面からのキャプを見せてくれる。なるほど、確かに見覚えのある金髪ロン毛の？魔法少女？が、のはらと思しき少女を庇って立っている。少女の方はこの学校の制服姿だったが、のはらを知ってる奴ならあの身長で概ね予想できる。

「ああ、これか。ボクも見てたよ。なんだそんなことか」

突然目の前に現れた魔法少女にぽかーんとしてたのはらのマヌケ面まで思い出せる。

「昨日の夜、放送されたみたいねえ」

？魔法少女？の活躍は広報的な意味合いもあつて昔からTVで放送されている。もちろん放送素材は人類側では用意できないが、どこからか一方的に送りつけられてくるらしい。異星人の数少ない「お節介」のひとつだ。

「それであの騒ぎか」

人が増えてなおさらざわつく集団を眺める。

「うん、まあ、珍しいし」

「こういう時は進んでスポークスマンを買って出るかと思ってたけどな」

玉子はふふん、と余裕ぶつた笑みを返すと最前列に背を向けて腰を下ろす。

「まあ、あのコもあたしから自立しないといけないから。……いやあ、実はよく知らんのよね。いつも一緒にいるわけちゃうし、昨日は放送見るの忘れてたし」

玉子もうんざりといった態でキャプに目を落とす。魔法少女放送自体は毎日行われている。しかし、それでもすべての活動現場を伝えるということはない。ひとつには、？魔法少女？たちの活躍が地域密着型であり、たとえ地方ローカル局ごとに放送素材が割り振られていたとしても数が膨大すぎて限られた時間枠では流しきれないということ。

まあ、すべての交通事故を新聞で把握できないのと同じである。

もうひとつの理由としては、放映に適さない犯行状況も多々ある

ということだった。当然ながら性犯罪者がまともな格好や言動をしてくれるとは限らず、その性質上放送コードに引っかかることも多い。これはボクの経験からも明らかだ。

そして、被害者にとっても放送されることが好ましくないことも少なくない。

わかりやすい例では覗きや盗撮だが、被害者本人も全裸だったりあまつさえ痴態を繰り広げてるようなところを勝手に流すのは問題だろう。その昔はガラガラの野球スタジアムで乳繰りあってるカッブルなんかも放送してたらしいが。

プライバシーの問題もあるし、もしもそれが不倫現場なんかだったりしたら家庭崩壊までつながりかねない。自業自得ではあるけれども。

そういうわけで、魔法少女放送に取り上げられるのは氷山の一角で、さらに同じ学校、同じクラスとなると遭遇確率は壊滅的なまでにガクつと下がる。ボク自身も被害を受けたところを流されたのは数えるほどである。

滅多に会えない芸能人という人種に実際に遭遇すると、ファンでもなんでもなくても舞い上がって嬉しくなってしまうように、希少性というのは好奇心をいたく刺激する。その結果が今ののほらというわけだ。

「しかし、ボクだって映ったことあるのに、エライ違いだな」

あの時はのほらが静かにジューズを奢ってくれただけだった。

「アタシもいつもより15%は暖かい目で見とったよ」

「それは？生温かい？と言っただ。小さい頃から同じ町で生まれ育っていたのにどこで違いが出たのやら」

「いやアンタ、それ以外の全てとしか言えんわ。ていうか、中学の3年間くらい引越してたんちゃうの？」

まんまちゃんみんなに嫌われてるしなあともポソリと呟く。

「ぶん」

別にちやほやしてもらいたくて言った訳じゃないさ。のほらを取

り巻く同級生を睨みつけながら心の中で毒づいた。しかし、意外と内面の言葉というのは漏れやすいもので、玉子が宥めるように柔らかく声をかける。

「まあまあ、どうせあんなんすぐ冷めるわ」

「それがイヤなんだよ！ 他人が酷い目に遭ったつてのに浮かれてお祭り気分かよ」

「そんな……酷い目言つても、魔法少女のお陰でなんも起きる訳ないんよ？」

「気に入らないね。何もなかったから何だつて言つんだよ？」

玉子の一言にカチンとなつて、思わず腰を浮かせてしまう。

「どうせ画面の中でしか知らないからそう言えるんだろ？ そりゃ放送してるのはソフトなのだけだしな。でも、喻え身体に傷が残らなくても、指1本触れられなくても、そこにいたヤツにしかわからない恐怖もある。安心していても、次にまた同じことがあつたらと思うだけで身が竦んで動けなくなることもある。そういう記憶を無理矢理掘り起こすのなら、それは心を痛めつけていることと変わらないんだぞ！」

それはセカンドレイプどころか 終わらない陵辱を見せ物にしているだけだ。

ガタンツ、と背後でボクの椅子が倒れる音がした気がする。

ボクの剣幕が異常になつてきているのだらう。玉子も少し身を引いて口を引き絞る。だけど、何かそれすらも癪に障つて声も荒く大きくなる。

「安全な特等席から檻の中のショーを愉しんでいるだけの
スコン、と額に当たつたのは、のはらが投げつけた消しゴムだつた。

冷静に見渡すと、クラスの連中は静まりかえつていてボクと目が合うとばつが悪そうに目をそらす。少し熱くなりすぎてしまったかもしれない。悪気まではないのはボクにだってわかつていたはずなのに。

そんな中、のはらだけはこちらを見ていて、ボクが見返しているのに気付くと少しだけ困ったような顔をしながら口を開き

バカ。

そんな風に言われた気がした。

第二章 その4

結局、のはらとは言葉を交わさずにその日の全授業は終わった。まあ、元から話す気なんて無かったからかえってちょうど良いくらいだ。

のはらのいなくなった教室でなんとなくぼーっとしていた。降り出しそうだった空模様は午後になって回復していて、照明を落としていてもほんのりとした朱色が直方体の空間に広がる。でも、湿気を含んだ空気が教室の中のワックスだとか置きっぱなしの教科書だとかの臭いをまとわりつかせてくるのだから気分までは晴れ晴れとしてこなかった。

それなのに、ああそれなのに、どうしてこいつは一点の曇りのない パンツを見せているのだろうか。

床にひっくり返ってサーブシーンを繰り返している日辻潤を見て、ボクはその日1番の溜息を吐いた。

経緯はこうだ。

そろそろ帰ろうかと鞆を手に取ろうとしたが指を滑らせて床に落としてしまった。身を屈めて拾おうとしたところに、ガラリとドアを開け、頭にメモを生やした日辻が入ってくる。夕方になると数が増えるのは初めて知った。

メモさんの羊はキョロキョロと辺りを見回して誰かを捜しているようだった。こちらには気付いていないらしくかったから、薄暗さが手伝ったのかよっぽどフシアナなのかなだろう。そもそも注意深いヤツがあんな忘れっぽいわけがない。

まあ、ボクを探しているわけではないだろうし、変なことにならないように身を隠したままにしておいた。

「おじよ」

「どーん！」

どこからか響いた玉子の声に、口を開きかけたままつんのめって

倒れる日辻。前方1回転半してスカートはめくれ上がる。なんともアクロバティックなパンツ見せだった。

「……まったく、ガツコではそう呼ぶなど……あ、まんまちゃんおはよう」

日辻に続いて教室に入ってきた玉子は、キツと吊り上げた目をふにやりと戻し、見当外れの挨拶をする。

「おはやくねえよ。危うく明日の挨拶になるところだったぞ」

「痛た……、あ！ あ、お　烏丸さんどちらへ行かれていたのですか？」

パンツを見せっぱなしだった日辻は流れから開脚前転して体勢を立て直した。すぐにボクを見つけてぎょっとした顔になったが、気を取り直して玉子に話しかける。

玉子は日辻に半眼を向けると、ぼそつと答える。

「ウンコよ、ウンコ」

「あわわ、そんなはしたない……」

まあ、ボクも下品なことを言うのはどうかと思うのだが、お嬢様学校でもない同級生なんだし気にすることもないだろうに。

「結構長かったよな。難産？」

「そうでもなかったわ。妊娠3日の元気なお子さん。でもま、せつかく事情説明してたのにパパが勝手に帰ろうとするくらいは長かったよっねえ」

「ボクはパパじゃねえし、ババしてたのはお前だ。クソ待ちなんていつまでもやってられっかよ。思わず黄昏ちゃったぜ」

どうせすぐに帰る気なんてなかったんだけど。

「ま、誰彼時には早いわね。まんまちゃん帰ろ？　うるるんはどうぞじゅるり」と

『うるるん』と親しげな呼び名に悪意を込め、鞆をひつつかむと背を向ける。しかし、ボクは未だ床にへたり込む日辻を見て思いつくことがあった。

「あ、玉子悪い。ボクちょっと日辻とデート」

「「はあ？」」

玉子と日辻が同時に聞き返す。

「日辻、これからちよつと付き合えよ」

「な、なんで私がそんなことを……」

突然のことに抗議しようとする日辻の耳元にそつと近づき、「この前昼飯奢つてやつたる？」と囁く。貸しは返してもらうのがスジというものだ。日辻も、なぜか玉子の方を見てお許しを伺うような顔になる。

「別に玉子と帰る約束なんて今までもいくらでも反故にしてんだから気にすんな」

ボクとの貸し借りはそうはいかないけどな。もちろん、ただ一緒に帰ろうってわけじゃないが。

小声で告げると、瞳を潤ませつつも拒まない。

だが、玉子の方はなおも不機嫌そうに立っていた。

「なに？ 日辻に用でもあるの？」

「ええわ。まんまちゃんはうるるんお持ち帰りでもしとつたら」

玉子はそう言うと、ぷいと顔を背けて立ち去った。

「か、烏丸さん……！」

さすがのように手を伸ばす日辻を置き去りにして。

第二章 その5（前）

放課後、ボクは羊飼いになった。

か細く鳴く仔羊の首に縄を付け、一步一步がしばしの別れへと近づかせていく。気分を変えようと口笛でも吹いてみたかったが、流れ出てくるのは生い茂る草を揺らす風に散りゆく物悲しいメロディだけだっただろう。

とにかく、めえめえめそめそとうるさい日辻を引き連れて歩くのは気が滅入る作業だった。公園を突っ切るのは避けたのだが、外周が結構長い。一刻も早くこの駄羊を市場に売り払いたい。そう考えると、家畜を市場への出荷を見送るだけのあの歌も気楽なもんだと思えてくる。運ぶだけの業者にはダウナーな気分から逃げ込むストリーさえ与えられていないのだから。

仔羊は犠牲の象徴であり、それだけで胸を締め付けられる。

いや、悲壮感漂うあの歌は牛の話だったか。

玉子と別れてからの日辻はボクの首を締め付けようとしたけれど、まあ、ひよいと戻ってきた玉子が「仲良くお達者で」と捨て台詞を吐くと半泣きになって意気消沈してしまっただけだよ。

「なあ、日辻。いい加減泣き止んでくれよ。ボクが悪いヤツみたいじゃないか」

「……ぐす……間違っと思って」

「言いたいことだけは言うヤツだな。大丈夫だよ。ちよつとそこまで行ってもらっただけだからさ」

「……そこには複数の男たちが撮影機材とおぞましい性具を手に待っていて、私がどんなに嫌がろうとも、また無関係の人の目があるうともお構いなくいやむしろ羞恥に震える様を撮りたくてこんなところを選んだと私のセクシーな肢体を目で犯すだけではなく言葉で耳までも犯すようにねっとりとした……」

「別になんもしねえよ！ ていうか、今のご時世迂闊に手なんか出

すかよ。ボクだつて命は惜しい」

無理矢理じゃなきゃ一応かいくぐれるかも知れないことは黙つておこつ。誰かに止められるまでもなく、ボクはそんなことはしたくとも思わない。あと、どさくさに紛れて自分を過大評価すんな。

そうこうしている内にボクらは巽さんの店まで来ていた。

「おう、フクライク久しぶりだな」

「何言つてんだリユウ、昨日も来てただろ。おつ、猫まん、そつちのお前のコレか？」

のんびりと談笑していた巽さんと巳津さんが、こちらに気付いて挨拶してくる。『コレ』と小指を立ててきた巳津さんはスルーしてやりたい。

「巽さん昨日はどうも。今暇ありますか？ あと、こいつはそんなんじゃありません」

「ひひっ、わかつてるつて。ちんまりしてカワイイけど、どう見てもお前の趣味じゃねえもんな」

日辻は異様な髪型をしている以外は見た目だけなら可愛いんじゃないかと思うが、まあボクの恋愛対象じゃないのは合ってる。なぜわかるのだろう。

チラリと日辻を見ると、ボクの背中に小さな身体をさらに縮ませるようにしていた。巽龍と巳津辰美といえは去年まで我が校の有名なそれも悪名的なものを轟かせていた人たちだ。巽さん側は日辻を知らなくとも、日辻は噂くらい耳にしたことだろう。緊張するのも無理はないか。2人ともバカでかいし。

「で、どうなんですか？」

ダブルドラゴンを誘いにきたのが目的だ。

「ん？ ああ、暇かつて？ 客足は落ちたしこれから店仕舞いしようかと思つてたけど、営業中だぞ、営業中。立ち話くらいなら付き合っけどな」

巳津さんはわざとらしく腕まくりなどしているが、そこまで真剣味は感じられない。

「そんなあ、ちょっとそこまで散歩付き合ってくださいよ。お2人とも」

「お2人って店ほっぽって離れられるかよ。散歩なんかその可愛い嬢ちゃんとやれ、色男」

日辻を指さす。と、そこでボクも日辻の背を後ろから押し出す。そして、満面の笑みを意識して言う。

「あ、こいつ店番に使えますから」

「え？ おい、猫魔……君、聞いてないんだけど」

ボクに指名された日辻はぐうっと目を押し潰すようにして睨んでくる。

「これが対価だよ。店番だけでボクの貸しをひとつ消化できるなんて出血大サービスだぜ？」

もちろん、断るなら次はどんな無茶を要求するかわからないからなど脅すと、日辻は青ざめながらも「お願いします」と2人に向き直って頭を下げる。

「ん〜、じゃあ、ま、しゃあないか。リュウ、猫まんとお散歩しようぜ」

厭々という素振りも見せず、早々にエプロンを取る巳津さんだった。

仕事を放置することに巽さんは渋っていたが、客商売で客がこなけりゃ仕事はないだろと巳津さんに尻を数度ひっぱたかれると重い腰を上げた。ここはカカア天下になるんだろう。計算通りだ。

「あ、今作り置きしかないから、売る前に焼き立てはできねえけど良いかって確認しておいてくれよ。楊枝追加するならそこいにある。他は青ノリ、かつお、紅シヨウガ、ソースと増し増しのリクエストあったら追加OK。マヨネーズはウチじゃやってねえって断れ。そこはこわりだ。金はその袋入れといてくれりゃ後で計算すつから。お釣りもそっからな。タチの悪い酔っ払いとか来たらそのボタン押ししてくれりゃすぐ飛んで戻るからよ」

軽く支度を整えた巳津さんは、ワゴンの中に立たせた日辻にテキパキと指示を出していく。ぼそぼそと恨み言を重ねていた日辻もまくしたてる勢いに流されて口を開く余裕もない。新しいメモを取りだしてはせつせと髪に結びつけていく。傍から見ると結構異常な光景だが、巳津さんは気にする様子もない。巽さんはごつごつとした顔に埋め込まれた小さな目を丸くしていたけれど。

「よし、覚えたな？ ああ、覚えてなきゃテキトーにノリでやってくれりゃいい。金勘定間違えたらこいつに請求するから、なんでも好きなもの食っても良いぞ」

はて、こいつとは誰のことか。業務上横領を教唆しつつ笑っている巳津さんを遮って、ボクは再度本題の「散歩」を促す。街灯がパチパチと点き出した。ちょうど宵闇が押し寄せて良い頃合いだ。

2人はいつもの営業用Tシャツの上にベストを羽織る。こちらはブライベート用の真正正銘のお揃いだ。巽さんがタオル頭巾を取ると針金のような髪を逆立った。逆に巳津さんはツバ付きの帽子を被る。

「じゃあ、よろしくな」

ボクは日辻に手を振る。

「屋台が爆発炎上しないようにだけ気を付けてくれれば良いから」
巽さんは「えっ？」と目を丸くして驚いたが、巳津さんは冗談だとも思っただのかカラカラと笑っていた。

「おい、フクライ、この子1人にして大丈夫なんだろうな？」

「え、ああ、はい、大丈夫でしょ。……日辻、お前何歳だっけ？」

「16だよ。私は早生まれだからな」

だから私に手を出すのならばお前が考えている以上にハードルは高いぞ、見た目に騙されても法律は非情だぞ、あんまり近寄ってもだめだからな、などと訳の分からない供述を繰り返すので無視する。「なるほど、免許は持ってないな。え？ 来年は教習所行ってみたい？ 龍さん、こいつが原付で大破炎上したことを思い出して大人しくしてれば大丈夫っす」

「俺は無免許運転という恐ろしい言葉を思い出したぞ」

「心配性ですねえ。いくらなんでもそりゃ無理ですよ」

「そ、そうか……?」

「公園こうえんつて、実は私有地なんですよ。公けの園なのにね」

「俺はとてつもない不幸に見舞われる厭な予感がする。ミツと2人で行ってくれ」

「福が来ると書いてマネキですよ、ボクは」

素早く両手で25通りの幸運のサインを作ると、龍さんは幾分表情を弛め

「車から見たら福が離れてくつてことじゃん」

「!?!」

巴津さんの余計な一言で顔面が裏返るほど引き攣った。

「くれぐれも火気厳禁だからな。オネシヨするぞ」

「こどもじゃないんだからわかつてるよ!」

頬を膨らませている日辻に念を押すと、やっぱり龍さんは「フクライ、本っ当つに! 大丈夫なんだろうな?」と狼狽える。終いは巴津さんにケツを蹴り上げられていた。

「大丈夫ですつて」

まあ、充分離れてれば、ボクの身ひとつくらいは安全だろう。

さて、変態どもが潜んでそうなポイントへ「散歩」と行きますか。

第二章 その5（後）

おかしい。

寡黙な龍さんの代わりに巳津さんの冗談に付き合いながらもボクは焦っていた。いつもならこれだけ歩き回れば2、3人は引つかかってくるのだが。もちろん、ボクを狙う変態どものことだ。でもそりゃそうか。

夕日に伸びる影を見て溜息を吐く。凸凹に並んだ3つの影はまるで小さな子供の手を引く親子のようだった。

大きく遅しい父親は龍さん。長い髪を揺らす細長い母親の影は巳津さん。そしてボク。

高校生男子として決して極端なチビとは言えないほどのボクが未修学児に見える。それくらい両脇の2人のシルエツトは大きい。そして、実物はさらにごつい。服を押し上げるみっちりとした筋肉の陰影は影絵だけでは決して浮かび上がることはない。

こんなプロレスラー夫婦みたいなのに囲まれてりゃ性犯罪者も躊躇するだろう。

強化服を着ていれば良いというものではない。生物的な強者というものは、ただそこにいるだけで格下連中を臆病という病に取り付かせる。恥知らずの勇気を与えるために困になったは良いが、大きな体に隠れてボクという餌が見えにくくなっているということもあるだろう。

これじゃあ折角日辻への貸しまで費やして2人を犬娘と鉢合わせる計画が台無しだ。ボク自身はこの2人が犬娘である可能性は低いと思っているが、潰せる可能性は早めに潰しておきたい。

それなのに、

「なあ、猫まん。お前蚊に食われたらやっぱ爪でバツテン付けて潰すよな？」

「いや、ボクは痒みはペシペシ叩いて我慢してすぐキンカン塗りま

すよ」

虫さされの話とかしてる場合じゃないだろう。体質なのか昔から刺されやすいしシーズンが近付けば性犯罪者どもと同様に切実な話にはなるのだけれど。

でも、今は藪蚊はどうでも良いんだよ。

どうしよう。今日は諦めて後日、日を改めてから1人ずつ同じことさせてみるべきだろうか。2人まとめてよりは遭遇率が上がりそうだ。

ボクが退くか進むか決めあぐねていると、そいつらはやってきた。無言で姿を見せたそいつらは、一方は筋肉質の力士のようにがちりと、他方はバスケ選手のように背が高い。それでも龍さんと巳津さんに比べるといくつもサイズか下回っている。迷彩柄の上を着込み、頭部にはゴーグルとマスクをして顔を隠している。しかし、淫蕩に揺れる眼差しは確実に下半身の淫らな欲望を滾らせているに違いない。存在自体に性犯罪臭がないために、接触を待たなければ？魔法少女？は喚ばれてこないだろう。

それにしても、見た感じではかなり危険な雰囲気だ。性欲の解放よりもまずは制圧を考えているであろう隙のなさは、ボクの経験からいって強姦魔とかに多い。暴力によつて抵抗を奪い、卑劣で卑小な妄想を遂げるために他者を蹂躪する人の皮を被った悪魔どもだ。

一見するとただのミリタリーマニアが着てるような服装だが、あの下には強化服が着込まれているのだろう。不自然な盛り上がりか背筋に冷たいものを走らせる。

おそらくボクに不法な接触をすればそれをトリガーに？魔法少女？はやってくる。だが、それは同時に多少の攻撃を覚悟しなければならぬことだ。掠っただけでも大怪我を負わせられるであろう相手に。

だが、覚悟なんて自分を囿に犬娘と決着をつけようと思った時点でとっくにできている。もしかしたら骨の2、3本も折られてしまいかも知れない。それでも構わないという決意はある。後はそれ

に体が追いつくだけだ。震える足を地面から引き剥がし、前へ、前へ進まなくてはならない。自分自身を追い越すために。

自分でこうあるべきだと決めた姿へと距離を縮めるのに苦心するが、さらにその先までも軽々と追い越していく影がふたつ。

照り映える背中を赤々と燃やし、巨大な壁となつてボクの歩みを止めさせる。

「フクライ。ちょっと下がってけ」

異龍の地鳴りのような声が巨軀を揺らして轟く。

「すぐ片づけっからよ」

巳津辰美は荒野を抜ける風のようにボクの心をかき乱す。

怒濤、疾風の2人の姿に見惚れてしまったが、相手は強化服を着込んでいるのだ。止めなければ。あれは人間相手を想定していない。機械の力を借りた破壊力を浴びせられては、いくら勇名を馳せたダブルドラゴンであつても危ないはずだ。

「だめです、そいつらは」

注意を喚起する間もなく、動いたのは変態どもが先だった。龍さんと巳津さんそれぞれに分かれて向かつていく。筋力強化型としてもダッシュ力であれば人間のそれとは比較にならない。文字通りケダモノのように襲いかかる。

しかし、その瞬間ボクは見た。ゴーグル越しの視線が、一瞬ボクの上を通り過ぎ、がっちりとした方が龍さんに、のっぼが巳津さんに、それぞれねっとり絡み付いていた。ぞわりとくるのは、自分に浴びせられるそれをより客観的に見られたからだろう。厭な話、慣れてしまっていたが、第三者にして体験者支店ではこうまでおぞましいものだとは。

ていうか、ボクじゃなくてガチムチ兄貴と凶悪女王様が目当てかよ。想像以上の変態だな。

「」

鼻歌交じりに巳津さんの長い脚が這い上がる。全身が1本の口ー
プになったようにくんだり曲がって男の攻撃をかわす　と同時

に靴先が喉に食い込む。と、思う間もなく腕や脚の裏側へと蹴りを叩き込む。体勢や攻撃する部位によって踵、つま先、拇根、足刀と器用に変えての連撃だった。軽く蹴っているように見えても一撃一撃の重さも並大抵ではないだろうことも男の体が縮こまっていく様子でわかる。

そして男が呻きながらも繰り出す反撃は巳津さんには当たらない。見た目のスピードだけならば男の方が上だろう。しかし、攻撃を誘導し最小の動きでかわす巳津さんにはいいようにあしらわれているだけだ。

強化服がパワーやガードを上げたとしても、当たらなければどうということはないし、剥き出しの生身への打撃は普通にダメージを負う。そして、蓄積したダメージを背負えるほどには男の基本性能は高くない。

最後は強化服の上から蹴り飛ばされ、仰向けになつたまま起きあがることはなかった。

そして、龍さんの方へ目を転じると、こちらも心配に及ぶほどではなかった。

「ふん！」

力で圧倒したはずの巳津さんが華麗であつたと思えるほどに、龍さんは豪快だった。

相手を易々と抱え込むと、関節技の要領で身動きを取れなくする。そして、下半身を覆う強化服の要となる部分へと爪を食い込ませ

一気に引き千切つた。それを機に逃れ出た相手が苦し紛れの上半身だけとはいえどおそらくは岩をも砕く剛拳となつた右ストリートに合わせて拳を繰り出す。

派手な音を立てて砕け散つたのは、仮初めの力を与えていた機械の手の方だった。戦争に使うわけではないにしても過酷な労働環境下を想定し耐久度もそこそこあるはずのメタルフレームが、熱々で外はカリッと中はしっとりした柔らかかったこ焼きを焼いていた人間の手によって引き裂かれる。

強化服というのは、繊維状の金属を極小の機械で制御するもので、変形や緊張、弛緩を瞬時に行うことで装着者の運動性能を飛躍的に向上させ、時に人体を守る装甲となってくれる。

それをこつとも容易くあしらうなんて計算違いもいいとこだ。同じ学校というところで武勇伝は耳に入ってきてたけど、話半分で聞いていた。やれ牛の角を折つただの熊を倒したただの大陸から渡ってきた殺し屋を半殺しにしたただの信用に足る内容ではないと思っていたからだ。とんでもない、実際はその倍以上だ。

「あ、す、すごいですね……」

犬娘に対して以外の礼は用意していなかった。暴漢のターゲットがボク自身ではないということから感謝の念も湧き出すことはない。結局、口を吐いて出てきたのは間抜けな贅辞だった。

ところが、讃えられたはずの本人たちの反応は薄い。きよとんとして、一瞬何を言われたかわからなかったようだ。成人間近にもなつてよちよち歩きを誉められりゃこういうリアクションにもなるのだろう。

「は？ あ、ああ、これか。まあたまに金持つてるバカがこんなを着て乗り込んできたからな」

「真の強さは肉体に宿らない」

鋼の肉体そのものの人が言っても説得力がないなあ。

まあ、そりゃそうか。強化服なんてただの作業服だしな。ただ勝ちたいだけの『金持つてるバカ』ならそりゃ使ってくるよ。それでもなお不敗神話を崩さなかったのだから？魔法少女？の出る幕もない。

誤算の上に誤算を重ねて何をやってるんだ、猫魔福来。獣欲を出す間もなく、伸びている男どもを見下ろして嘆息する。

そこに追い打ちを掛けるようにあまり会いたくない人物の声が届いた。

「あら、マネちゃん。おひさ」

時間的にこれから出勤なのだろう。化粧も衣装もあまり濃くない

騎馬駆がくねくねと揺れながらウィンクをする。

「……騎馬さん、もう2年くらい会ってないかと思いましたがよ」

出会う前に戻ってしまえ。片手を振って応える。もちろん、挨拶的な意味合いではなく、ウィンクに続いて飛び交う投げキッスをはたき落としてつつ向こうへ行けと想念を込めている。

「やあねえ、サラよ。サ・ラ。それに昨日会ったばかりでしょ、ダブル忘れんぼ」

「はいはい、その騎馬駆さん男性38歳さんでしたね」

ひよんなことから本名から年齢まで知っているのだが、オカマに現実には厳しいだろう。まあ、いやんいやん言っても堪えてるようには見えないのがしゃくだが。

ところが意外な反応を見せたのは、変態どもの襲撃にも平然と対応していた龍さんたちだった。敵めしい顔に埋め込まれた眼球をくわつと見開いた姿は何かの光線でも出そうな迫力がある。巴津さんはそれに比べたら大人しいものだったが、冷や汗を垂らして口笛を空吹きしてしまっている。

2人はお互いを見つめ合って何かの確信を得たらしい。こくりと頷くと、

「騎馬さん、お久しぶりです」

まず龍さんが腰を折って頭を下げた。接客でも滅多に見せない姿だった。巴津さんはあくまで軽く「どうも」挨拶をするが、引きつった笑みでぎこちない。

「ああ、巽龍に巴津辰美か。元気にしてたか？」

そのバリトンの響きはどこから流れ来たのか。源流を遡れば、そこには紅に彩られた口唇がある。しかし、どんな女物の服を着ても似合わない怒り肩の長身よりも、ややびっちりとしたパンツにもっこりと浮き出た股間の一物よりも、取り出した煙草をくわえた口の周りを薄く覆う青い髭よりも、ただ何気なく発せられた素の声は、騎馬を何よりも男として意識させる。

煙草の煙をふーっと吐き出す騎馬と巽・辰美のコンビは親しげで、

どのような関係か気になった。

「あの……お知り合いだったんですか？」

「……まあ、色々とな」

元から口数の少ない龍さんだが、今は歯切れも悪い。それを見かねて巳津さんが言葉を添える。

「騎馬さんさ、刑事なのよ。ケーサツ」

「まあ、元 だがな」

そう答える一瞬に眼がギラリと光った気がした。なるほど、尋常でない気配は感じられる。

「え？ ケーサツ辞めちゃったの？」

「じゃなきゃオカマバーで働くかよ。このご時世再就職も大変なんだよ」

紫煙に目をしょぼつかせるも、半分は演技のような。

「へえ、じゃあ、巳津さんたちと知り合いってのは……」

「……まあ、察してくれや」

荒事の多かった高校時代、そりや警察のご厄介にもなるうというものだろう。その後、誰も当時のことには触れなかったが想像はつく。

「じゃ、マネちゃんまたね」

煙草一本分を吸い切ると、それまでの男らしいナリをどこかへすっ飛ばし、オカマバー『パドック』のホステス、サラはやはり気持ち悪いほどにくねくねと去っていった。

「あの人、元刑事だったんですね……その頃からアツチの気が？」

ものすごく長く感じた数分間でげんなりとしたボクは、どちらへともなしに呟いた。その呟きを拾ってしまった巳津さんも目と口で平行線を作りながらぼそぼそと呟く。

「うん。少なくともアツチじゃなかった気がするんだけどなあ……」

「仕事熱心な人だったぞ」

「ま、『元』なんつっても、実は潜入捜査してるだけかもな。モグ

ラのように」

「なるほど、オカマだけに掘る……」

しょうもない冗談を言ったのはボクではなく龍さんだったが、ボクらは揃って聞かなかったことにした。

強化服相手に圧勝する怪物2人と眼光の鋭い元か現かわからない刑事か。彼らに囲まれててなお襲ってくることはないだろうな。

その日はそこまでにした。

第二章 その5（蛇足）

ああ、そうそう。これは別に忘れていたわけじゃないのだけれど、店番を任されていた日辻の所に戻ると、龍さんが「動いているような気がする」などと言い出して一悶着あった。動いているというのはもちろん龍さんの城であるワゴンのことで、巳津さんは最初の内は「動いてねえって」などと笑って取り合わなかったのだが、「位置を覚えている」「タイヤの周りに真新しい跡が」などとしつこく食い下がり、日辻は妙に目を反らすわ声は震えて上擦っているわけで、こりゃ完全にクロだなと思っていたが、もちろん龍さんから同意を求められた時には「気のせいじゃないっすか？」と返しておいた。早く帰りたかったし。それでもしつこく食い下がる龍さんにブチ切れた巳津さんが相棒のでかいけつに蹴りをかましていた。

この日、ボクは巳津さんが恐れられる本当の理由を知ったように思う。巳ひの字を持つ女性の脚には鬼が宿っている。龍さんも蛇に足を付け足すような余計なことをしなければ良かったのに。

ボクは蛇足なんて金輪際やらかさないのでおこうと心に決めた。

第二章 その6

お客様が神様なら、山の神も貧乏神も疫病神も死神もいることだろう。即座にお引き取り願いたい。

諸手上げて歓迎の意を表して拍手喝采平身低頭千客万来拝み倒してわざわざ呼び出そうとしなくても、変質者サマというのはやってくる。

今日のお相手は盗撮魔だった。居残りでランニングをさせられた汗を流そうと、学校のシャワールームを使っていたボクは嫌な気配を感じた。ぬめつとしながらも、ぎしぎしと締め付ける 蛇のよくな不快なまとわりつきだ。

実のところ、ボクは覗き被害にはあまり遭ったことはない。いや、意識していないだけで、ないわけではないだろうが、ボクだって男だし、裸やトイレをちよろつと見られたくらいじゃそこまでの抵抗を感じはしない。

ちんこ見られるのがイヤなら大勢で風呂にも行けないじゃないか。どうせ修学旅行も声を掛けてくれる連中なんていやしなかったからこつそり入ってたけどさ。そもそも、このシャワー室だってちよつと顔を横に向ければ長いのも短いのも太いのも細いのもオトナなのやコドモなのや黒いのや白いのやといったモノが目に入ってくるような構造だ。

まあ、公衆共同施設ではあるし、秘め事に臨むかのようなギンギンにおつ勃てるようなものは目にしたことはないが。今この瞬間までは。

ズボン越して直視しなくて済むのは不幸中の幸いだろうか。

まあ、まだ余裕があるから続けるが、そもそも、覗きに関して1人の男性として理解できないということもある。もちろん他の性犯罪だって許容できるわけじゃないが、見るだけで完結する性欲というのがどうも納得がいかないのだ。

裸見たいならポルノでも見てろよと。

覗きだろぅが強姦だろぅが？魔法少女？にこっぴどい目に遭わされるのは同じことなのだし、どこにそのリスクを背負う理由があるのかがさっぱりわからない。一縷の望みに賭けるといふ痴漢気はないのか。他人のあられもない姿を見るといふ行為で完結してしまうこの犯罪に、さほど憤りを覚えられないでいるのはその辺りが原因なのではなかるぅか。

でもまあ、目の前に荒い息した変質者が現れりゃ話は別だ。

振り返るとカメラ片手にまん丸メガネを掛けたオッサンがいた。裸を撮られたくらいで騒ぎはしないけれど、良い気分じゃないのは確かだった。

覗きだけならともかく撮影されてるとなると流出とか困るなあ、そろそろ犬娘が来てもおかしくないんじゃないかなあ、でも今来られても意味ないんだけどなあ、水の流れる音をBGMにしばし男と睨み合いを続けているとカタンと物音がする。

なんだろうとそちらを向くと、入り口に隠れるようにして犬娘が立っていた。

さつさとこの盗撮魔をやっつけてくれないかと待っていても、なんだかもじもじと入りにくそうにしている。いつものような薄着を晒け出すのが恥ずかしいのでもないだろう。それとも隠れた半身は変身失敗で何も身につけていないのだろうか。まあ、魔法少女システムはそんな柔なもんじゃないけど。

？魔法少女？でも出待ちはするということだろう。ワープに近い移動方法を持つ？魔法少女？たちでも、いついかなる時も犯人の目の前にどかんと現れるわけではない。この間のフラッシュ・バニーの時も、来るだけは来ていたのかもしれないな。出番を取られて微妙に気まずくしていたのだろうか。

そんなことを考えていると、バスタオルを投げつけられた。そういえば、裸だった。タオルは脱衣場に置いてある。誰のものかわからないのが嫌だったが、じつとりと湿っていたりはしなかったので

我慢してやろう。

「別にお前になら見られても良いんだけどな」

タオルをひゅんと回して肩に引っかけると未だ自由な下半身がぶらんと揺れる。まるで馬車馬のような荒い息になる覗き魔と、満開のサクラのようにかんばせを染める犬娘。

？魔法少女？へのセクハラというのはどうなのだろうか。性犯罪被害者が性的な意味で露出の高い格好になるのは不可抗力といえるだろう。だったら猥褻物を見せられることも職務上の危険として織り込まれているはずだ。もちろん？魔法少女？だからといって何をされても良いということはない。しかしながら一般的に見て極々弱い立場なのは被害者に他なら無い。それでもなお被害者に対しても無理を強いるのだろうか。

しばし思索に耽っていると、バキンとコンクリートの壁をぶち抜くような音が聞こえた。『握力だけで人が殺せるなら』 無言の圧力が襲いかかる。やれやれ、隠せば良いんだろ。隠せば。それと握力で人を殺すのは普通だ。

ボクが前を隠している間に、カメラを叩き壊しその所有者をも床に這い蹲らせたのであるう犬娘は立ち去っていた。

どこか幸せそうな盗撮魔を見下ろす。壊れたカメラが捉えた最後の画は羞恥と怒りで真っ赤になった見た目だけは年端も行かない少女だろう。気持ちが悪い。やっぱこいつらの思考も嗜好もわからない。

などと先日は思っていたものだが、『見る』という行為にはその先があるのではないだろうか。想像するだけでもおぞましいのだが、ボクを撮っていた犯人もきつとボクと触れ合いたったのではないか。しかし、それは世界の果てまで遙かな旅をして天を貫く神々の山の頂を目指すようなものだ。そこに実る禁断の果実を求めて。人

はそれを『現実』という。そこに至るまでの困難に諦め、麓の温泉でもゆつくりと、うつとりと、眺める愉悦を見つけ出してしまったようなものなのだろう。

まあ、そんなことは想像というか妄想というかボク自身が今思っていることを当てはめてしまっただけだ。

玉子の横顔を見て、本当にこいつはキレイだなと思ってしまっただけだ。

見ることが目的ではなかった。？魔法少女？探しの成果が上がらない。そこに焦りを感じ、直截的になしかなかなか手の届かない手段を用いるべきかと悩む姿勢が「ちらちらと横目で伺う」という仕草に表れているだけだ。

どうも成果が上がらない。焦る必要などないけれど何も動かないことに不安を感じる。だから、玉子と下校していつい口を滑らせってしまった。

「玉子……猪塚ってヤツ知ってるか？」

「名字だけじゃわからんよ」

それもそうだ。それにイツカと読んでしまっていたがイノツカかも知れないしイノシツカや見間違えてシシブタである可能性もある。

とはいえ、他に提示する情報がない。いや、下の名前も知ってるな。……太。か……、いや、ふ……なのか？

「あれだ、股しゃぶろうみたくない」

「……セクハラで魔女っ子呼んでもいいかな？」

「あ、いや、間違えた。それはシモネタでモジった方だな。風の又三郎っぽいので『太』が付く。なんとか太みたいだな」

「ホントに間違えただけか……？」

鞆を胸に抱いて疑いの眼を向けてくる。人を信じるピュアな心がないのかこいつは。

「ボクにだって間違えることくらいあるさ。あ、風太だ。風に太いで風太。もしかしたら、かぜたかも知れないけど」

「ああ、なんか動物タレントでそんな名前の子あったねえ。腹グロの。性格の悪い。まんまちゃんとお揃いで」

「あれはそういう種類だ。性格は関係ねえよ」

「猪塚風太……猪塚風太。知つとるよ。ウチらが行つてた中学にまだおるのと違うかな？」

「なんだ、中学生かよ」

「ちよつとほつとするのはなぜだろう。中学生と言えば沼でザリガニでも採って喜んでる年代だ。それは言い過ぎにしても2〜3年前なのにリアリティがわからない。そんな隔絶した世代だ。」

「中坊つても、そこいらの高校生よりずっと背え高いしねえ。中々の男前よ？ スポーツ万能でモデルもしてるとか。漫画みたいなモテ方して大学生、OLとも付き合ってる……なんて噂が立つほどの根も葉もなかったらしいけど。来年はウチの高校入るかもしれんしねえ。海外留学しなければのハナシで」

「何そのスーパー中学生。リアリティの欠片もないよ。」

「え、そ、それでどういう奴なんだ？」

「んー、特徴としてはそんなもんかなあ。あ、まんまちゃんの近所の子よ」

「なるほど、近所……って周良町か?!」

「んにゃ、ムサシ。あれ？ どっちかな？ ……でもどっちでもいいでしょ？」

あの辺りは町境が複雑過ぎるといふ玉子の文句は耳に入つてこなかった。

武蔵町なのか……住所はまず最初に考えるべきだった。これで猪塚が犬娘という線は薄くなったな……。

「どしたの？」

「いや、なんでも」

きつと顔は引きつっていたらう。相当追い詰められてしまったのだから仕方ない。とうとう言っちゃいけないことまで口にしてしまふことになる。

「の、のはらはそいつのことどう思ってるんだ？」

「そこまで知らんわ。のはらちゃんに聞けば？」

に、っと人の悪そうな笑みを浮かべる。事情は知ってるけど、あえて教えないという双方の友人として妥当な態度をとりますという意味だろうか。それとも、真綿で首を締める快感に酔いしれる狂気の死刑執行人の顔なものだろうか。

「ボクだって知らないさ」

「なんだ、ホントに知らんだだけか。普段よく話さんの？ オサナナジミさんでしょ」

「お前は幼少期に過ごす時間が多かったというだけのことと過度の幻想を抱いている」

「ふうん、……ならまだ望みはありそか」

ギリギリ聞き取れるかどうかの彼女にしては珍しく小さい声で呟いた。

「じゃあ、また明日」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9327v/>

わん・サイド・GAME 魔法少女を探せ！

2012年1月14日01時45分発行